

資料 2

指定研究（2年次）

成果の概要報告書・資料

社会・理科・英語・保健体育・進路指導

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）

指定研究（1年次）

経過の概要報告書・資料

国語・数学・道徳・美術・技術・家庭・特別活動・総合的な学習の時間

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）

（美術・技術・家庭・特別活動・総合的な学習の時間は指定の2地区のみ）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 佐藤 直己
(学校名：糸魚川市立青海中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 社会科
- 2 郡市名 糸魚川市 3 会場校 糸魚川市立糸魚川東中学校
- 4 研究主題

根拠を基に深め合う生徒

5 主題設定の理由

主題を設定するに当たり、研究推進委員会では「社会科における学び合う生徒の姿」について協議を行った。その中で理想の授業展開についてまとめ、「学び合い」を自分の考えを再構築するための過程と位置づけた。社会科での学び合いを「多様な意見を尊重し、検討・吟味することで、社会的事象を多面的、多角的に捉え直す」活動の場とすることで、個に振り返ったときに、社会的な見方考え方を働かせ、自分の言葉で課題に対する立場を、根拠をもって表現できるようになると考えた。

上記のことから、研究主題を「根拠を基に深め合う生徒」とし、質の高い学び合いになるような手立てを構築することとした。

6 研究の方法と内容

質の高い学び合いを達成するために (1) 課題設定 (2) 適切な思考ツールの選択 (3) 話し合いのスキルの向上に焦点を当てる。

(1) 適切な思考ツールの選択 … 課題解決に適する思考ツールを活用する。

ホワイトボードを授業で使用する際、意見や考えを漠然と羅列してしまうことがしばしば見られる。UDの視点から見れば「見える化」という点で意味のあることではあるが、思考を深めるといふ点では効果はあまり期待できない。そこで、課題に見合った思考ツールを1年目は教師が準備し、生徒の思考力を育成する。

(2) FGスキルの向上 … ホワイトボード・ミーティング® の手法を取り入れる。

グループ活動での話し合いにおいて「意見を聞く」→「ホワイトボードに記入する」だけでは、意見を共有するのみになってしまう可能性があるため、ホワイトボードミーティングの手法を積極的に取り入れる。中でも「クエスチョン (質問)」スキルの向上に力を入れ、話し合いの内容がより一層深まるようにする。具体的には、オープンクエスチョン (例えば? 具体的に? もう少し教えて? など) で相手の意見の具体や根拠を明らかにしながら思考を拡散させ、クローズドクエスチョンで思考の収束に向かえるようにする。

7 研究の成果と課題（KPTの手法で「手立ての有効性」に焦点を当てた）

（1） 成果（Keep）

- ① オープンクエスチョンを活用することで、互いの理解が深まるだけでなく、説明する力や聞き手の聞く力を育成できる点で大変有効であった。また、説明も他者意識をもってわかりやすく説明する力が育まれる。他教科でも実践しようすることで、全校体制での授業改善に繋がる。
- ② オープンクエスチョンを活用しながらKJ法を行うことで、ゴールに教師が導くのではなく、生徒たちの力で社会的事象を結び付けることができていた。また、全員が参加でき、生徒1人ひとりの視点の広がりや深まりが見られた

（2） 課題（Problem）

『我がこととして捉えることのできる課題』の定義はどのような課題か」という話題になった。「自分の身近なコト・モノ」＝「我がこととして捉える」ではなく、「もっと知りたい、解決したい、深めたい」というような知的好奇心や探究心をもてる工夫が必要であるとの指摘があった。

（3） 今後に向けて（Try）

- ① 本時では東海地方を題材とし、東海地方の自然条件と社会条件を探ることでその地域的特色を見出す授業であった。本単元での学び方を他地域の学習でも生かせるようにする。
- ② 生徒が住んでいる地域とは空間的に遠い地域の学習であっても、その地域で起こっている課題は、生徒が住んでいる地域の課題と共通していることがある（人口問題、自然災害など）。他人事として学ぶのではなく、その課題が生徒自身の生活や体験に関連している題材を提示することで、我がこととして捉えられるようになる。

（4） ご指導から

- ① 知識の構造化を意識した授業改善を行う。調べたり、学んだりした知識が意味をもって結びつくことで社会的事象の捉えが再構築されていく。そのような授業展開を仕組んでいくことで、生徒は課題に対して問い続けていけるような問いや、単元を貫くパフォーマンス課題の設定の工夫が重要である
- ② 小学校で自動車工業について学んでいる。中学校では「知らないだろう」で、導入に入るのではなく、系統性を意識して課題設定を行う。その際には、社会参画の視点や生徒自身が課題を見つける、解決のための取組を考える、互いに発信して多様な考えに触れながら思考を練り上げる等、学びがスパイラスで続いていく学習になることを意識する。

8 運営の成果と課題

（1） 成果

デジタルとアナログのハイブリッドで研究会を行った。協議会の全体会を zoom で行い、ブレイクアウトルームでの協議ではホワイトボードを使って行った。全体共有の際、ホワイトボードをアナログにしたことで見やすかった。また、運営に対して市教研の協力体制が整っており、ファシリテーター等の役割分担がスムーズに行えた。

（2） 課題

糸魚川市外の参加者が少なかった。より多くの先生方が参加できるよう、教育委員会や校長会等の機関に率先して情報を提供する等の働きかけをする必要があった。

- 1 部会名 上越社会
 2 郡市名 糸魚川市 3 会場校 糸魚川市立青海中学校
 4 研究会開催期日 令和 3 年 11月 2日 (火)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越市立和田小学校・校長	小池 修
(2) 研究推進責任者	糸魚川市立青海中学校・教諭	佐藤 直己
(3) 会場校責任者	糸魚川市立糸魚川東中学校・教頭	宮田 雅仁
(4) 研究推進委員 (授業者)	糸魚川市立糸魚川東中学校・教諭	飯塚 隆雄
	糸魚川市立糸魚川中学校・教諭	佐藤 優一
	糸魚川市立能生中学校・教諭	小笠原 洋一

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6月17日/ 糸魚川東中学校	6	異動に伴い、委員が大きく入れ替わったことから、過去2年間の研究の成果と課題について共有した。新型コロナウイルスの影響により、研究会の在り方を模索し、すべてオンラインで行うことが決定したが、オンラインで行うにしてもどのようなことができるかを、ホワイトボードを使って協議した。
2	7月30日/ 勤務校 (zoom)	6	Zoomの画面共有機能を使って、オンラインで単元構想について検討した。全員が自由に書き込みできるよう、ホワイトボード機能を活用したことで、スムーズに協議することができた。ここでは、どの場面で手立てをどのように打つか、を主な論点とした。
3	8月24日/ 勤務校 (zoom)	6	Zoomの画面共有機能を使って、指導案検討を行った。指導案を共有し、全員が自由に書き込みをできるように設定したことで、細かな部分まで検討することができた。ここでは、授業のねらいと研究主題や手立てが一致しているかを論点とした。
4	9月28日/ 糸魚川東中学校	6	ブレ授業を行った。授業を、動画配信アプリを使って配信するため、タブレット端末を5台(板書用1台、全体2台、抽出グループ1台、抽出生徒1台)を使用して授業を録画した。タブレットの置く位置や集音について課題が見られ、その後の協議会では、授業の検討(手立ての打ち方)と録画について話し合いを行った。
5	10月6日/ 糸魚川東中学校	5	授業録画を行った。タブレット端末は4台(黒板用1台、モニター用1台、抽出グループ2台)を使用した。タブレットを準備段階で確実に集音できる位置、グループや教師のやり取りが見える位置に固定した。授業後の協議会では、録画状況の確認と、協議会の運営のながれを確認した。
6	11月2日/ 糸魚川東中学校 勤務校 (zoom)	6	研究協議会を行った。推進委員と協議会のファシリテーターは、糸魚川東中学校に集まり、参加者は勤務校でのzoomで行った。配信した授業や研究の概要、生徒のワークシートやホワイトボードを事前に観た状態からの協議会であったため、話し合いの論点がブレないものとなった。また、zoomのホワイトボード機能は使わずに、実際のホワイトボードでファシリテーション(KPT)を行ったことで、全体共有の際に画面が見やすく、有意義なものとなった。
7	11月9日/ 勤務校 (zoom)	6	研究のまとめを行った。協議会で出されたものを中心に研究主題と手立てに関する成果と課題について意見交換を行った。

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (29) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (8) 名
(1) 郡市内中学校会員 (10) 名	(4) 教育委員会・センター (0) 名
(2) 他郡市中学校会員 (10) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (1) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
2年A組	中部地方	飯塚隆雄

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	「研究主題を達成するための手立ては有効であったか？」	上越市立和田小学校長 小池 修 様	糸魚川市立糸魚川東中学校 校中学校 宮田 雅仁 教頭	糸魚川市立 青海中学校 教諭 佐藤 直己

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 藤 檜 悠太
(学校名: 十日町市立十日町中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 社会
- 2 郡市名 十日町・中魚沼郡 3 会場校 津南町立津南中学校
- 4 研究主題

「当事者意識をもって、課題解決を図る生徒の育成」
～協働的な学びを活かした授業を通して～

5 主題設定の理由

(1) 郡市研究推進委員会が目指す学び合う授業から

研究推進委員会では今までの学び合いの成果と課題を確認するとともに、社会科で目指す学び合う生徒の姿や学び合う授業とはどんなものかについて話し合った。

学び合いで目指す姿として、「①相手の思いや考えを受け入れる、②他者とのかかわりを通して、自己の思考を変容、深化させる、③見方や考え方を働かせながら、多面的・多角的に話し合う、④仲間とのかかわりややりとりから、納得解や最適解を導き出す」ことが大切であると、研究推進委員会で確認した。

(2) 郡市内の生徒の実態から

当郡市内の中学校では、各種学力調査の結果などから、知識・理解に比べ、資料の読解力・活用力や思考力・判断力・表現力に課題が見られる。資料から答えを導き出す課題や、文章を記述したり説明したりする課題を苦手とする生徒が多い。

(3) 学習指導要領の趣旨や県中教研の基本方針から

資質・能力の育成のため、「主体的・対話的で深い学び」の実現、深い学びに至る学び合う授業の実現に向けて、授業改善の推進が求められている。

上記3点を踏まえ、郡市研究推進委員会で目指す姿を下記のように考えた。

- 問題意識をもちながら、他者との交流を通して考えを広げ深める生徒
- 見方・考え方を働かせ、根拠をもって自分の考えをもち伝える生徒

学習課題と自分とのつながりを感じ、学習課題が自分の課題として捉えられれば、「考えたい」、「解決したい」といった追究意欲を生み、自分なりの考えをもって主体的に学ぶはずである。そして、他者とのかかわりを通して学びが深まれば、自己の考えの変容・深化がおこり生徒の思考力は高まり、生徒の資質・能力を向上できるのではないかと考え、上記の研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

1年次の研究を踏まえ、研究主題に迫るための方法として令和2年度以降は下記の視点から研究を進めた。

(1) 当事者意識をもたせるための工夫

① 「当事者意識をもつ生徒」の姿の確認

曖昧だった当事者意識をもった生徒の姿を明確にした。当郡市研究推進委員会が考える「当事者意識」をもっている姿は下記の通りである。

社会的事象や自分の生活・将来などと自分を結び付け、自分の考えをもち、考えを深める姿

②自分とのつながりがもてる課題の設定と課題解決に向けた単元構成

学習課題と自分を結び付けるために、「単元を貫く課題」をどう設定し、その課題解決に向けて単元をどのように構成するか、単元全体をしっかりとデザインする。課題と自分を結び付け、生徒が考えたくなる、追究したくなる教材の開発と単元構成を行う。

(2)「見方・考え方を働かせる」授業づくり

単元で働かせる「見方・考え方」を基に追究する視点をもたせることで、視点に沿って調べ、それが考えの根拠や説明の判断材料となっていく。どういう視点を与えるか、どういう視点をもたせて考察させ、視点を基にまとめさせるかを明確にする（場合によっては、「どの立場で～」「誰にとって～」なども）。

(3) 深い学びに向けた収束場面の工夫

話し合って終わりという発表にならないように、視点をもたせた検証や考察の場面を設ける。違う視点を示した問いを示すことで、思考が活性化され学びは深まっていく。

7 研究の成果と課題

グループ協議より

- 生徒の問題意識から設定された課題で、学習者が生活する地域の視点から考えた単元となっていた。単元全体を通して、当事者意識をもたせる課題が工夫されていた。
- 地域の教材、地域の課題、町長の言葉が切実感につながった。
- 前時までの既習事項を活用しながらアイデアを考えていた。事前の学習で町の特徴をしっかりと学んでいたため、深い学びにつながった。
- 視点を示したことで、スムーズに考えることができ思考も明確となった。学び合いにおいて、共通の視点で事象を見る、共通の視点で吟味・検討を行うことは有効であった。
- 考えを練り上げる手立ては良かった。アイデアとアイデアの組み（掛け）合わせは、自分の意見がもてない生徒には有効であった。
- △アイデア×アイデアで消えてしまったよい意見はなかっただろうか。
- △視点を制限してしまったことで、生徒からのアイデアが似たようなものになってしまった。
- △グループワークがもっと個人の考えに影響を与えられるとよい。学び合いでの活動が生かされず、最終的な提言が最初の自分の意見と変わらず、思考の深化・変容までには至らなかった生徒が多かった。
- △全体での意見交流の際、他の班の意見を効率よく見て回るためには、ワールドカフェでも良かったのではないかと、または、各班の写真を撮ってタブレットで共有してもよいのではないかと（活用すれば早くて便利）。
- △どういう場面で、どのような「見方・考え方」を働かせるのかを、授業者がしっかりと考えておく必要がある。

8 運営の成果と課題

- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、郡市内・隣接市町村の社会科部員、郡市内の小学校教員を中心に参会者の人数を絞ったが、総勢 52 名が集う研究発表会を開くことができた。会場校の協力のもと、オンラインでない形で授業公開ができ、改めて生の授業公開の良さを感じることができた。また、グループ協議会では、小・中学校の枠を超えた積極的な意見交換が見られた。
- ・今年度も研究推進委員がブレ授業を行うなど、研究主題に向けて活発な議論や協議を重ねることができた。生徒の学ぶ姿や授業の在り方について、たくさん語り合えることができ有意義な時間となった。
- ・寒い時期で仕方ないと思うが、授業会場が少し狭かった。大人数が机間を移動したり、参観をしたりするので、感染対策を考えると、もう少し広い会場が望ましい。

- 1 部会名 社会
- 2 郡市名 十日町・中魚沼郡 3 会場校 津南町立津南中学校
- 4 研究会開催期日 令和3年11月2日(火)
- 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	小千谷市立小千谷中学校 校長	若林 靖人
(2) 研究推進責任者	十日町市立十日町中学校 教諭	藤櫃 悠太
(3) 会場校責任者	津南町立津南中学校 教頭	渡邊 進
(4) 県・郡市指導主事	十日町市教育センター 嘱託指導主事	樋口 広栄
(4) 研究推進委員（授業者）	津南町立津南中学校 教諭	伊佐 勝
	十日町市立中条中学校 教諭	田中 紀之
	十日町市立水沢中学校 教諭	高澤 克幸
	十日町市立川西中学校 教諭	羽二生拓也
	十日町市立中里中学校 教諭	菊地 優樹
	十日町市立松代中学校 教諭	山口 和希

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	7/1 十日町中学校	9	今年度の活動計画、研究主題や研究の方向性等についての確認
2	8/2 十日町中学校	8	Class の原稿の検討、単元構想についての意見交換
3	9/10 十日町中学校	8	研究会までの準備・当日の運営についての役割分担、指導案の検討
4	10/7 十日町中学校	7	指導案の検討
5	10/21 中里中学校	8	11/2 に向けたプレ授業（十日町市立中里中学校 菊地 優樹教諭）と協議会 ※当日の研究協議会と同じ協議内容、同じFTの形式で行う、指導案の最終検討 研究発表会に向けての確認（当日までの準備、当日の運営について）
6	11/2 津南中学校	9	研究発表会（公開授業及び研究協議会） 研究面・運営面についての成果と課題について

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（ 52 ）名	(3) 小学校・高等学校教員	（ 6 ）名
(1) 郡市内中学校会員	（ 30 ）名	(4) 教育委員会・センター	（ 1 ）名
(2) 他郡市中学校会員	（ 15 ）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（ 0 ）名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
2年1組	地理的分野 日本の諸地域「中部地方」、地域の在り方	伊佐 勝 教諭

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	①本単元、本時の授業は、当事者意識をもたせるものであったか。 ②深い学びに至るための手立ては有効であったか。	小千谷市立小千谷中学校 校長 若林 靖人 様	十日町市立 中条中学校 田中 紀之 教諭	津南町立 津南中学校 伊佐 勝 教諭

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 加藤 真澄

(学校名: 新潟市立山の下中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 社会

2 郡市名 新潟市

3 会場校 新潟市立石山中学校

4 研究主題

社会認識を高め、確かな学力を育てるためには、どうあるべきか。

5 主題設定の理由

社会科の目標は、「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成することであるが、そのためには、生徒が社会に対する関心を高め、社会事象の基本的な知識を身に付け、事象相互のつながりや因果関係について理解し、自らの考えや意見をもつことが大切であると考え、上記の研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

- (1)「学ぶ必然性のある課題は生徒の意欲を持続させる。」という共通認識のもと、学ぶ意欲が持続し、課題解決に主体的に取り組める課題とは具体的にはどのようなものかを検討した。その結果、身近な話題に関連することを課題とすることとし、「どんな日本の商品売り込むことができるか」という課題を設定した。
- (2)ある程度共通の、地域の現状認識を持った上で意見を交流することを通じ、ばらばらに認識されていた社会事象の相互の関連性を見だし、知識の体系化が促されるという仮説のもと、4～5人の班で話し合いを実施した。その際に個人の意見をロイロノートに記入し、可視化できるようにしたことで、他のメンバーの意見を理解しやすくなり、班として、ある程度まとまりのある意見が構築された。学級での意見交流もロイロノートで提出させ、他の班の意見も視覚的に捉えることが可能になった。
- (3)班やクラスのメンバーの意見を取り入れながら自らの意見を構築できるように、単元の終わりに多様な視点から、日本とアフリカの関係がどうあるべきかの未来の展望を個人に考えさせるような単元構成とした。

7 研究の成果と課題

<成果>

- ・生徒が課題を自分のこととしてとらえることができ、追究の意欲が持続した。
- ・話し合い活動を通じ、意見の再構築が行われたり、知識の定着が見られたりした。

<課題>

- ・事実を根拠としたものより、ステレオタイプのイメージに依拠した意見が幾つか見られ、人々の具体的な生活の姿、産業等、その地域の地域性の理解を深める時間を、一層確保することが必要である。

8 運営の成果と課題

<成果>

- ・会場校に集合せず、会場を分散させた上でのユーチューブ視聴としたことで、感染のリスクを下げる事ができたと同時に、移動時間を短縮できた。
- ・G o o g l m e e t で、意見・感想を寄せてもらったことで、集約の時間を短縮できたとともに、成果と課題の各自の理解が深まった。

<課題>

- ・録画では、授業の全体や生徒一人一人の反応の詳細が把握できない。
- ・協議会の人数が少なく、意見交流の広がりが小さい。また、G o o g l m e e t では出された意見にその場で質問等ができず、個人の中での深まりが浅い。

資 料

1 部会名 社会部

2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立石山中学校

4 研究会開催期日 令和 3 年 11月 4 日 (木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立南浜中学校	坂井 孝
(2) 研究推進責任者	新潟市立山の下中学校	加東 真澄
(3) 会場校責任者	新潟市立石山中学校	林 良平
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員（授業者）	新潟市立石山中学校	佐藤 裕子
	新潟市立石山中学校	佐野 和輝

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人 数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6/17 石山中学校	12	公開授業の持ち方についての協議
2	8/4 石山中学校	12	指導案検討や授業で使用する資料の是非について→ジェトロに資料請求することを決定
3	9/30 石山中学校	12	指導案剣道
4	10/19 石山中学校	4	公開授業の録画・編集
5	10/20 石山中学校	6	公開授業の録画・編集
6	10/21 石山中学校	5	公開授業の録画・編集

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数（	57）名	(3) 小学校・高等学校教員（	0）名
(1) 郡市内中学校会員（	57）名	(4) 教育委員会（	0）名
(2) 他郡市中学校会員（	0）名	(5) その他（地域・保護者の方）（	0）名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
1年1組	アフリカ州	佐藤裕子
1年4組	アフリカ州	佐野和輝

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 五十嵐 嘉啓

(学校名: 五泉市立五泉中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 社会

2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 五泉市立村松桜中学校

4 研究主題

社会的な見方・考え方を働かせ、課題解決を図る生徒の育成
～聴き合い、思考を深める～

5 主題設定の理由

当郡市の生徒には、社会科は知識を覚える教科で知識量が大切だと考える傾向がみられる。その要因の一つとして、授業で社会科の「面白さ」を生徒に感じさせられなかったことが課題としてあげられた。

そこで、目指す学びの姿を「学びを自己の生活や社会の改善に生かそうとする資質・能力を身に付けた生徒」とし、課題解決に取り組むこととした。

この生徒の姿を具現化するために重要であると考えたことが、課題解決学習の充実である。単元を貫く学習課題を設定し、その解決に向けて「見方・考え方」を働かせること、考えを交流、批評し合うなど学び合いを繰り返すことで、目指す学びの姿に近づけると考え、本研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

(1) 意欲を喚起する「単元を貫く課題」から単元を設計する。

課題解決学習で最も重要なのは「課題」である。そこで、単元を設計する際に、その単元を通して解決する課題＝「単元を貫く課題」を生徒が切実感をもつことができること、多面的・多角的に考えることができることなどの面から検証し、設定する。

(2) 働かせる社会的な見方・考え方を明確にした課題解決学習で授業をデザインする。

「単元を貫く課題」の解決を意図した単元設計を行う際に、その解決に迫る小さな課題群を設ける。そして、この小さな課題ごとに働かせる「味方・考え方」を明確にし、課題解決を図っていく。単元における、小さな課題群の解決の過程を経ることで、「見方・考え方」を働かせることが身に付くと考える。

(3) 課題解決の論拠につながる資料提示と学習形態の工夫、思考ツールの活用で学び合いを深める。

課題解決のためには、論拠を明確にした個人思考をベースに班や学級で意見交換（議論）することが必要となる。そのために、課題解決の論拠につながる資料の提示、妥当な解決策を見出すための思考ツール、ICT やホワイトボードの活用、学習形態の工夫を図っていく。

7 研究の成果と課題

単元を通して生徒が追究意欲を継続できるように、単元全体を貫く学習課題を設定し、その課題を解決するためのステップとして、1時間ごとに小さな課題に取り組みさせる。また、1時間ごとに「現代社会の見方・考え方」を働かせて課題解決させることを積み重ねることで、単元全体を通して、生徒の考えを広げたり深めたりできる。これらの考えに基づき、単元の指導計画を作成し、見方・考え方を明確にした授業をデザイ

ンした。

公開授業では、単元を貫く課題として、『魅力ある五泉市（村松地区）をつくるにはどうしたらよいか』を設定し、効率と公正、合意、持続可能性の「現代社会の見方・考え方」を働かせて課題解決に取り組ませた。

生徒は、自分たちの班の考えた政策に対して、他の班からフィードバックされた評価を基に、効率と公正、合意、持続可能性の観点から、改めて自分たちの班の政策を再検討した。「自分たちの考えを実行することで大きな効果が期待できるか」「大多数の市民の利益になるものか」、対立と合意の見方・考え方から「全員の理解を得られるものか」など、現代社会の見方・考え方から課題を捉え直し、取り入れるものと取り入れないものを決めて、その論拠を示しながらまとめていた。

ワークシートには、①ありきたりな政策や抽象的な政策だったものから、より具体的で現実性を帯びた、前時よりさらに一步踏み込んだ政策（意見）が見られた。②すべての班で、自分たちの考えを修正した根拠をきちんと盛り込んだ表現がされていた。このように、見方・考え方を働かせて学びを深めていた。

また、ロイロノートのピラミッドを思考ツールとして使用したことで、再検討の前・後で自分たちの考えた政策がどのように変容したのか、なぜ変容したのかを、見方・考え方に結び付けて視覚的にとらえさせることができた。

生徒が自分との繋がりや関わりを意識できる単元を貫く課題を設定したことで、地域の未来を担う構成員として、その役割を担わなければならないという意識の高まりが生まれてきた。生徒にとって切実感のある学習課題に取り組ませることで、生徒は真剣に課題に向き合い、見方・考え方を働かせながら、より深く課題解決を図っていったものと思う。

一方で、単元を貫く課題を設定し、小課題を解決していく過程で見方・考え方を働かせていくことを意図してきたが、生徒の実態に合う単元を貫く学習課題をどれだけ開発できるかが一番大きな課題となる。時代に合致しているのか、生徒の生活に合っているのか、地域のニーズにマッチしているのかなど、この学校のこの生徒集団に合っているのかを、事前によく検討していくことが不可欠となる。また、生徒にとって学習意欲が継続する魅力のある単元とするために、単元を貫く課題と、その課題を解決するための小さな課題の内容とその配列について、よく吟味する必要がある。

今回は、思考ツールとしてロイロノートのピラミッドを活用したが、題材や話し合いの場面、内容によっては、勿論、他の思考ツールを活用したほうが有効であることもある。見方・考え方を働かせ、課題解決を図っていく際に、どんな思考ツールをどう使うことが深い学びへと至らせるのか、単元デザインにあわせて追究していく必要を感じている。

8 運営の成果と課題

研究推進委員会を組織し、授業者、研究推進責任者、会場責任者、研究推進委員が全体で協力して活動することができた。令和3年度の第1回研究推進委員会で研究の意図やねらいを共有し、授業校だけの実践とせず、五泉市・東蒲原郡社会部全体で研究が推進できるように研究計画を作成した。

プレ授業を研究主題に沿って、五泉中学校・川東中学校と実践し、その成果を郡市内の社会部で共有して、本発表を行えた。今回の研究会では、五泉市・東蒲原郡の部員以外はZoomによるリモート参加で行った。

その為、市外の参加者に対しては、研究の概要・指導案・要項をメールで配信した。添付ファイルのデータ量で制限があったためか、遠隔地の学校には再配信するなど混乱する場面があった。

リモートの配信は、4台のカメラ（タブレット）を使いZoomで行った。配信に備えて機材を揃え、プレ授業でカメラの配置を工夫して研究授業にのぞむことができた。佐渡地区などの遠隔地の参加者に授業をリアルタイムで伝えられることができたが、授業の様子を映像や音声でわかりやすく参加者に伝えることができたか不安な面があった。

資 料

- 1 部会名 社会部
- 2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 五泉市立村松桜中学校
- 4 研究会開催期日 令和 3年 10月 27日 (水)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	五泉市立村松桜中学校・校長	渡邊 誠
(2) 研究推進責任者	五泉市立五泉中学校・教諭	五十嵐嘉啓
(3) 会場校責任者	五泉市立村松桜中学校・教諭	菅谷 啓子
(4) 県・郡市指導主事	県立教育センター・指導主事	後藤 純二
(5) 研究推進委員	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・教頭	夏井 徳治
	五泉市立村松桜中学校・教諭	坂田 信夫 (授業者)
	五泉市立五泉中学校・教諭	高橋 保嗣
	五泉市立五泉北中学校・教諭	明田川貴俊
	五泉市立五泉北中学校・教諭	近藤 卓
	五泉市立川東中学校・教諭	貝津 泰光
	五泉市立村松桜中学校・教諭	香坂しおり
	阿賀町立阿賀津川中学校・教諭	鈴木 広宣
	阿賀町立三川中学校・教諭	高橋 延之

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	7. 14/村松桜中学校	10	学び合う授業で目指すことを確認し、研究主題について全員で協議した。研究推進委員の役割分担を決定し、プレ授業の授業者を決めた。
2	8. 20/村松桜中学校	9	他地区の研究の報告を受け、プレ授業の指導案を検討し、単元を貫く学習課題・本時の学習課題について協議し、研究の方向性について意見交換した。
3	9. 1/五泉中学校	12	五泉中学校による、プレ授業の実践を通して研究について検討し、指導者の助言を受け研究の方向性を確認した。ICT 機器を使ったりリモート配信も確認できた。
4	9. 29/川東中学校	13	川東中学校による、プレ授業の実践を受けて、授業実践について研究協議をした。シンキングツールの活用について協議した。
5	10. 27/村松桜中学校	12	村松桜中学校坂田教諭による、研究概要の説明・本発表を受けて、授業協議会Ⅰでは、Zoom による参加者からの質問・意見について協議した。授業協議会Ⅱでは、五泉・東蒲原社会科部員により、授業実践と研究全体の協議をした。

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数	(35) 名	(3) 小学校・高等学校教員	(0) 名
(1) 郡市内中学校会員	(11) 名	(4) 教育委員会・センター	(1) 名
(2) 他郡市中学校会員	(24) 名	(5) その他 (地域・保護者の方)	(0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年4組	地方自治と住民参加	坂田信夫教諭

9 分科会 (全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
研究概要説明			五泉市立川東中学校 貝津泰光 教諭	五泉市立五泉中学校 五十嵐 嘉啓 教諭

授業協議会 I・II	・社会的な見方・考え方を働かせ、 課題解決することができたか。 ・ICT のシンキングツールを活用 しながら、学びを深めることが できたか	県立教育センター 指導主事 後藤 純二 様	五泉市立五泉中学校 五十嵐 嘉啓 教諭	五泉市立村松桜中学 校 坂田 信夫教諭
---------------	---	-----------------------------	------------------------	------------------------

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 鬼木 哲人
 (学校名: 上越市立城北中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 理科部会
 2 郡市名 上越地区 3 会場校 上越市立直江津中学校

4 研究主題

見通しと振り返りを大切にした思考力・表現力を高める指導の工夫

5 主題設定の理由

主題を設定するにあたり、まず、下記の表のように学び合う生徒の姿について理想と現状を比較した。現状を分析すると、生徒が考えを説明したり、考えを比較、整理し、適切な考えを導いたりする力、いわゆる思考力・表現力が弱いことが分かった。そこで、その力を高めるために、理想と現状になぜギャップがあるのか、そのギャップを解決するための手だてとして何ができるのかを考えた。ここでは、「見通しをもって学んだ知識を活用できるようにしていくこと」「振り返りを充実し、自分の思考の道筋(考え)を自覚できるようにすること」が必要であることが確認できた。

上記のようなことから、見通しと振り返りを大切にすることを授業づくりの方向として取り組むこととした。さらに、具体策として、生徒の興味を引く課題を単元や小単元を貫く課題として設定することにした。これは、学ぼうとする意欲を高めるとともに、最終的に解決する課題を単元の最初に示すことで、その課題を解決するために必要な知識(内容)を考え、見通しをもって学習できるようにしたいと考えたからである。また、話し合い場面でのワークシートの工夫も重要になると考えた。

理想	現状	なぜ理想と現状にギャップがあるのか?	解決策
学ぼうとする意欲が高い	意欲を引き出せていない	課題が悪い	知識を活用する課題を設定する
考えをうまく説明できる	理由まで説明できていない	思考の道筋を自覚できていない。理由まで求めている	ワークシートなどでパターンをつくる
話を聞いて理解できる	意見を言って終わり、理解までしていない	他の意見を聞く必要性を感じていない	
考えを比較・整理	比較、整理の場面が少ない。生徒のスキルも低い	やり方が分からない	
適切な考えを導く	一部の生徒ができています	ねらいが明確でない	教師のはたらきかけ

6 研究の方法と内容

テーマに迫るための手だてとして下記の3つの方法を考えた。

(1) 単元や小単元を貫いた課題(最終課題)の設定

単元、もしくは小単元の初めに課題を提示する。生徒が解決したいと思える課題を設定し、学習の意欲を高める。小単元を通して、その課題を解決するために必要な知識を学び、小単元の最後には実際に学んだ知識を生かして課題解決をするような単元構成にする。

(2) 課題を解決するために見通しをもたせ、振り返りができるシート（最終課題シート）の活用
単元、小単元を通した課題を解決するために必要な知識を生徒に考えさせたり、示したりする。それらを1枚のシートに整理していき、学習に見通しをもてるようにする。授業では、学習で分かったことをそのシートに記入していき、課題に取り組む際に学習した内容を活用できるようにする。

(3) 思考を整理するシートの活用

プラスチック段ボールと PET シートで作った議論・発表用ボードの活用を行った。プラスチック段ボールと PET シートの間に A2 サイズの紙を挟み込むことが可能で、考えを発表するときに良く見える。また、マーカーペンで自由に書き込んだり消したりすることができ、班での話合いの活性化や意見交流の場面で有効になると考えられる。

7 研究の成果と課題

研究テーマに迫るための3つの手立てはどれも有効であったと考えている。

(1) 単元や小単元を貫いた課題（最終課題）の設定

単元の初めに課題を生徒に示すことで、学習に対して見通しをもたせ、学習内容のどれが課題解決につながるかを考えさせながら授業を進めることができた。そのことが最後に最終課題を解くときに学習した知識を活用して深い思考につながった。また、課題の内容次第で生徒に興味・関心をもたせ、学習意欲を高めることができるものになった。さらに、最終課題を考えることは教師にとっても単元構成をしっかりと考えるきっかけとなった。研究1年目のプレ授業では1年生の「状態変化」の単元で、2年目の研究会では1年生の「気体」の単元で最終課題を設定した。他の単元ではどのような最終課題を設定できるのかを考えて研究会当日に参加者に紹介できればよかった。

(2) 課題を解決するために見通しをもたせ、振り返りができるシート（最終課題シート）の活用

このシートに最終課題を解決するための知識を整理することで、生徒は既習した知識を活用し、学習内容の定着や課題を解決することにつながった。ノートや教科書ではどの知識を活用するのか読み取るのが難しい生徒でも一枚のシートにまとめることで知識の活用が容易になっていた。ただし、この最終課題シートは1つの最終課題に対してそれ専用のシートになっている。様々な単元で最終課題を設定して行うのであれば、どの課題に対しても共通で使えるシートの方が準備の手間も少なく済む。また、生徒のまとめ方にも自由度が広がる。

(3) 議論・発表用ボードの活用

紙を挟み込んで使うことで、他の単元でも使用が可能なことや生徒が議論の手順を確認し、発表の準備を容易にするためには有効であった。発表時も大きく書けるので見やすかったが、書く内容が多い場合、字が小さくて見づらくなるため、議論をするときと発表をするときで、ボードに挟む紙を変えることができると良かった。

研究全体を通して、最終課題の設定で見通しをもたせ、最終課題シートで学んだことを整理したり振り返ったりできた。また、議論・発表用ボードの活用は班での議論の深まりにつながった。ただ、最終課題を解くために、時数が増えるため、その時数を確保するための工夫が必要である。

8 運営の成果と課題

新型コロナウイルス感染症対策のため、オンラインでの研究推進委員会を開くことが多かったが、移動の必要がなく実際に集まるよりも手間が少なく研究推進委員会を開催することができた。しかし、意見を出し合って議論するには実際に集まった方が議論が深まるとも感じた。研究を進めるスケジュールをはっきりさせずにスタートしてしまったので、研究推進委員会の開催を直前に決めて派遣申請を送るなどしてしまったため、しっかりと研究会当日までの計画を立てるべきであった。

資 料

- 1 部会名 理科部会
- 2 郡市名 上越地区 3 会場校 上越市立直江津中学校
- 4 研究会開催期日 令和 3 年 11 月 17 日 (水)
- 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育事務所・学校支援第2課長 上越市教育センター・指導主事	藤本 高雄 品田 やよい
(2) 研究推進責任者	上越市立城北中学校・教諭	鬼木 哲人
(3) 会場校責任者	上越市立直江津中学校・教諭	細井 康秀
(4) 研究推進委員（授業者）	上越市立直江津中学校・教諭	佐藤 智宏
	上越市立城西中学校・教諭	中林 あみ
	上越市立城西中学校・教諭	八木 純
	上越市立直江津東中学校・教諭	中村 淑克
	上越市立八千浦中学校・校長	勝俣 将明

6 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6月24日/城北中学校	9	昨年度の研究内容の確認、今後の研究の進め方の検討
2	7月15日/オンライン	9	公開授業の単元、授業内容の検討
3	8月3日/オンライン	7	プレ授業の指導案検討
4	9月14日/城北中学校	3	プレ授業（授業者：城北中学校鬼木哲人 内容：気体の性質）
5	9月24日/オンライン	9	プレ授業の振り返り
6	10月6日/オンライン	9	研究授業の指導案検討
7	10月14日/オンライン	9	研究授業の指導案検討
8	11月5日/直江津中学校	5	研究授業撮影
9	11月17日/オンライン	5	研究会
10	12月7日/城北中学校	5	研究の成果と課題の振り返り

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （ 20 ）名	(2) 教育委員会・センター （ 2 ）名
(1) 郡市内中学校会員 （ 16 ）名	(3) その他 （ 2 ）名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
1年1組	気体の性質	佐藤智宏

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体会	・研究の説明 ・授業者の振り返り	上越教育事務所学校支援 第2課長 藤本 高雄 様 上越市教育センター 指導主事 品田やよい様	上越市立直江津中学校 細井 康秀 教諭	城北中学校 鬼木 哲人 直江津中学校 佐藤 智宏
部会	・手だては有効だったか ・他にどんな最終課題があるか		上越市立直江津東中学校 中村 淑克 教諭 上越市立城西中学校 八木 純 教諭	

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 白井 明日華
(学校名: 加茂市立若宮中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 理 科

2 郡市名 加茂市・南蒲原郡 3 会場校 加茂市立加茂中学校

4 研究主題

知識をつなぎ、思考・表現を深める生徒の育成
～「既習事項の活用」を通して～

5 主題設定の理由

新学習指導要領では、各教科の見方・考え方が明示され、それらを働かせる探究的な学習を通して、主体的な学びを実現し、未来を切り拓いていくための資質・能力を育成することが目標として掲げられた。中学校理科では、自然の事物・現象の中に問題を見だし、見通しをもって学習課題や仮説を設定していく。そして、観察・実験などを行い、根拠に基づく結論を導き出す学習過程を通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を獲得させていくことが求められている。

研究推進委員会において、ファシリテーション (KPT 法) で郡市内の生徒の現状を整理したところ、次のような姿が挙げられた。

K: 観察・実験への興味、関心が高い。豊かな自然の中で生活し、素直で真面目である。他との関わりに関して、人間関係づくりが良好で、話し合い活動への抵抗感が少ない。

P: 他の意見に流されてしまう。科学的な根拠を考えることが苦手で、予想や結論も何となく・・・が多い。根拠を考えられないため、発言に自信がない。他の単元や教科との学習のつながりがない。

これを踏まえ、郡市内で目指す生徒の姿 (T) を明らかにした。その中で、次のような姿が挙げられた。

○既習事項をもとにして、新しい学びを獲得する姿

○課題に対して、共通点や相違点を視点に比較し、その思考の過程を他者に伝えようとする姿

○理科での学びや知識を実生活につなぎ、活用しようとする姿

これらの目指す生徒の姿から、私たちは「知識をつなぐ」ことを大切にしたいと考えた。そのためには、生徒が「既習事項の活用」をして観察・実験を行うことにより、自らの考えを広げたり、強化・修正したりして、生徒の学びが深まる (科学的概念の形成) とともに自己の科学への見方・考え方の高まりを実感することをねらう。そして、学びの深まりや自己の高まりを実感することが、新たな学習への主体性の高まりにつながると考え、上記の研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

「既習事項の活用」を促し、研究主題に迫るために、以下の3つの手立てをもって授業を構想し、有効性を検証していく。

(1) 単元構成を工夫する。【既習事項を使いやすくするための工夫】

学びを深める授業を構想する上で、単元構成は非常に重要な要素である。知識をつなぐことや学び合う、関わり合う「必然性」が不可欠であり、そのような学習活動を展開していくような単元構成を考えていく。また、生徒が課題を主体的に追求していくために、理科の学習内容と日常生活との関連付けなどを行い、生徒への「問題意識の触発」を大切にしていく。

(2)別単元や単元内の知識をつなぐために、ポートフォリオ等を活用する。【既習事項を使いやすくなるための工夫】

班内や学級全体での話し合いの時に、効率よく自分の意見を説明するために、単元内の自己の学びをつなぐポートフォリオを活用する。

また、「状態変化」や「原子・分子」の学習の際に生徒が実際に触れたり、動かしたりしながら考えることができる粒子モデルを利用する。本研究の動植物単元においても、他単元の粒子モデルを継続して利用することで、粒子モデルを活用する良さを実感して学習していくことを期待する。

(3)科学的根拠を分かりやすく伝えるために、ICT やモデルを活用する。【自分の思考過程を表現するための工夫】

身に付けた知識・技能を使って、日常生活の事物・現象を提示する場面や、観察、実験で得た結果の整理、考察の場面で、ICT やモデルを活用した表現活動を取り入れるなど、生徒の思考・表現が深まるような場面を設定する。その際、特に科学的根拠を意識させる。本研究における科学的根拠は①既習の知識、②実験データ、③実生活での経験とする。

7 研究の成果（協議会での意見より ○：成果 ▲：課題）

(1)単元構成の工夫

○生徒が動物（自分のこと）と植物を比較しながら、生き生きと学び合っている様子があった。また、動物→植物の流れは、思考のつながりやすさだけでなく、学習意欲の向上にも効果があった。

▲動物を植物に置き換えた状態になっていた。これが本当の「深い学び」なのかは疑問である。

(2)ポートフォリオ等の活用

○紙ファイルでもクラウドのデータでも既習事項の確認をする場面が見受けられ、見通しをもって学びに向かうことや知識をつなぐことに活かされていた。

○モニターにも既習事項である動物の表示があるのは、知識をつなぐために有効であった。

▲今回の研究単元ではポートフォリオの活用は有効であったが、各単元ごとに生徒が活用しやすい形態を検討する必要がある。

(3)ICT やモデルの活用

○タブレットとホワイトボードの兼用はそれぞれの良さがああり、うまく活用できていた。タブレットにもホワイトボードにも共通の図があるのが良かった。

○糖の移動を可視化する粒子モデルは考えを伝えやすいツールであり、学び合いに有効であった。

▲タブレットは発表のツールとしては有効だが、話し合いの場面や意見をまとめる場面では向いていないのではないかと。場面ごとの使い分けを精査していく必要がある。

▲粒子モデルを動かすことがメインになってしまっている感じがした。粒子が離れたりつながったりすることに注目させる必要があったのではないかと。

(4)その他

○今回の研究では、糖の検出において東北文教大学 人間科学部 鈴木 隆 様考案の「シヨ糖試験紙」が有効であった。

8 運営の成果(○)と課題(▲)

○主題に迫るための知見を得るために、研究推進委員が研究発表会当日と同じ授業を提案し、それぞれ授業で得られた知見をリレーしながら、より良い深い学びの姿を目指すことができた。

○教師の学び合いを通して、生徒の学び合いを深めることができたと感じる。

▲研究発表会当日と同じ授業を推進委員が提案する方法を採用したため、単元の進度確認や出張日の調整が必要であった。

▲オンライン開催だったが、郡市内の理科部員数が少ないため、一人一人の負担が大きかった。

- 1 部会名 理 科
- 2 郡市名 加茂市・南蒲原郡 3 会場校 加茂市立加茂中学校
- 4 研究会開催期日 令和3年11月9日（火）

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	中越教育事務所学校支援第2課・指導主事	羽鳥 益実
(2) 研究推進責任者	加茂市立若宮中学校・教諭	白井明日華
(3) 会場校責任者	加茂市立加茂中学校・教諭	松原 智加
(4) 研究推進委員	加茂市立加茂中学校・教諭（授業者）	今井 友之
	加茂市立加茂中学校・教諭	鶴巻 寿人
	加茂市立葵中学校・教諭	大谷 昌弘
	加茂市立葵中学校・教諭	細木 駿成
	加茂市立須田中学校・教諭	関 信也
	田上町立田上中学校・教諭	坂上 達雄
	田上町立田上中学校・講師	山田 勇斗

6 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6/18 若宮中学校	3	○研究推進責任者、会場校責任者、授業者による研究の打合せ
2	6/21 若宮中学校	9	○元年度の取組の確認 ○元年度の取組の反省を受け、本年度の研究の手立てや運営方法についての確認。 ○指導案検討
3	7/12 若宮中学校	9	○指導案検討
4	8/5 加茂中学校	9	○指導案検討 ○Class 原稿の検討
5	9/22 須田中学校	9	○須田中 関信也先生によるプレ授業 ○協議会：本時の授業構成について
6	10/21 田上中学校	8	○田上中 坂上達雄先生によるプレ授業 ○協議会：本時の実験材料について
7	10/27 葵中学校	10	○葵中 細木駿成先生によるプレ授業 ○協議会：本時の手立てについて ○研究発表会に向けての準備と確認
8	11/5 加茂中学校	8	○加茂中 今井友之先生による本発表授業の録画 ○協議会：主題に迫る手立ては有効であったか ○研究発表会「研究の概要説明」の検討
9	11/29 加茂中学校	10	○研究発表会と3年間の取組の振り返り ○研究面・運営面について、成果と課題の確認

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数（ 48 ）名	(3) 小学校・高等学校教員（ 0 ）名
(1) 郡市内中学校会員（ 19 ）名	(4) 教育委員会・センター（ 1 ）名
(2) 他郡市中学校会員（ 28 ）名	(5) その他（地域・保護者の方）（ 0 ）名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
2年2組	「動植物の生きるしくみ」 ～植物の細胞はどのようにして養分を得ているのか～	今井 友之 教諭

9 分科会（全体協議会）

協議題	指導者	司会者	提案者
主題に迫る手立ては有効であったか	中越教育事務所 指導主事 羽鳥 益実 様	加茂市立須田中学校 関 信也 教諭	加茂市立若宮中学校 白井 明日華 教諭

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 間 英法
(学校名: 新潟市立藤見中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 理科
- 2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立新津第一中学校

4 研究主題

学び合いを通して、科学的な思考力・判断力・表現力を高める理科指導の工夫

5 主題設定の理由

新潟県中学校教育研究会理科部の重点方針として、「観察や実験の予想を検討したり、結果を整理し考察・吟味したりする学習活動の充実を図ることを通して、目的意識に裏打ちされた科学的な思考力・表現力を高める」こと、及び「他者とのかかわりや問題解決的な活動を展開することを通して、科学的な見方・考え方を育てる」ことが挙げられている。

今日、理科の授業に求められていることは、知識や技能の質や量だけではない。その習得方法やそれらを活用する力、そして、日常生活と関連した見方や考え方を働かせることも含まれている。求められていることに正対し、豊かな資質や確かな能力を育むためには、自分の考えを相手に分かるように表現し、相手の考えとの共通点や相違点を比較したり、多面的にとらえたりするような学習活動が不可欠である。このことから、事象に対する問題意識をもとにして、予想や仮説をもって観察や実験を計画し実行したり、結果を予想等に照らして考察したりする場面において、生徒同士の「学び合い」を組織することが有効であると考えます。

そのために、「新潟市の授業づくり」に示されている内容性、情意性、集団性の高い「優れた学習課題を設定すること」と「ファシリテーション、グループワーク等の活動を取り入れること」、そして「『学び』を自覚する振り返り」を位置付けた問題解決的な学習を展開すること」を取り入れた授業を行って、科学的な思考力・判断力・表現力を高めたいと考えた。

6 研究の方法と内容

(1) 研究の方法

研究を進めるにあたり、「学び合い10」に基づく授業づくりを中核に据えて取り組むことにした。その中でも、「①生徒の素朴概念の把握」「③基本操作の充実」「⑩結果をもとにした考察の意見交換」を特に重視して、授業を行うこととした。単元は2年「電流とそのはたらき～電流と磁界～」とした。磁石や電流がつくる磁界に関連する実験を行い、目に見えない磁界のようすを可視化して考えを深める活動を通して、自分の考えを持ち、周囲と協働しながら学びを深める生徒の育成を目指した。

(2) 研究の内容

公開授業での学習課題を「電流の向き、磁界の向き、アルミ箔が受ける力の向きにはどんな関係があるか」と設定した。検証操作が容易な実験器具、目で見えない電流・磁界・力を可視化できる立体モデルを使用し、自分の考えを説明する授業を展開することとした。それにより、目に見えない磁界のようすを可視化して考えを深める活動を通して、自分の考えを持ち、周囲と協働しながら学びを深

められるだろうと考えた。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 公開授業の参観者によるアンケートから肯定的意見として次の結果を得た。

「1 今回の学習活動は、生徒の思考力・判断力・表現力を高めるのに有効であったか」

・有効であった 60.8% ・おおむね有効であった 33.3%

例「実験の種類を自分たちで選択し実験することで生徒が主体的に実験に取り組んでいた。今回の課題は立体的で難しいが、「分かりやすい図」と「立体モデル」を準備することで生徒の理解を支援していた。生徒はよく考えながら「立体モデル」を作成し、「電流」「磁界」「力」の向きにはいつも決まった法則があることを体感していたと思う」

「2 今回の学習活動は、生徒が自分の考えを深化させるための学び合いになっていたか」

・なっていた 45.1% ・おおむねなっていた 41.2%

例「・作成したモデルを活用して、話し合いを一生懸命行う生徒の姿が見られた。また、ロイロノートをうまく活用し、全員の結果を素早く共有することで考えを深めることができたと思われる」

- ② 研究推進委員会での意見

「立体モデルが、思考力・判断力を高める効果があった」

「モデル製作を通して、積極的に関わりあう姿が見られた」

「学び合う姿、立体モデルを通じての交流がきちんとできていた」

(2) 課題

- ① 研究推進委員会での意見

「出来上がったモデルを基に一般化していく交流の場の設け方の工夫、振り返りにかかる時間の確保が必要である」

「『科学的な思考力・判断力・表現力』とは何かを明確化する必要がある。また、県中スタイル指導案が、協議会にどこまで生かせるか課題が残る。生徒の ICT 活用レベルの格差があった」

「今の教科書は探究の過程を重視しており、2年生では『検証計画』が重視されているので、その点の工夫が必要である」

「授業で伸ばしたい力が空間認識の力となっていた。そのため、科学的な思考力・判断力・表現力が今回の実践のどこで伸ばせるか、が弱かった。」

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・県中の指導案書式を用いたことによる業務削減と Zoom の活用。
- ・ICT 活用事例の紹介。
- ・初期にあがった推進委員からのアイデアを、授業者がうまく取り入れ練り上げたこと。

(2) 課題

- ・指導案では「本時の指導」の記載が多い方が概要の把握や協議が行いやすい。
- ・現地での協議会の内容を、オンライン参加の理科部員が十分共有ができなかったこと。
- ・Zoom での事前協議はよかったが、実際に教具を見たり触ったりする中で協議し、授業改善を図る機会も貴重である。そのため、初年度、2年度ともに初回は直接顔を合わせてやりとりすることがあった方がよかった。

資 料

- 1 部会名 理科
- 2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立新津第一中学校
- 4 研究会開催期日 令和 3 年 11 月 4 日 (木)
- 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市教育委員会・指導主事	庭田 茂範
(2) 研究推進責任者	新潟市立藤見中学校・教諭	間 英法
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第一中学校	尾形 吉成
(4) 研究推進委員 授業者	新潟市立大形中学校・校長	永井 一哉
	新潟市立亀田西中学校・校長	中林 秀樹
	新潟市立新津第一中学校	小松 健治
	新潟市立新津第二中学校	熊田 浩子
	新潟市立新津第五中学校	川上 武士
	新潟市立小合中学校	星野 正彦
	新潟市立金津中学校	井上 実
	新潟市立小須戸中学校	中谷 弘一
	新潟市立東石山中学校	大沼 陽子
	新潟市立大江山中学校	廣瀬 宏一
	新潟市立中之口中学校	森 由紀
	新潟市立曾野木中学校	泉 陽
	新潟市立大形中学校	酒井 京

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	7月26日／Zoom	16	指導案検討および教材検討
2	8月26日／Zoom	15	指導案検討および教材検討
3	9月16日／Zoom	15	指導案検討および教材検討
4	10月14日／新津第一	9	指導案最終検討及び当日の打ち合わせ
5	11月4日／新津第一	11	公開授業当日
6	12月7日／新津第一	12	年度反省

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 (103) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (100) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (2) 名	(5) その他（地域・保護者の方） (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2年2組	電流とのはたらき 電流と磁界	小松健治			

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者
第1分科会	・思考力・判断力・表現力を高めるため学習活動について ・生徒が自分の考えを深化させるための学び合いについて	新潟市教育委員会 指導主事 庭田 茂範 様	新潟市立中之口中学校 森 由紀 教諭

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 長谷川 智大
(学校名: 村上市立村上第一中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 理科
- 2 郡市名 村上・岩船 3 会場校 村上市立岩船中学校
- 4 研究主題

生徒の主体性を育む、学び合う授業の創造

5 主題設定の理由

今年度から新学習指導要領が全面実施となり、学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応できる資質・能力の育成が重要視され、「主体的・対話的で深い学び」が求められている。

当地区では、従前より生徒の学力向上が課題となっている。そこで、当郡市中教研では、全国学力・学習状況調査や標準学力検査、Web 配信問題等の結果を基に学力実態を分析し、課題を明確にして課題解決に向けた取組を進めてきた。また、学力と生徒指導との関連性も勘案し、山積している諸問題の解決には、生徒の意欲の喚起・高揚が重要な視点となり、同時に「よりよい生き方、人間性を高める指導」の在り方も深く関わってくるものと考え、研究を進めてきた。平成 23 年度からは「生徒の主体性」について研究主題を設定し、生徒の主体性を伸ばす教育の在り方や生徒の主体性を育む授業の創造について研究を継続している。

以上のことを踏まえ、研究 1 年目から当郡市中教研理科部においても、「生徒の主体性を育む、学び合う授業の創造」を研究主題として設定し、研究を進めた。

6 研究の方法と内容

研究 1 年目では、研究主題に迫るため、次の 3 つの手立てを考え、研究を進めた。

手立て 1：主体的な学びを促すための課題設定

手立て 2：思考ツールを用いて実験内容を整理する

手立て 3：ホワイトボードを用いたファシリテーション

研究 1 年目の研究授業では、互いに意見交流をしながら知識・技能を活用して意欲的に課題を追究する生徒の姿が見られた。また、ホワイトボードの活用も思考の可視化や共有に効果的であるようすが見られた。一方、選択した思考ツールが有効に活用されていないようすが見られたり、ホワイトボードでのグループ発表に時間がとられたりなど、活用するツールの選択やホワイトボードに代わる ICT の導入などの課題が残った。

研究 2 年目の今年度は、研究 1 年目の成果と課題を踏まえ、今年度の研究推進委員で研究主題に迫るための手立てを再検討、修正して研究を進めるとともに、指導者の先生からの御助言を交えながら研究発表会時に公開する授業の指導案を練り上げるなど協議を重ねた。

7 研究の成果と課題

本研究の成果として、次の 3 点が、主題に迫るための有効な手立てとして挙げられ、またそれらの手立てにおける課題や改善点についても見出すことができた。

(1) 手立て 1：導入における事象との出会いを工夫する

単元や授業の導入における事象提示で、生徒の既有知・経験知とのズレが生じたり、生徒と事象との対話が生まれやすくなるような事象提示を行った。既有知・経験知とのズレが生じることで、生徒に

メタ認知的活動を促すことができ、生徒が理科の見方・考え方を働かせることや主体的に探究に取り組むことの契機となると考えた。また、事象との対話が生まれることで、「事象」と「生徒自身も持っている見方・考え方」との結び付けが図られ、同様に生徒が主体的に探究する契機となると考えた。

研究発表会では、単元の導入時の事象と関連させ、同じ電池と豆電球なのに明るさが異なる事象をブラックボックスで配線を隠して提示した。生徒は、一目見て「なぜ？」と問いが生まれて見方・考え方を働かせたり、単元の導入時の事象を想起してブラックボックス内部に考えを巡らせ、「○○なのではないか」とつぶやくなど事象との対話を始めたりする様子が見られ、その有効性を確認できた。

(2) 手立て2：ツール（ICTツール・思考ツール等）を活用する

仮説設定、計画立案、結果分析・解釈などの場面で、ツールを活用して思考の整理、可視化、共有などを行った。思考を整理したり可視化したりすることで、生徒が思考を深化させることができ、また、新たな視点に気付くことができ、学び合いに効果的に働くと考えた。さらに、それを共有することで、生徒は多様な見方・考え方に触れることができるとともに学習者間の見方・考え方のズレに気付くことができ、生徒のメタ認知的活動を促して生徒が自身の見方・考え方を修正し、主体的・対話的で深い学びにつながると考えた。

研究発表会では「Jamboard」を用いた。Jamboard 上で他者の考えをリアルタイムで共有しながら思考することで普段は消極的な生徒でも自分の考えを表現することができ、その有効性を確認できた。一方で実験結果の共有の際にはツールを用いずに行ったため時間がかかった。スプレッドシートを用いるなど場面場面で有効なツールを精査して活用することが課題である。

(3) 手立て3：「見通し」と「振り返り」を大切にする

一連の探究の過程において「見通し」と「振り返り」の場面を設定した。仮説設定や計画立案の場面などにおいて、上記の①②での見方・考え方と「事象」または「課題」との結び付けを生徒に行わせることで、見通しをもった仮説設定や計画立案となり、生徒が主体的に探究する姿へつながると考えた。また、授業の終わりに生徒のメタ認知的活動を促すことで、生徒が獲得した資質能力や豊かになった見方・考え方などの学びを自覚することやそれを次の学習課題と結び付けることができ、生徒の主体性が育まれると考えた。

研究発表会では、「事象提示」「仮説設定」「計画立案」「検証実験」「結果分析」「考察」という流れで授業が進められた。「事象提示」で見方・考え方を働かせたことで「仮説設定」では自分なりに見通しをもって積極的に自分の考えを表現する生徒や、「計画立案」で見通しがもてたことで「検証実験」では短時間でスムーズに操作を進める生徒の姿が見られ、その有効性を確認できた。一方で、「振り返り」の時間が足りなかった。ツールの活用などにより時間を確保することが課題である。

8 運営の成果と課題

○新型コロナウイルス感染症対策もあって通常開催はできなかったが、オンラインのみで行うのではなく参加形態を工夫して会場参加とオンライン参加の2通りで実施したことにより、密を避けながらも会場の参加者も一定数集まり、十分な授業協議を行うことができた。

○研究概要説明や授業公開、授業協議会を通して、現地で参加した当郡市中教研理科部員と研究の成果や課題を共有できた。また、それを基に各校での実践を進めてもらうことで当郡市中教研理科部員の研究意欲や研究の質の向上に寄与することができた。

▲研究発表会に向けた事前の取組には課題が残った。上記のような事後ではなく、事前に当郡市理科部員に研究の手立てを示し、各校で実践を進めてもらってから研究発表会を迎えられるとより質の高い研究になったものとする。

▲オンライン参加者に向けて授業のZoom配信を行ったが、映像や音声が乱れることが多く、課題が残った。今回はWeb会議用の高性能カメラ・マイクを使用したZoomによる配信であったが、それらはそもそもWeb会議用であり、授業の配信には適さなかったものとする。

資 料

- 1 部会名 理科
- 2 郡市名 村上・岩船 3 会場校 村上市立岩船中学校
- 4 研究会開催期日 令和 3 年 11月 11日 (木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	下越教育事務所・指導主事	平山 裕也
	村上市立朝日中学校・校長	木ノ瀬 隆幸
(2) 研究推進責任者	村上市立村上第一中学校・教諭	長谷川 智大
(3) 会場校責任者	村上市立岩船中学校・教頭	佐藤 雅秀
(4) 研究推進委員 (授業者)	村上市立岩船中学校・教諭	水澤 和雅
	村上市立朝日中学校・教諭	富樫 英夫
	村上市立山北中学校・教諭	武藤 重之
	村上市立村上第一中学校・教諭	倉町 宏治

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	4月27日/朝日中学校	14	組織作りおよび計画立案・研究2年目の研究計画を立て、見直しをもつことができた。
2	7月6日/村上市理科教育センター	7	研究1年目の引継ぎ事項・前部長とともに研究概要の確認を行い、研究推進委員で研究内容について共有することができた。また、研究発表会の授業について構想を広げることができた。
3	8月6日/村上市理科教育センター	6	研究発表会の授業の指導案検討・研究発表会の授業の単元や手立てについて検討し、指導案を改善することができた。
4	10月11日/村上市理科教育センター	6	研究発表会の授業の指導案検討・研究発表会の授業の展開や手立てについて検討し、指導案を改善することができた。
5	11月11日/岩船中学校	28	研究概要説明および授業公開を踏まえた成果と課題・研究および授業の内容や手立てについてその有効性をKPT法で検討し、成果と課題をまとめ、当郡市中教研理科部員で共有することができた。
6	12月1日/村上市理科教育センター	7	研究のまとめ・研究推進委員で研究の成果と課題を整理し、まとめることができた。

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (28) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (20) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (6) 名	(5) その他 (地域・保護者の方) (1) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
2年1組	電流とのはたらき	水澤 和雅

9 分科会 (全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者・提案者
全体会 研究概要説明 授業協議会	生徒の主体性を育む工夫として本時の手立ては有効であったか	下越教育事務所 指導主事 平山 裕也 様	研究推進責任者 村上市立村上第一中学校 教諭 長谷川 智大

令和3年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 小田 久美子
(学校名: 新潟市立新津第二中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 英語部

2 郡市名 新潟市 3 会場校 潟東中学校

4 研究主題

主体的に学び合い、4技能5領域をバランスよく高めていく生徒
～評価材料共有による単元を通じた指導を通して～

5 主題設定の理由

新学習指導要領が完全実施となった今年度は、英語教育の大改革の年度となる。生徒の「思考力」「判断力」「表現力」をいかに育むことができるのかについては、今後何年かかけて、新潟市全体で共有し、研究し続けなければいけない大きな課題となる。

昨年度は、コロナウィルス感染拡大のため、新潟市中教研としての活動を例年とは大きく異なる形で行った。活動の一つは、新潟市教育委員会、総合教育センターと連携を図って指導と評価の一体化に関わる研修を各校で実施したことである。そしてもう一つは、幹事が中心となり、今年度の学習指導要領完全実施に合わせた指導と評価のための資料の作成を行ったことである。幹事で行った資料作成は、5領域のひな型となるものを目指し、各領域で一つの例を示し、市内で共有した。

しかし、実際に年度がスタートすると、各校では、先を見通した指導について準備時間があまりにも少なく、指導と評価が追いつかない現状が露呈した。更に、GIGA スクール構想の推進による ICT の活用においても、効果的な使用について大きな課題を抱えている。

そこで、今年度は、生徒が主体的に学び、英語の4技能・5領域をバランスよく高めていくために、新潟市中教研として、できる限りの資料の作成を行い、それらを新潟市全体で共有していきたいと考えた。この大改革に向かうには、新潟市全体で足並みを揃え、「チーム新潟市」として取り組んでいく必要があるからだ。生徒の「思考力」「判断力」「表現力」を育むことのできる教材等を作成・共有し、それらをどのように実際の指導に生かしていくことができるのかを研究を通して学んでいくことで、「主体的に学び合う」生徒の育成を実現できると考え、本研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

新潟市教育委員会が指導の重点に置いているのが「学習課題」とそれに正対した「まとめ」のある授業展開である。これまでも、「学習タスク」の段階において、生徒に問題意識をもたせたうえで、「学習課題」を提示することに重きを置いてきた。その「学習課題」の解決に向けて「学び合い」の活動を設定し、課題に正対した「まとめ」を行う。「まとめ」で提示されたことをもとに、習熟を図るための練習を行う。その際は、生徒一人一人に「めあて」をもたせ、練習後は「振り返り」を確実に行わせることが大切になる。

「学習」「練習」のタスクについては、新潟市で繰り返し研修を行い、かなり定着してきている。「学習タスク」の「分析する段階」においては、「学び合い」が有効となる。なぜ示されたモデルは「よく伝わる」のかについて、仲間と分析的に考える機会を設けることで、「思考力・判断力・表現力」の育成にも寄与する。

「練習タスク」においては、「分析する段階」での「まとめ」をよりどころとし、個々の能力を考慮した上で、互いのパフォーマンスについて推敲し合ったり、評価し合ったりする「学び合い」が効果的である。この「練習」の段階で、生徒がさまざまな表現に触れることにより新しい気づきが生まれ、英語における「見方・考え方」が深まると考える。この指導法においては、最終的にどの

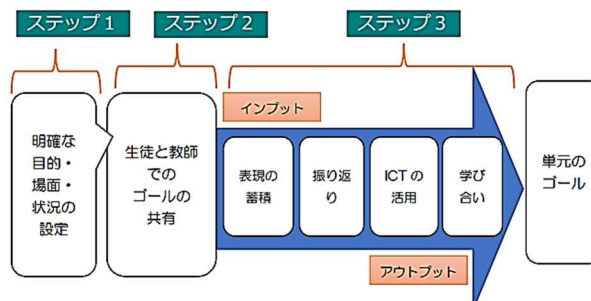
ようなタスクで生徒の到達度を見とるのかという「評価タスク」を決定したうえで、段階的な指導を展開していくことが重要であり、まさに逆向き設計の考え方に則っている。学習活動をこのように段階を追って丁寧に組織していくからこそ、生徒は自らの課題を認識し、どうやってパフォーマンスを高めていけばいいのかということについて、見通しをもつことができると考える。

今年度は、「学習」「練習」「評価」のタスクを通して力を身に付けさせることに加えて、「単元を通した指導」と単元のゴールに向かうための「明確な目的・場面・状況」の設定に特に重点を置いた。新潟市中教研として指導と評価に関する資料を作成する際に、次の5点に特に留意した。

- (1) 逆向き設計による、活動の有機的なつながり
- (2) 明確な目的・場面・状況の設定
- (3) ICTの活用
- (4) 相当する生徒のパフォーマンスの実際の把握
- (5) 小学校のレディネスの考慮

生徒の動機づけをいかに明確なものとするかは、英語を使用する目的や場面や状況に大きく委ねられている。コミュニケーションを行う目的や場面・

状況等を明確にした上で、生徒と教師で単元のゴールを共有し、ゴールに向かってスモールステップで向かっていく。表現の蓄積・振り返り・ICTの活用・学び合いを重視した活動を通し、生徒自ら主体的に活動する授業を目指した。



7 研究の成果と課題

研究の成果としては、以下の3点が挙げられる。

- (1) 「学習タスク」では「学習課題」と「まとめ」を、その「まとめ」を受けて、「練習タスク」では一人一人の「めあて」と「振り返り」を行うという授業スタイルが定着してきている。
 - (2) ICTを駆使して活動方法の説明を視覚的に提示することで、「練習タスク」の活動時間を確保することができる。
 - (3) 生徒自身がタブレット端末を活用して、プレゼンテーション資料を作成したり、即興で資料を提示したりすることができた。また、意見共有の場面でも有効に活用することができた。
- 一方、課題としては、以下の3点が挙げられる。

- (1) 評価方法やその明確な基準について、さらなる研修の必要がある。
- (2) 生徒のパフォーマンスを中心としたスピーキングの指導に焦点を当てた実践が中心となり、リスニングやリーディングに関わる指導の在り方についての実践が少ない。
- (3) タブレット端末の有効な活用方法について今後も研修を重ねる必要がある。

今後は、スピーキング以外の技能についての実践を重ねることと、タブレット端末の有効活用について研修を重ね、新潟市全体でその成果の共有を図っていく必要がある。

8 運営の成果と課題

運営の成果として、今年度は研究推進委員会の回数を極力減らした中でも、研究推進校の協力を得て各校で準備を重ねていただき、研究を進めることができたことである。研究発表会当日も、オンライン研修で行うことができた。また、新潟市内の英語科職員で Google Classroom の機能を活用し、日ごろの授業の取組内容や、ICTの活用法、指導と評価に関わる資料の共有を始めた。学校の枠を越え協力し合うことで、新しい学習指導要領に沿った指導・評価についての情報共有ができたことは、今年度の大きな成果と言える。

一方課題としては、推進校の先生方にとっては、各校での業務に加え、資料作成や授業公開における負担が増えてしまったことが挙げられる。各校の実践を共有し合い、新潟市で提案した指導と評価に関する資料を基にした授業を近隣校同士で公開し合うなど、取組の更なる工夫が求められる。

- 1 部会名 英 語 部
- 2 郡市名 新 潟 市
- 3 会場校 オンライン研修会 (授業校：潟東中学校 協力校：山潟中学校)
- 4 研究会開催期日 令和 3 年 11 月 4 日 (木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市教育委員会学校支援課 指導主事	中川 久幸
(2) 研究推進責任者	新潟市立新津第二中学校 教諭	小田 久美子
(3) 会場校責任者	新潟市立潟東中学校 教諭	保倉 裕治
(4) 県・郡市指導主事	新潟市立総合教育センター 指導主事	小林 英男
(5) 顧問	新潟市立曾野木中学校 校長	塩田 信明
	新潟市立松浜中学校 校長	内藤 浩悟
	清心女子中学校 校長	佐久間 美左子
(6) 研究推進委員	新潟市立松浜中学校 教諭	橋本 千裕
	新潟市立葛塚中学校 教諭	上村 慎吾
	新潟市立五十嵐中学校 教諭	山本 優子
	新潟市立寄居中学校 教諭	風間 皓介
	新潟市立宮浦中学校 教諭	梁川 暁男
	新潟市立下山中学校 教諭	山崎 寛己
	新潟市立坂井輪中学校 教諭	熊倉 了子
(東地区会場校・授業者)	新潟市立山潟中学校 教諭	渡邊 慶子
(東地区会場校・授業者)	新潟市立山潟中学校 教諭	若槻 理恵
(研究推進校)	新潟市立大江山中学校 教諭	岩崎 亜矢子
(研究推進校)	新潟市立石山中学校 教諭	田澤 真弓
(研究推進校)	新潟市立東石山中学校 教諭	柏森 直人
(研究推進校)	新潟市立鳥屋野中学校 教諭	安宅 いずみ
(西地区会場校・授業者)	新潟市立潟東中学校 教諭	保倉 裕治
(研究推進校)	新潟市立岩室中学校 教諭	本間 彩
(研究推進校)	新潟市立西川中学校 教諭	西山 克幸
(研究推進校)	新潟市立味方中学校 教諭	青木 太郎
(研究推進校)	新潟市立黒埼中学校 教諭	西脇 美弥子

6 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	5/6 曾野木中学校	29	研究発表会当日の公開授業に向けた構想検討
2	7/13 山潟中学校	8	授業研究（3年 渡邊慶子教諭・若槻理恵教諭）の参観・協議会
3	8/5 曾野木中学校	21	研究発表会当日の公開授業に向けた指導案検討 指導と評価に関する資料検討会
4	8/31 潟東中学校	12	授業研究（2年 保倉裕治教諭）の参観・協議会
5	10/21 宮浦中学校	14	研究発表会当日の発表資料検討・準備

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	193名	(3) 小学校・高等学校教員	1名
(1) 郡市内中学校会員	186名	(4) 教育委員会・センター	3名
(2) 他郡市中学校会員	3名	(5) その他（大学教員・学生）	0名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
2年B組	Lesson 2 My Dream	保倉 裕治 教諭（潟東中学校）
3年2組	Lesson 1 Power of Music	渡邊 慶子 教諭（山潟中学校）
3年4組	Lesson 1 Power of Music	若槻 理恵 教諭（山潟中学校）

9 全体協議会

協議題	指導者	司会者	提案者
主体的に学び合い、4技能5領域をバランスよく高め ていく生徒 ～評価材料共有による単元 を通した指導を通して～	新潟市教育委員会 学校支援課 指導主事 中川 久幸 様 新潟市総合教育センター 指導主事 小林 英男 様	新潟市中教研英語部 副部長 新潟市立五十嵐中学校 山本 優子 教諭	新潟市中教研英語部 部長 新潟市立新津第二中学校 小田 久美子 教諭

〇〇地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 相田 一樹
(学校名: 長岡市立東北中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 英語<中越地区>
- 2 郡市名 長岡市三島郡 3 会場校 長岡市関原中学校
- 4 研究主題

即興力の育成～既習事項を実際の使用につなげる統合的な活動の工夫～

5 主題設定の理由

新学習指導要領の全面実施に向けて、やり取りを重視した活動が広まりつつある一方、その内容や評価の在り方に多くの先生方が課題を感じているようである。

外国語によるコミュニケーションでは、場面や状況を適切に捉え、他者に配慮しながらその目的が達成されるように、内容や言語形式を即座に整理・選択することが大切であることから、本部会のテーマを上記のように設定した。

6 研究の方法と内容

即興的にやり取りをする力を養うために、以下の手立てが大切であると考え、研究・実践を行ってきた。

(1)即興で伝え合う活動を帯活動に位置付け、繰り返し、粘り強く指導する。

やり取りを行うテーマを複数用意し、それらの中からテーマを不作為に選択してチャット活動を行う。自らの生活体験と既習の学習内容を頭の中で瞬時にリンクさせ、即興的に会話のイメージを組み立てることができるようにする。

(2)会話を継続・発展させるための手法を用いる。

他者からのフィードバックを基に、自身の表現の幅を広げ、会話を継続・発展させることができるように、ペア活動を工夫する。教師が会話を継続・発展させるためのモデルを見せる Interactive Talk（双方向会話）を行う。

(3)既有知識の elabolation（精緻化）を促進させる手法を活用する。

どんな場面でどんな表現が使えるのか、似通った表現にどんなものがあるか、表現を機能毎にまとめたワークシートを作成し、実際の会話の場面で活用する。

生徒がもっている断片的な知識を洗練させたり、統合させることで、学びが効果的に進むと考える。

7 研究の成果と課題

やり取りを行うテーマを複数用意し、それらの中からテーマを不作為に選択してチャットを行う活動を帯活動として継続的に取り組むことができた。生徒はトピックが与えられた時に、生徒は自らの生活体験と既習の学習内容を頭の中で瞬時にリンクさせ、即興的に会話のイメージを組み立て、やり取りをすることができるようになった。

また、即興的に会話を継続・発展させる力を付けさせるためには、以下の①～④の4つのステップ

をセットとして継続的に指導することが大切であることがわかった。

- ①Interactive teacher talk（教師主導の発問や話題の投げかけ）
- ②S-S Interaction 1（生徒同士のやり取り）
- ③Sharing（気付きや再確認の促し）
- ④S-S Interaction 2（類似のトピックでのやり取り）

その他に、生徒が学習活動の必要性を理解できるような・場面・文脈の提示の工夫を行ったり、思考を可視化するフレーム（ホワイトボードやICT etc）を活用するなど、多くの実践を行い、成果を上げることができた。

8 運営の成果と課題

- ・市教研の推進委員の方から全面的にバックアップをしていただいた。会場校責任者と授業者と研究推進委員で計画的に準備を進めることができた。
- ・授業公開は夏の段階で断念したが、その代わりとなる手段（研究の解説ビデオと授業動画を YouTube で配信する）を提示することができた。
- ・動画を使っただけの発表となったが、県事務局の関野先生から、公開の方法について、適切な助言をしていただいた。
- ・研究会当日は他郡市からも10人以上の参加者があった。
- ・「やりとり」の評価についての更なる研究を推進する必要がある。評価方法の工夫によって、生徒の更なる力の向上が見込まれる。

資 料

- 1 部会名 英語<中越地区>
- 2 郡市名 長岡市三島郡 3 会場校 長岡市立関原中学校
- 4 研究会開催期日 令和3年11月26日(金)
- 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	長岡市教育委員会・指導主事	星野 和子
(2) 研究推進責任者	長岡市東北中学校・教諭	相田 一樹
(3) 会場校責任者	長岡市関原中学校・教諭	高橋亜希子
(4) 県・郡市指導主事	長岡市南中学校・校長	宮 宏之
(4) 研究推進委員(授業者)	長岡市立関原中学校・教諭	渡邊 直樹(授業者)
	長岡市立南中学校・教諭	大矢 寿和
	長岡市立宮内中学校・教諭	涌井 幹子
	長岡市立東北中学校・教諭	釣巻 朱里
	長岡市立西中学校・教諭	箕輪 しのぶ
	長岡市立江陽中学校・教諭	鎌田 雅俊
	長岡市立関原中学校・教諭	奥田 凱 人
	長岡市立旭岡中学校・教諭	池田 紗貴子
	長岡市立刈谷田中学校・教諭	西澤 思音
	長岡市立川口中学校・教諭	小島 歌織

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	4/23(金) 南中	10	研究の進め方についての協議
2	5/18(火) 関原中	2	研究推進責任者と授業者で打合せ
3	5/26(水) 東北中	10	研究推進委員2名(相田・釣巻)による授業公開
4	7/15(木) 西中	10	研究推進委員(箕輪)と東北中英語科職員(多田)による授業公開
5	8/3(火) 関原中	4	会場校責任者(高橋)と研究推進責任者(相田)、関原中英語科職員(渡邊・奥田)による研究会についての協議
6	9/17(金) ネット	14	授業動画を使つての意見交換
7	10/15(金)	13	授業者によるプレ授業の公開と協議
8	11/26(金)	12	研究会当日、手立ての有効性について、KPT法を使つての協議

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数	(41) 名	(3) 小学校・高等学校教員	(0) 名
(1) 郡市内中学校会員	(12) 名	(4) 教育委員会・センター	(1) 名
(2) 他郡市中学校会員	(28) 名	(5) その他(地域・保護者の方)	(0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年2組	ALTと即興インタビューをしよう	渡邊 直樹

9 全体協議会の内容

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
研究解説ビデオの 視聴と解説	研究解説動画での提 案			長岡市立東北中学校 相田 一樹
授業ビデオの視聴 と解説	授業動画での提案			長岡市立関原中学校 渡邊 直樹
研究と授業につい ての質問			長岡市立南中学校 大矢 寿和	
協議	5グループでのファ シリテーション	ファシリテーターは研究推 進委員	長岡市立南中学校 大矢 寿和	
御指導		長岡市教育委員会指導主事 星野 和子様		

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 中川 孝嘉
(学校名：阿賀町立三川中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 英語

2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 五泉市立五泉中学校

4 研究主題

英語で自分の考えや気持ちを伝え合う生徒の育成
～生徒に見通しをもたせる学習プロセスの工夫～

5 主題設定の理由

学習指導要領では、その目標において4技能の1つである「話すこと」が、新たに「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」に分けて示された。とりわけ、即興で伝え合う力の育成を強く求めている。

令和元年度当初、当郡市研究推進委員会では、「英語で自分のことを表現させたいが、既習事項を忘れていたり、活用することができなかつたりする生徒が多い。」「即興的なやり取りを続ける生徒を育成したいが、どうしたらいいのかわからない。」といった教師の悩みを共有した。当郡市の教師は学習指導要領を受け、「生徒に英語を話させたい。」という願いを一層強くした。

しかし、郡市内の各校で行った生徒の意識調査では、英語を勉強する理由として、「テストでいい点を取りたいから。」「いい高校・大学に入りたいから。」「就職するとき役立つから。」といった点数や進路に関わる項目が上位を占めた。また生徒の英語力については、NRTの結果から、「話すこと」「書くこと」といったアウトプットの力が低い学校が多いという実態であった。

つまり当郡市では、「英語で気持ちや考えを表現させたい。」という教師の願いと、生徒の意識や力に差が生じているという現状があった。この課題を解決する方法を研究する過程で見えてきたのは、見通しをもって学ぶことの重要性である。教師は、Can-do リストから生徒が目指す到達目標を明確に示し、指導内容をバックワードで計画し、指導する。教師と生徒が目標を共有しながら、見通しをもって単元の学びを進めることを目指し、研究主題を設定した。

また、目指す生徒の姿を、「相手の様子に配慮しながら、既存の知識と新たに学んだ知識を結びつけて、適切な英語表現でやり取りを続けられる生徒」とした。

6 研究の方法と内容

研究主題を受け、以下の3つの深い学びへのステップで、目指す生徒の姿の実現を目指す。

- 1) 生徒が単元の見通しをもって活動するために、ループリックを活用し、バックワードデザインによる授業を実践する。単元のゴールを初めに明確に示して生徒にその後の学習の見通しをもたせ、各授業の振り返りで学びの成果を実感させることで、新たな学習内容へ意欲をもたせ、「主体的な学び」につなげる。
- 2) 生徒の既習事項の復習、あるいは即興的に英語で伝え合う力を身に付けるために、帯活動を継続して行う。生徒が「英語で考えや気持ちを伝え合う」ときに、「基礎的・基本的な内容や既習事項を忘れていたり、活用したりすることができない」ことで活動が滞らないよう、帯活動の1つ目として「既習事項の復習」を行う。また、相手の様子に配慮しながら、英語で考えや気

持ちを伝え合う即興的なやり取りを、帯活動の2つ目の活動とする。帯活動では、ペアやグループ学習を効果的に仕組み、生徒の発話場面を増やし、相互作用によって学びを豊かにし、「対話的な学び」につなげる。

- 3) コミュニケーションを行う相手の立場や文化的背景を理解し、その目的や場面、状況などを明確にした言語活動を実践する。生徒が、相手に配慮しながら目的や場面、状況に応じて、これまでに学んだ適切な英語表現を使用し応答を重ね、やり取りが続けられるよう、教師は生徒に具体的な言語材料を提示せずに、各単元の言語活動を実施する。より自然に「英語で考えや気持ちを伝え合う」ため、可能な限り発表の中で聞き手を巻き込む質問をするような場面も設けていきたい。そういった活動を積み重ね、「深い学び」を目指す。

7 研究の成果と課題

令和3年11月26日（金）に五泉市立五泉中学校にて英語教育研究発表会を開催した。当郡市英語部員のみ会場へ集まり、下越地区内他郡市の参会者にはWebにて授業参観、および協議会に参加してもらった。以下のような成果と課題が確認された。

《成果》

- ・授業者は、単元の初期段階で、単元の最後に実施するパフォーマンステスト課題とそのループリックを提示した。バックワードデザインの授業を実践することにより、生徒はゴールへのイメージを明確にもって活動できた。
- ・生徒が活動中であっても、授業者は全体の流れをいったん止めて、授業支援アプリを活用して、よくある誤り等を全体で確認した。生徒と教師で共有する場面が研修できてよかった。
- ・ICTを有効に活用する点については、英語の語順、および綴りをドリル学習できるソフトを活用することにより、生徒の集中力が持続するように支援できた。また、そのソフトを知らなかった教員の中には、すぐにでもそのソフトを活用したい、というような声も上がった。

《課題》

- ・教科書だけでは、パフォーマンステストに直接つながる活動をくり返し実施することは困難である。パフォーマンステストを常に意識しながら、知識を定着させる活動、あるいは教科書外の言語活動を帯活動や授業の終末の活動などで実施していきたい。
- ・本時の授業では、即興性を求めるという点では弱く感じた。パフォーマンステスト実施の段階で、ALTから内容に関わって追加の質問を2問してもらい、それに的確に応答するという活動を用意しているので、それに似た帯活動を繰り返し実施することで、生徒の即興力を養いたい。
- ・本時では、まだしっかりと本時で扱う言語材料の定着がなされていない生徒に言語活動を行ったように感じた参観者もいた。授業者は繰り返し行う言語活動の中で、言語材料の定着を図った。単元で扱う言語材料の定着のためのドリル的な活動（「知識」として評価）と、パフォーマンステストを意識した言語活動（「思考・判断・表現」として評価）を、どの時点で授業に取り入れるか、またそのバランスが難しいと感じている。生徒の実態に応じて、各校で研修を深めていきたい。

8 運営の成果と課題

コロナウイルス感染拡大防止のためWebでの実施となった。カメラワークや、音声を活動中の抽出生に焦点化する方法など、Webならではの課題が生じた。他地区の研修では、授業録画YouTubeで限定公開し、その授業についてWebでグループ検討した例もある。コロナ対策が続くのであれば、どのような方策をとれば参会者が大きな成果を得られる研修となるか、さらなる検討が必要である。

資 料

- 1 部会名 英語
- 2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 五泉市立五泉中学校
- 4 研究会開催期日 令和3年11月26日(金)
- 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	下越教育事務所 指導主事	友野 直己 様
(2) 研究推進責任者	阿賀町立三川中学校 教諭	中川 孝嘉
(3) 会場校責任者	五泉市立五泉中学校 教諭	菊地 清勝
(4) 研究推進委員(授業者)	五泉市立五泉中学校 教諭	井上 和徳
	五泉市立五泉中学校 校長	大川 正史
	五泉市立五泉北中学校 教諭	齋藤 智子
	五泉市立村松桜中学校 教諭	井上 定浩
	五泉市立村松桜中学校 教諭	捧 桃子
	阿賀町立阿賀津川中学校 教諭	伊藤 エリカ

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	10月26日/五泉中	6	プレ授業。バックワードデザインによる授業の実践。(授業者:五泉中 井上和徳)
2	11月4日/五泉中	6	授業構想の検討。ルーブリックの内容の検討。
3	11月11日/五泉中	5	授業構想の再検討。パフォーマンステストに向けての言語活動の検討。

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (30) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (14) 名	(4) 教育委員会・センター (0) 名
(2) 他郡市中学校会員 (16) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
3年4組	Lesson 5 関係代名詞	井上 和徳			

9 分科会(全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	生徒が英語で自分の考えや気持ちを伝え合うために、生徒に見通しをもたせる学習プロセスの工夫がなされていたか	下越教育事務所 指導主事 友野 直己 様	阿賀町立三川中学校 中川 孝嘉 教諭	三川中学校 中川孝嘉教諭

令和3年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書 (2年次)

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 柳 啓介
(学校名: 柏崎市立第五中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 上越地区保健体育
- 2 郡市名 柏崎市 3 会場校 柏崎市立第三中学校

4 研究主題

ファシリテーションを通して、主体的に活動する生徒の育成

5 主題設定の理由

全県保健体育の研究主題「豊かなスポーツライフを目指した学び合う授業の創造」を踏まえ、上越地区の目指す生徒の姿として、「他者との望ましい関わりを通して、課題解決に向けて主体的に活動する生徒」を掲げた。その望ましい関わりを生むための手法として、ホワイトボードや学習用 ipad などのツールを利用したファシリテーションを用い、課題解決に向けて主体的に活動することでスポーツの楽しさにつなげたいと考えた。

6 研究の方法と内容

発表会で実施する単元を「マット運動」に決め、上越地区の研究主題である「ファシリテーションを通して主体的に活動する生徒の育成」を目指して、研究を行った。その実現に向けて、県中教研保健体育部から提案された「保健体育学び合い 10」の視点を重視し、推進委員会ではどのようなファシリテーションの形が有効であるかを協議した。委員には年間を通してファシリテーションを用いた授業を展開してもらい、有効な手法については共有してきた。

マット運動に関しては以下の内容と方法で取り組んだ。

【1年目】

(1)内容

- ・身に付けた個人技能を、集団でリズムに合わせてシンクロマットをつくることで、技能の定着と楽しさの実感につなげる。

(2)方法

- ①メトロノームを活用する。
- ②タブレットを活用し、客観的に演技を見ることで、仲間との同調やズレを可視化させ、ファシリテーションにつなげる。

【2年目】

(1)内容

- ・最初から音楽に合わせた集団でのシンクロマットを行うことで最終的に個人技能の向上につなげる。

(2)方法

- ①音楽やリズムを活用する。
- ②学習用 ipad を活用し、それをもとにホワイトボードで話し合い、自分たちの課題に気づかせる。
- ③目的が異なる練習場所を設定し、それをローテーションすることで、いろいろな切り口でのファシリテーションを生み、集団または個人としての技能向上につなげる。

7 研究の成果と課題

(1)成果

マット運動のシンクロマットという題材は、当初はかなりイメージしづらく、難しいのではないかという声も多く挙がったが、場の設定の工夫やリズムや音楽に合わせて動くという発想、また、構成のパターンの提示など、教師側から生徒に与えるべき要素を研究、吟味したことで最初にイメージしていた形に近づいたと感じる。研究推進委員からプレ授業を行ってもらい、協議したことにより、研究のイメージを深めることができた。また、シンクロマットを創っていく過程で、ipad やホワイトボード等のツールの利用が必然的にファシリテーションを生み、演技の完成度が上がっていく喜びを全員で感じることができた。そして何よりも音楽のリズムに合わせ、楽しく主体的にマット運動に取り組む姿が見られたことが一番の成果であった。

(2)課題

今年度は最初から音楽に合わせて集団演技を構成していくことが最終的に個人技能の向上につながるという提案をさせていただいた。協議会では、研究主題に向けて手立てが有効に作用していたことを評価していただく一方で、果たして個人技能が向上しているのか、という指摘もいただいた。今後個人技能のテストが行われる予定だが、グループで集団演技を構成したことで個々の技能習得がどこまで図られたのか分析・検討していく。

8 運営の成果と課題

(1)成果

今年度はコロナ渦ではあったが、研究発表会のプレ授業を実施できたことは発表会に向けて大いに参考になった。また今年度は、会場校責任者とも連絡を密に取り合い、お互いに分業しながら運営を進めることができた。その中で、直前に研究推進責任者が会場校に出向き、他クラスでの同授業を参観できたことも本番の授業をつくっていく上で大変有効だったと感じる。また、推進委員会や協議会においては、KPT 法を用いて協議したことで、委員の参画意識が高まり、チーム全体で研究を深めることができたと考える。

(2)課題

今年度はコロナ渦で縮小の方向ということもあり、研究発表会のプレ授業は実施したが、委員同士の授業の見せ合いは行わなかった。研究主題である「ファシリテーションを通して主体的に活動する生徒の育成」を実践するために、さらに有効なファシリテーションの在り方について研修を深めていく必要がある。また、保健体育授業における学習用 ipad の有効な活用方法についても、今後研究を深めていきたい。

資 料

- 1 部会名 上越地区保体
- 2 郡市名 柏崎市 3 会場校 柏崎市立第三中学校
- 4 研究会開催期日 令和3年11月19日(金)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	柏崎市立荒浜小学校・校長	中村 正人
(2) 研究推進責任者	柏崎市立第五中学校	柳 啓介
(3) 会場校責任者	柏崎市立第三中学校・教諭	吉田 聡
(4) 県・郡市指導主事	柏崎市教育委員会・指導主事	木村 貴之
(4) 研究推進委員(授業者)	柏崎市立第三中学校・教諭	佐藤 光介
	柏崎市立第一中学校・教諭	猪爪 基成
	柏崎市立第二中学校・教諭	齋藤 夏樹
	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	原 由紀
	柏崎市立北条中学校・教諭	山崎 崇
	柏崎市立西山中学校・教諭	山本 健二
	柏崎翔洋中等教育学校・教諭	遠藤 智也

6 研究推進委員会の実施日, 参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	7月6日(火)/第三中	11	1年時の成果と課題確認、研究主題の確認、授業構想について今年度の研究の方向性と授業のイメージをもつことができた
2	8月6日(金)/第三中	10	授業構想・手立て等について、指導案検討①、KPT法による協議 授業構想と手立てを明確にすることができた
3	10月20日(水)/第二中	10	プレ授業(齋藤教諭): マット運動、指導案検討②、KPT法による協議 発表会に向けて具体的な授業のイメージをもつことができた
4	11月19日(金)/第三中	10	上越地区保体研究発表会、KPT法による協議会、手立てが有効であったか シンクロマットの有効性と課題について共有することができた
5	1月26日(水)/第三中	9	研究の成果と課題、旅費支給

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (33) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (10) 名
(1) 郡市内中学校会員 (15) 名	(4) 教育委員会 (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (7) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年1組	マット運動(シンクロマット)	佐藤光介

9 分科会(全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
協議会	生徒が主体的に活動するために手立てが有効であったか	柏崎市荒浜小学校 校長 中村 正人 様 柏崎市教育委員会 指導主事 木村 貴之 様	柏崎立第三中学校 吉田 聡 教諭	第三中学校 教諭 佐藤 光介

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 相場 雅典

(学校名: 見附市立見附中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 保健体育

2 郡市名 見附市

3 会場校 見附市立西中学校

4 研究主題

自己の課題を発見し、互いに学び合い、高め合う生徒の育成

5 主題設定の理由

平成29年度改訂中学校学習指導要領の中で、保健体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す。」(一部抜粋)と記されている。つまり、生涯にわたり豊かなスポーツライフを創造することが、保健体育科の究極の目標である。

また、スポーツ庁が策定した第2期スポーツ基本計画で、基本方針は「スポーツで人生が変わり、社会を変え、世界とつながり、未来を創る」と唱えている。スポーツを「する」ことはもちろん、「みる」「ささえる」ことでみんながスポーツの価値を享受でき、人生を楽しく健康で生き生きしたものになると謳っている。

よって、これからの保健体育科の学習においては、生徒一人一人が、運動やスポーツの価値を見出し、楽しさや喜びを味わおうとする自主的な態度の育成が求められる。そして、生涯にわたり豊かなスポーツライフを実現するための資質能力を育むためには「できた」「分かった」「上達した」などの達成感・成就感を味わうことが大切である。それがさらなる自己の課題を発見・解決していこうとする、課題を解決していこうという意欲につながり、好循環を生む。また、課題解決を図る場面では、「仲間と一緒に活動する」、互いに「みる」「ささえる」といった仲間の存在が不可欠である。互いにコミュニケーションを深めることによって、自己肯定感が高まる。この一連の学習過程が生徒に安心感を与え、さらなる意欲の向上やより高い目標設定にもつながり、一層資質能力が高まると考えた。

以上のことから本研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

研究主題である「自己の課題を発見し、互いに学び合い、高め合う生徒の育成」を実現するために、以下の3点に取り組む。

- (1) ファシリテーションやスポーツオノマトペを活用し、動きのコツやポイントを共有し、運動に活かす。
- (2) ファシリテーションを活用し、個々の課題を発見する。
- (3) 課題解決に向けて、「練習計画シート」を作成、実行することにより、完成度を高める。

生徒自身が運動技能の構造や体の動き等を理解していなければ、教え合うことはできない。さらに、教えるポイントが人それぞれ異なれば、教わる側も混乱する。合理的な課題解決に向けては、まず、動きのコツやポイントを仲間同士で共有する必要がある。そこで、ファシリテーションやスポーツオノマ

トペを活用し、動きのコツやポイントを共有する。

次に、技の習得場面においては、ファシリテーションを活用し、生徒一人一人が自ら課題を発見し、課題を設定する。その後、課題を解決するために、仲間と協力して練習場面や道具を工夫するための「練習計画シート」を作成する。共有した動きのコツやポイントを用いて、教え合い、技の完成度を高めたり、仲間の目標達成に向けて協力したりする。そうすることにより、教え合う意味を生徒自身が実感し、互いに技能や思考を高め合うことができる。

7 研究の成果と課題

自己の課題を発見し、互いに学び合い、高め合う生徒の育成のために、どのような手立てがより有効であるかについて、研究推進校の協力を得ながら研究を進めてきた。

3点の取組（動きのポイントやコツの共有、ファシリテーションを活用した課題発見、課題解決のための練習計画シート作成、実践）の有効性を実践した。

動きのポイントやコツの共有について、「スポーツオノマトペ」を活用したことは、生徒は動きのパワーを示す「グッ」「ドン」やスピードを示す「サッ」「タタッ」などの擬音に表し、動きをイメージしやすい様子であった。動きに対する擬音は一人一人異なるものの、ワークシートを用いてファシリテーションをすることによって、動きのポイントやコツを共有することができた。また、練習場面では、動きを表現した擬音を「擬音シート」に書き写し、運動する生徒に見せ、意識させる様子が見られた。

ファシリテーションを活用した課題発見では、「Good、More、Next」と表記したワークシートを用いて、良い面、課題面、これから取り組むべきことを生徒が積極的に意見を出し合う場面が見られた。また、見附市立西中学校の取組として、保健体育の授業だけでなく、学校行事や委員会、部活動での目標設定や振り返りの場面でも同様のワークシートを活用した。全校体制での取組が意欲的で主体的な課題発見、話し合いにつながった。

課題解決のための練習計画シート作成、実践では、練習計画シートには、どの局面に課題があるのか、課題を解決するために使用する道具、練習方法を記入する項目があり、生徒一人一人の課題に応じて、グループで話し合い、練習計画を考えていた。その計画を実践しながら、より良い跳び前転を目指し、完成度を高める様子が見られた。道具は、高く跳ぶためにフラフープやゴムひも、踏切位置を意識するためのマーカー、演技した10秒後に自分の演技を見ることができる遅延ソフト内蔵のタブレット等を用意した。どのグループも積極的に活用していた。

今後の課題として3つ挙げられる。1つ目は、3点の取組（動きのポイントやコツの共有、ファシリテーションを活用した課題発見、課題解決のための練習計画シート作成、実践）の有効性は検証できたが、この単元構成だと授業時間が増大する。この単元構成が定着すると授業時間も短縮でき、技能習得の時間を割くことができる。

2つ目は、技能の難易度が高くなると、苦手意識や不安感が生じてしまい、活発な取組が見られない可能性がある。今回は跳び前転でこの学習スタイルで実践した。事前の生徒アンケートでは、7割の生徒が跳び前転ができると回答していた。しかし、より難易度が高い倒立前転は1割程度である。いかに不安材料を取り除き、意欲的な取組を継続できるかが課題である。

3つ目は、どの単元でもこの学習スタイルが有効であるかの検証が必要である。また、GIGAスクール構想によって、一人一端末が整備された。それにより、どのように活用するかを各学校、各教科で研究・実践が進んでいる。保健体育科は、どの場面でICT機器を活用するか、ファシリテーションを用いたワークシートを活用するか、といったハイブリッドな授業が求められる。それと同時に運動量の確保も求められる。そのため授業の実践と検証を進めていく必要がある。

最後に、今回の研究で、保健体育の究極の目標である「生涯にわたる豊かなスポーツライフの創造」には、「仲間を支えること」の重要性を感じた。生徒が「できた」、「わかった」、「上達した」などの達成感・成就感を味わいつつ、仲間を支えることで同じように達成感や成就感を味わう。お互い支え、支えられながら、さらなる課題追求をすることが深い学びにつながっていくことが分かった。

生徒の学びを充実させるためには、ファシリテーションを通して表現力を養い、道具や場の工夫を通して何を活用し、どこで仲間を支えるかを判断する力を身につけさせることが重要である。そのためにも教員が研修を重ね、生徒と共に学び、真に必要な支援を行うことが大切であることも再確認できた。

8 運営の成果と課題

コロナ禍で研究発表会をどのような形態で開催するかを検討してきた。Web開催も検討したが、保健体育科の特性上、会場参加型にした。ただし、参加人数を制限した。研究発表会の案内を指導者、県中教研会長、県中教研事務局長、中越地区中教研会長、中越地区中教研事務局長、県中教保健体育全県部長、各地区保健体育副部長、各地区保健体育授業者、中越地区中教研保健体育各部長（長岡・三島、小千谷、十日町・中魚、魚沼、南魚沼・魚沼、三条、加茂・南蒲、燕・西蒲）、見附市中教研関係者のみに発送し、当日は27名の参加となった。

当日は、直接、授業の様子を見ていただき、協議会では3グループに分かれて、活発な意見交換が展開された。協議会に参加された先生方からは「ICT、オノマトペ、場の工夫、道具の活用など、FTにいかされ、それが技能向上につながっていたと思います。」といった公開授業における肯定的な感想を多数いただいた。また、協議会については、「多くの視点から協議することができ、得るものが大きかったです。普段はなかなかできない体育授業の検討となりました。」や「授業の振り返りに加え、2名の先生方からのご指導から、体育教師の本来のやるべき事、考え方を確認できました。」といった感想があり、これからの保健体育科教員としての深い話し合いが展開された。

今回、日程を「研究概要説明」～「公開授業」～「協議会・指導」とした。公開授業の前に、研究概要を説明し、参加者へ授業の内容等を理解していただく形式とした。それにより、参加された先生方からは「分かりやすく、丁寧な説明がとても良かったと思います。」といった肯定的な感想をいただいた。

その他の運営面（駐車場や表示、誘導等）についても、「入口から会場まで、案内がとても親切でした。本当にありがとうございました。」といった感想があり、概ね好評であった。会場校職員からも協議会場準備や駐車場誘導等、多大な協力をいただくことができた。

参加人数を制限した点については、「コロナ禍で実際に授業を参観することが少なくなった中で、実施していただき、ありがとうございました。実際の空気間の大切さを感じました。」といった意見があり、コロナ禍であるが、会場参加型にした意義があった。

このように肯定的な感想を多数いただいた要因は、コロナ禍で3年間の取組となったが、指導者、顧問、授業者、研究推進責任者、推進委員のメンバーがほとんど変わらず、一貫した研究が展開されたからである。本来ならば2年間の取組であるが、2年間であったとしても、構成メンバーが変わらない人選が必要である。

課題としては2つ挙げられる。1つ目は、「単元・題材構想シート」の活用である。当初、単元・題材構想シートを利用し、指導案を作成していた。しかし、単元の全体像が見えず、従来の形式の指導案を利用した。それにより、詳細な指導内容を推進委員同士で理解でき、研究内容が深まった。今後、単元構想シートを活用し、単元で育む資質能力を明確にすると共に、授業者の指導案作成の負担軽減と会員一人一人のわかりやすい指導案の検討が必要である。

2 つ目は研究発表会の開催に向けて、参加人数を制限したため、これらの研究の成果をどう伝えていくかが課題である。まずは、見附市保健体育科教員が自校でできる取組を実践していく。実際、研究発表会後の推進委員会では、会場校以外の学校で、研究発表会と同様の I C T 機器を活用した実践の報告があった。このように、見附市から中越地区、県へと発信をしていく。

資 料

1 部会名 保健体育

2 郡市名 見附市 3 会場校 見附市立西中学校

4 研究会開催期日 令和3年11月10日(水)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	長岡市立神田小学校・校長	田邊 輝明
	長岡市立刈谷田中学校・校長	北山 智博
(2) 研究推進責任者	見附市立見附中学校・教諭	相場 雅典
(3) 会場校責任者	見附市立西中学校・教諭	植木 真紀
(4) 見附市中教研顧問	見附市立今町中学校・校長	大滝 雅門
(5) 研究推進委員(授業者)	見附市立西中学校・教諭	沼田 貴光
	見附市立南中学校・教諭	関口 久視
	見附市立今町中学校・教諭	大西 真哉
	見附市立西中学校・教諭	小池 淳一

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6/27(木) 見附西中	9	・ 県中教研の方針説明 ・ 1年目の成果と課題確認(研究主題、手立ての確認、研究会の持ち方等) ・ 単元構想・指導案の検討 ・ 「授業情報誌原稿」について
2	7/28(水) 見附西中	8	・ 単元構想・指導案の検討 ・ 授業情報誌原稿について検討 ・ 研究会の持ち方について
3	9/15(水) 今町中	9	・ メンバーによるプレ授業、検討会 (今町中学校 大西 真哉による陸上競技ハードル走の授業) ・ 研究会の持ち方について
4	9/29(水) 見附西中	9	・ 単元構想・指導案の検討 ・ 研究会の役割分担
5	10/20(水) 見附西中	9	・ 単元構想・指導案の検討 ・ 研究会の要項・プレゼン・資料等の検討 ・ 研究会の役割分担(詳細)
6	11/9(火) 見附西中	6	・ 研究発表会前日準備
7	11/10(水) 見附西中	9	・ 研究会当日
8	11/30(火) 見附西中	9	・ 指定研究の成果と課題の検討

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (27) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (14) 名	(4) 教育委員会・センター (0) 名
(2) 他郡市中学校会員 (13) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2年1・2 組 女子	器械運動(マット運動)	沼田 貴光			

9 分科会(全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	<p>観点① グループで作成した練習計画を基に活動に取り組み、より良い「跳び前転」ができたか。</p> <p>観点② 互いに技の練習に適したコツやポイントを教え合うことができたか。</p>	<p>長岡市立神田小学校 校長 田邊 輝明 様</p> <p>長岡市立刈谷田中学校 校長 北山 智博 様</p>	<p>見附市立南中学校 関口 久視 教諭</p>	<p>見附市立 見附中学校 相場雅典教諭</p>

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 阿 部 健
(学校名: 新潟市立木戸中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 保 健 体 育 部

2 郡市名 新 潟 市 3 会場校 新潟市立山の下中学校

4 研究主題

課題をもち、主体的に学び合う生徒の育成
～深い学びにいたる、わかる・できる授業を目指して～

5 主題設定の理由

保健体育科の目標である「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する」ことが重要である。その資質や能力とは、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わおうとするとともに、公正、協力、責任、参画などの運動への意欲や健康・安全への態度、運動を合理的に実践するための運動の技能や知識、それらを運動実践に活用するなどの思考力や判断力などを指している。

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成するためには、従来の一斉指導スタイルに見られる受動的な学習スタイルでは限界があり、能動的な学習スタイルへの転換が求められている。体力の向上、技能の伸長は重要であるが、教師主導の学びにしてはならない。

そのため、次のように単元等での学びを深めていくことを考えた。

- ① 運動のもつ楽しさや喜びに十分にふれさせ、
- ② 仲間と積極的にコミュニケーションをとりながら課題を発見し、
- ③ 筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合い実践し、
- ④ 実践を振り返り評価し、改善や試行錯誤をくりかえしながら課題を解決していく。

生徒が自らの課題を発見し、解決するなどの学習をバランスよく行うことで主体的な学び、深い学びが広がり、保健体育科の目標達成に結びつくと考える。

これらの学びの推進を通して学び合いの質を高め、「わかる」と「できる」が一体となり、深い学びにいたる手立てやその往還を具現化していくことが、眼前の生徒の生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力を育むことにつながると考え、本研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

教師側から提示された「学習課題」を解決するような一方向に流れる授業では、生徒自らの困り感や必要感に迫ったものに成り得なかった感がある。それゆえに課題の発見や課題解決に向けた話し合い活動も深まらず、主体的な学び合いには至らないことが多く見られた。

そこで研究推進委員会では、アクティブ・ラーニングの推進を図るため、県中教研保健体育部から提案された「学び合い10」の視点を重視し、生徒同士が学び合いを往還しながら高め合う場を設定する授業の創造を試みた。

より主体的な学習活動を促すために欠かせない必要感や困り感のある課題設定、その課題を生み出すための働きかけはどうあるべきか。個人の課題やチームの課題を解決するための手法としてのファシリテーションの有効な活用方法はどうあるべきか。これらの視点は「学び合う」授業を創造するた

めの抛り所となっていくと考える。モデル授業では、どのような場面でファシリテーションを手立てとして活用することが有効であるか、生徒の表情や会話のやりとり、記述等の様相にも着目しながら改善を試みてきた。

7 研究の成果と課題

研究2年目となる授業では、「球技 ネット型 (バトミントン)」で実践が行われた。意図的に得点を奪うことを目指し、単元構成の工夫と iPad による学び合いで深い学びにつなげる授業について、3つの手立ての有効性について検証が行われた。

(1) 成果

〈学習環境の工夫〉

- ・ ネットの高さを2mとやや高く設定することで、スマッシュに頼らずラリーの中でどのようにして意図的に攻防を表現するかが明確になった。
- ・ サービスについてのルールを簡易化することで、狙うべき場所、サーバーとしてのポジション取りについて生徒が考えて動く様子が見られた。

〈単元構成の工夫〉

- ・ 単元を通じて何を学び、何ができるのか、どう評価すればよいのかが生徒も教師も分かっており、資質・能力をどう育むかといった単元の構想がしっかりしているため、指導と評価の一体化が図られていた。

〈iPad の活用〉

- ・ iPad で容易にプレーを客観的に振り返り分析できる。ペアでの話し合いの場で、仲間の考えを聞き「インプット」することと、自分の考えを伝える「アウトプット」する様子が見られ、話し合いの活性化が図られていた。
- ・ iPad を用いた振り返りを繰り返すことで、相手の特徴をつかみながらシナリオのずれを修正しプレーすることで、思考の深まりがあった。

(2) 課題

- ・ タブレットの利用について、運動量の確保も考慮し時間配分を考える必要がある。
- ・ 相手の特徴をつかむ際、視点となる「相手の位置」「攻撃パターン」などを具体的に考え、その思考の過程を明確にし把握できるようにすることも必要である。
- ・ シナリオの修正を図る場合は、iPad の利用だけでなくホワイトボードなどを活用しマグネットなどを使って示したりする方が早い場合もある。タブレットのみで授業を展開するのではなく必要な場面で、より有効な教具の活用を考える必要がある。

8 運営の成果と課題

新型コロナウイルス感染予防対策により、例年通りの参集型の研修を行うことができなかった。

しかし、ZOOMでの研修を活用したり、実践集を冊子として配布したりすることで、こんな状況の中でも情報の共有を図ることができた。この2か年の研修を振り返り、さらに研究推進委員で研究の方向性を修正しながら、指導案の検討や分科会による授業実践を推進していく必要がある。

来年度から始まる1年目の研究を迎えるにあたり、2か年の研究推進の成果と課題を今後の糧とし、来年度も分科会における授業公開および協議会を積み重ねつつ、研究主題である「課題をもち、主体的に学び合う生徒の育成」を図っていきたい。

資 料

1 部会名 保健体育部

2 郡市名 新潟市(新潟地区) 3 会場校 新潟市立山の下中学校

4 研究会開催期日 令和 3年 6月29日(火)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	音 田 和 行
(2) 研究推進責任者	新潟市立木戸中学校 ・教 諭	阿 部 健
(3) 会場校責任者	新潟市立山の下中学校 ・教 諭	小 野 塚 徹
(4) 研究推進委員(授業者)	新潟市立木戸中学校 ・教 諭	笠 原 和 子
	新潟市立新津第二中学校・教 諭	金 谷 諭
	新潟市立金津中学校 ・教 諭	渡 邊 讓
	新潟市立藤見中学校 ・教 諭	小 田 一
	新潟市立松浜中学校 ・教 諭	田 中 実 子
	新潟市立中之口中学校 ・教 諭	星 野 修 也
	新潟市立東新潟中学校 ・教 諭	小 柳 翔 太
	新潟市立黒埼中学校 ・教 諭	近 川 雅 人
	新潟市立亀田中学校 ・教 諭	捧 博 陽
	新潟市立新津第五中学校・教 諭	横 土 謙

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	5月24日/ 山の下中	16	・2年次の授業構想について 指導案の問題点、手立ての有効性と視点について 提案授業が深い学びにつながる視点を焦点化することができた。
2	6月29日/ 山の下中	16	・授業公開 実施者：山の下中学校 小野塚 徹教諭 「球技 ネット型(バドミントン)」 ・FTによる研究協議会の実施 課題をもたせる手立て、学び合いによる思考の深まりの検証により、自校化の促進となった。

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (24) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (15) 名	(4) 教育委員会・センター (3) 名
(2) 他郡市中学校会員 (4) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (2) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
2年5組	球技ネット型(バドミントン)	小野塚 徹

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	<p>「学び合う生徒の育成」 「わかる・できる授業」 への手立てが有効であ ったか。</p> <p>協議の視点① 課題をもたせるため の「手立て」は有効で あったか。</p> <p>協議の視点② 学び合いが生徒の思 考を拡張、深めるため に有効であったか。</p>	新潟市立総合教育センター 指導主事 音田 和行 様	新潟市立金津中学校 渡辺 讓 教諭	新潟市立 山の下中学校 小野塚 徹 教諭

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 神田 純平
(学校名: 関川村立関川中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 保健体育部
- 2 郡市名 村上市岩船郡 3 会場校 村上市立荒川中学校
- 4 研究主題

学び合いを通して課題を導き出し、解決しようとする生徒の育成

5 主題設定の理由

村上市岩船郡中学校教育研究会テーマは「生徒の主体性を育む、学び合う授業の創造」である。当郡市の生徒の実態からは、課題解決のために、生徒の意欲喚起・高揚が重要な視点であり、同時に「よりよい生き方、人間性を高める指導」が重要であると捉えている。

そこで、当郡市保健体育部では、主体性と学び合いの2つをキーワードに生徒の学ぶ意欲を高めることをねらい、研究主題を「学び合いを通して課題を導き出し、解決しようとする生徒の育成」と設定した。

目指す姿の実現に迫るために、生徒一人一人が課題をもてるような「ねらい」を設定し、ファシリテーション等で生徒同士の考えを深めさせ、それを実践していく（実践→交流・検討→実践）。

このような取組によって、他者と協力しながら思考することによって、「できる」という技能的側面だけでなく、「わかる」という思考的側面も生徒が発見し、主体的に学びに向かう力を獲得できると考えた。

6 研究の方法と内容

「保健体育学び合い10」を重視しながら、生徒自らが課題を発見し、解決できる力を身に付けさせるため、以下の3つに焦点を当てて村上市岩船郡各中学校で授業を行ってきた。

- ① 単元を通しての目標と各時間のねらいを明確にする。

単元の目標や各時間のねらいを明確にすることで生徒と教師の双方が、向かうべき地点（ゴール）を意識しながら学習を進めることができる。

- ② ファシリテーションを用いる場面を工夫し、話し合う環境を整備する。

授業の「始め」、「中」、「終わり」または、「1時間を通して」など、ねらいに応じてどの場面でファシリテーションを取り入れるとより効果的であるかを考え、授業を行ってきた。また、「タブレット」、「まなぼード」、「付箋」、「口で伝え合う」など様々な方法で一人一人の考えを引き出すことを重視した。

- ③ 思考の変化が分かる学習ノートを作成する。

生徒の考える「技のコツ」、「課題解決を図る上での困り感や解決方法」、「仲間からのアドバイス」など、その時間で考えたり、伝えたりしたことを振り返り、次時の課題設定につなげることができる学習ノートを作成し、授業を行った。

7 研究の成果と課題

<成果>

- マット運動の活動中は、「練習→撮影→ペアで動画を見る→改善点を探る→練習」を繰り返し、学び合うことで、生徒自ら課題に気づき、解決する方法を動画やペアの助言から探る姿が見られた。
- 今回はペアでの活動であった。ペアでの活動は活動の量も確保されることと、他のペアが撮影しているときも撮影した動画を見ながらペアで課題解決に向けた話し合いができており、思考の深まりも見られた。
- 単元を通して使用する学習ノートを1冊に綴じて生徒に配布し、見直しをもって授業を進めることができた。
- 1冊の学習ノートを使用することで、毎時間のねらいをしっかりと確認することができた。また、1時間毎の「自分の思考」や「思考の変化」、ペアの「アドバイス」が記入されているため、自分の課題がより鮮明に、そして課題解決に向けた話し合いを進めることができていた。
- 生徒たちがタブレットを操作し、お互いの技を撮影しながら生き生きと関わり、楽しそうに授業に取り組んでいた。

<課題>

- 今回は活動中のファシリテーションであり、一定の成果はあった。しかし、活動が停滞しているペアもあったことから、取組状況を見て活動を止め、一度全体で集まってクラス全体の進捗状況や各ペアの課題と解決方法を確認したり、発表させたりする等、工夫すると良かった。
- 「技の完成度」という言葉を教師側が明確（こういう動きになってきたら完成度がたかまっている、等）に生徒に伝える必要があった。
- 「技の完成度」と同様に「技のつなぎ目」の定義をもっと明確に示すことや意識させる手立てがあると良かった。

8 運営の成果と課題

<成果>

- ファシリテーションについて研修することで、教員自身もファシリテーションの手法に関する知識が確実に増え、実践に取り組むことができた
- 指導者を招いての研究推進委員会を実施することができた。指導者からの助言は、研究推進委員会にとって確かな方向性を示していただき、大変貴重で勉強になった。
- 月に一度、指導案検討会を行い、研究推進委員会メンバーが取組の情報（知識や経験等）を共有することで、全員が単元・授業の全体像をイメージしながら検討会を進めることができた。
- 授業者が各月の研究推進委員会において、指導案や学習ノートを資料として準備してくれたので、より具体的な話し合いをすることができた。
- 会場校責任者と連絡を取り合い、要項作成や当日の会場準備等、環境づくりを滞りなく進めることができた。
- 研究会の実施にあたり、感染症との関係で実施方法（対面かリモートか）について、県中教研事務局、郡市中教研事務局と連携し、安全に開催できた。

<課題>

- 新型コロナウイルスのために、1年間研究発表会が延期されたため、授業者や研究推進委員会メンバーが変わり、引き継ぎが十分でない部分もあった。
- 感染症拡大防止の観点からも、今後は授業が配信できるように、システムの構築をしていく必要がある。

<村岩保体部のこれからのについて>

指定研究後も変わらずに、村岩中教研の授業公開を提案性のあるものとしていきたい。また、授業公開だけでなく、実技や指導方法について学べる研修会の導入も考えていく。

資 料

1 部会名 保健体育部

2 郡市名 村上市岩船郡 3 会場校 村上市立荒川中学校

4 研究会開催期日 令和 3年 11月 2日 (火)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟医療福祉大学 教授	脇野 哲郎
(2) 研究推進責任者	関川村立関川中学校 教諭	神田 純平
(3) 会場校責任者	村上市立荒川中学校 教諭	淡路 信幸
(4) 県・郡市指導主事	村上市立荒川中学校 校長	渡辺 安治
(4) 研究推進委員 (授業者)	村上市立村上第一中学校 教諭	島田 起行
	村上市立村上東中学校 教諭	國井 郷史
	村上市立岩船中学校 教諭	時田めぐみ
	村上市立神林中学校 教諭	富樫 勉
	村上市立朝日中学校 教諭	渡邊 孝志
	村上市立山北中学校 教諭	渡辺 一彦
	県立村上中等教育学校 教諭	藤井かおり

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6/21 (月) 荒川中	10	昨年度までの研究内容の確認とこれからの動きについて
2	7/28 (水) 荒川中	8	指導者を招いて、発表会に向けての指導案検討
3	8/18 (水) 荒川中	10	
4	9/21 (火) 荒川中	11	
5	10/13 (水) 荒川中	9	
6	11/2 (火) 荒川中	11	県中教研指定 下越地区保健体育研究発表会
7	12/3 (金) 荒川中	10	研究のまとめ (ファシリテーションを用いて研究の成果と課題を考える)

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (23) 名	(3) 小学校・高等学校教員 () 名
(1) 郡市内中学校会員 (15) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (7) 名	(5) その他 (地域・保護者の方) () 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年1組	器械運動 (マット運動)	淡路 信幸

9 分科会 (全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	①課題を持たせるための手立ては効果的であったか。 ②学び合いが生徒の思考を広げ、深めるために効果的であったか。	新潟医療福祉大学 教授 脇野 哲郎 様	関川村立関川中学校 神田 純平 教諭	荒川中教諭 淡路 信幸

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 樺澤 恒平
(学校名: 上越市立大島中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 進路指導部会

2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立大島中学校

4 研究主題

自分のよさを発揮し、「豊かに生きる力」を育む進路指導
～キャリア・パスポートの活用を通して～

5 主題設定の理由

当校の生徒は、保育園から少人数の固定された人間関係の中で、生活のほとんどを大島区の中で過ごしており、視野を広げたり、多様な生活経験を積んだりする機会が少ないという現状がある。このため、社会性や良好な人間関係形成能力を育成することや、自己有用感を高めることを重点項目として教育活動を行っている。

令和元年度まで、過疎化が進む地域を明るくする企画を提案する「地域活性化プロジェクト」を通して、豊かに生きる力の育成を図っていた。ところが、COVID-19により、地域行事が相次いで中止となり、その活動を行えなくなった。

そこで学校生活をより楽しく、明るくしようと学校行事や生徒会イベントを企画・運営する「校内活性化プロジェクト」を立ち上げた。今まで行ってきたことを単に継続するのではなく、感染症対策を考え、実施内容、方法を協議し、新しいものをつくりあげる活動を通して、豊かに生きる力を育成しようと昨年度から取り組んできた。

こうした活動を通して、これまでも行事や体験学習ごとに振り返りをしてきた。これまでの生徒の振り返りの記述をみると、「よかった」「楽しかった」「〇〇を頑張れた」など肯定的な表現が多くあった。しかし、学校評価アンケートでは、「自己有用感や社会性」に関する質問項目では、肯定的に答えた人は少ないという結果だった。それは、目標設定の際に、自分の伸ばしたい力、生かしたい力などを明確にして、どのような場面でどんなことができるのか、できるようになりたいのか、を生徒一人ひとりが考え、選択できるような手立てが足りなかったのではないかと反省し、研究主題を設定し次のように手立てを設定した。

6 研究の方法と内容

ステップ1、目標設定。全体で達成したい目標に対する個人の目標を設定する。これまでは、目標設定にあまり力をいれて指導することはなかった。全体の目標は、生徒会行事であれば生徒会がスローガンといった形で提示することになる。体育祭では「全員主役～一人ひとりが役割をもち、全員が最高の笑顔になる体育祭～」というスローガンを生徒会が掲げた。生徒はその全体目標に対して、個人の目標を設定する。その際に、今の自分にある「力」に焦点をあて、その力をどのように生かすか、力が足りていなくこれから伸ばしたいことは何か、またそれを行事でどのようにしたら高めることができるかを、考えながら生徒が目標を設定する。例えば、「指示や話があった際に、リアクションや返事をするのができない」という生徒は、「指示や話があったら、返事ができなくてもうなずく」などという個人目標を設定した。キャリア・パスポートの振り返りで見つけた身に付いた力に関しては、もっと伸ばせる

ようにどういう風に行動したいのか記述するよう指導した。振り返りシートは学年や生徒の実態によって、教師がどのような項目を設定するのかは担任が判断して作成した。

ステップ2では行事後に、振り返り活動を行う。活動を通して身に付けたかった力、目標に対して、何をして身に付いたのか、何をしたら身に付けることができたのか生徒が記述する。また、目標設定時にはなかった、活動を通して見つけた新たな力があれば記述するよう指示した。ステップ1のシートと同様に、学年や生徒の実態に応じてシートの内容や項目は各担任が設定した。生徒が記述したシートは掲示するなどして学級で共有したのち、キャリア・パスポートに綴った。

基本的にはステップ1、2をいくつかの行事で行い、行事や体験活動で作成したシートをキャリア・パスポートに綴っていく。

ステップ3では、綴ってきたキャリア・パスポートを用いて振り返る活動を行う。学期ごとに1回を予定。これまで綴ってきたシートをもとに、どのような場面でのどのような力が付いたのか、また付けられなかったのか、これからどんな風に自分の力を伸ばしていきたいか、振り返ったときに新しい自分を発見することができたのか、など、個人で振り返ったあとに学級全体で共有した。

そして、またステップ1に戻る。この繰り返しにより、ステップ1、2での目標設定と振り返りがより具体的になり、自分自身の力や能力に応じた記述になり、漠然とした感想ではなく、視点をもったものになると考えた。

7 研究の成果と課題

これまでの取り組みを通して目に見えるような成果があるとは言えないが、課題であった特に3年生の自己有用感や人と関わる力は少しずつ身に付いていると感じている。3年生自身も自分自身を振り返る活動や教員や友達とのやりとりを通して気付き始めていると、ワークシートの記述から推測できる。

ステップ1～3で行ってきたが、なかなかうまくいかないと感じた。同じシステムや授業内容だったとしても生徒の動機付けや生徒同士を対話させる手法などの我々の個人の力量や経験で生徒の行動も変わってくるのが分かった。我々教師の指導技術を磨いていくことが大事だと改めて感じた。

小学校から引き継いだキャリア・パスポートをどのように処理して活用するのか、中学校の教育活動にどう取り入れていくのかについては課題がある。また、生徒が卒業後、キャリア・パスポートが先々でどのように活用されていくのか、こういった形で引き継ぐと活用しやすいのかについては課題が残っている。

8 運営の成果と課題

成果 ・公開授業、研究発表をすべてオンラインで行うことができたため、生徒や職員など研究会以外での活動に影響が少なかった。

・公開授業を収録にしたため、生徒の欠席や感染状況に応じて日程の変更ができた。

課題 ・収録授業のため、生徒の実際の姿や会話、活動の様子を見ることができなかった。

資 料

- 1 部会名 進路指導部会
- 2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立大島中学校
- 4 研究会開催期日 令和 3年 9月 17日 (金)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越市教育委員会学校教育課・指導主事	曾根原 至
(2) 研究推進責任者	上越市立柿崎中学校・教諭	大重 志津香
(3) 会場校責任者	上越市立大島中学校・教諭	樺澤 恒平
(4) 県・郡市指導主事	新潟市立木戸中学校・校長	佐藤 文俊
(4) 研究推進委員 (授業者)	上越市立大島中学校・教諭	樺澤 恒平
	上越市立浦川原中学校・教諭	春日 洋
	上越市立安塚中学校・教諭	赤塚 啓子

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
6月～/google classroomにて	6	研究主題や class 原稿の検討など

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (14) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (10) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (3) 名	(5) その他 (地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
全校生徒	体育祭準備～振り返り	大島中職員

9 分科会 (全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	キャリア・パスポートの活用について～校種間で引き継がれたキャリア・パスポートをどのように自校の教育活動に取り入れていくか～	上越市教育委員会学校教育課 指導主事 曾根原 至 様	上越市立大島中学校 樺澤 恒平教諭	当校教諭 樺澤 恒平

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 本間 陽子
(学校名: 長岡市立大島中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 進路指導部会
- 2 郡市名 長岡市三島郡 3 会場校 長岡市立大島中学校

4 研究主題

主体的に学び、将来に備えようとする生徒の育成
～学ぶことと社会や生き方をつなぐキャリア教育を通して～

5 主題設定の理由

変化が著しい現代において、環境や社会を取り巻く問題を把握し、どのように生きるかを考え、対応していく力は、ますます求められることと考える。そのような状況の中で、多面的に物事を捉えたり、多様な物事を俯瞰して見たりして、自分で考える力を養うことが一層求められると考える。

中学生の時期は、自分を知り、自分を見つめ、自分と向き合う期間である。学校の活動では、個から集団・社会へと視点を広げたり、世界の動向に関心を向けたりしながら、より良い生き方を考え実践できるような将来に備える力を養いたい。

地球環境・世界が様々な諸問題を抱えている今、「持続可能な世界を実現するための17の目標」である「SDGs」が国連サミットで採択され、様々な取組が各地・各企業ですすめられている。「SDGs」の視点を学び、自分たちを取り巻く課題の解決を、自分たちができることで少しずつ変えていくことができるという体験を積み重ね、将来に主体的に備えようとする力を身に付けさせたい。

6 研究の方法と内容

(1) 方法

- ①社会(地域)との出会いやかかわりの場を工夫する。
- ②ガイダンス機能(集団:学びの意義・方法)とカウンセリング(個人:学びの支援)機能の充実。
- ③アクティブラーニングの手法(主体的・対話的で深い学び)で授業改善を図る。
- ④キャリアパスポート(学びの履歴)の活用を図る。
- ⑤教科・道徳・総合的な学習・特別活動との相互作用(横断的支援)を図る。
- ⑥小・中・高及び各学年での学びのつながりと深まり(系統的支援)を図る。

(2) 内容

1年から3年の3年間の経年実践である。1年次は、働くことの意義、働くことを通して感じる苦労や喜びを知るとともに、職業が直面している課題を聞き、これからの職業に求められることに迫った。また、身の回りの環境や世界の状況を知り、「SDGs」視点をもつことを目標とした。

2年次は、難民問題について考え、難民キャンプに服を届けるための取組を行った。学校生活においては、生徒会を引き継ぐ学年として、自分たちを取り巻く環境を向上させるために、「SDGs」の視点を取り入れた委員会活動を通してどのような取組ができるかを考え、話し合い、実践の準備を行った。

3年生時は自分たちが計画した「SDGs」の視点を取り入れた生徒会構想により実践を進めてきた。各委員会の活動を主軸として、環境や人権問題などの課題を捉えて、学校生活の向上を図る取組を考え、主体的に実践を積み重ねてきた。定期的に振り返りを行い、成果・課題を捉え、次にどのように取り組むのかを再検討し、計画、実践を行った。3年間の取組から得た自分自身の学びや気づきを伝え

合い、各々の成長を認め合う活動を仕組み、学びを振り返りながら、自身の将来にどのように生かしていくのか考えさせる取組を行ってきた。

7 研究の成果と課題

① 成果

・自校アンケート結果より

3年間取ってきた（育みたい基礎的・汎用的能力に関わる）自校アンケートでは、すべての項目で、評価が上がった。特に、当校は自己肯定感が低く、自分自身に関わる質問では、自己評価が低い傾向があるが、「自分のよさがわかる。」について、0.6ポイント上昇（4点満点中）が見られた。また、「様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考えている。」について、0.5ポイント上昇、「よりよい生き方を目指して自ら課題を見出していこうとする。」について0.6ポイント、「課題に積極的に取り組み、自ら解決しようとしている。」0.4ポイント上昇など、自らの課題を見出し、積極的に課題解決に関わり、自己の生き方について考えることについて、高い評価を付けた生徒が増えた。

・主体的で深い学びの実践

「SDGs」を視点として、個の立場や興味に応じて、「活動計画書」を作成して活動してきた。生徒は、自身の計画に基づいて実践し、振り返りを行った。また、定期的に活動報告を行う取組を通して、自分の行動や考えを他と比較して自己の活動を振り返ることができ、学びを深めてきた。生徒会活動という共通のツールをもつことで、話し合いでは、互いの発表や報告に「自分ゴト」の意識をもつことができ、意欲的に話し合いに臨む姿が見られた。

② 課題

- ・今後の将来設計に関わる現実的な活動を補強していく必要がある。例えば、先の自校アンケートの結果において、低かった項目は、「資格や学歴などの情報を自分で積極的に収集している。」や「進路計画を立てる意義や方法を理解して、自分の将来の計画を立てている。」など、当面の進路決定に関わる現実的な実務に関しての評価が、全体の平均値よりも低い傾向にあったので、今後の進路指導で力を注ぎ、生徒の進路実現に生かせるようにしていく必要がある。

8 運営の成果と課題

- ・感染拡大の状況を鑑み、オンライン開催に変更したが、推進委員・指導者の先生からの協力をいただいて、プレオンライン発表を行い、当日の準備を万全に整えることができた。
- ・当日は、ご参集の会員、推進委員のご協力により、予定の内容を執り行うことができた。

※1 各地区中教研事務局と当該教科・領域の15部会全県部長へ提出する（メール：〆切1/11）

※2 資料の県・郡市指導主事は、指導者が県・郡市指導主事の場合は、その行を詰める。

※3 研究活動の概要に掲載される。提出の際は、注意書きや※1～※3を削除して提出する。

資 料

- 1 部会名 進路指導部会
- 2 郡市名 長岡市 3 会場校 長岡市立大島中学校
- 4 研究会開催期日 令和3年10月29日(金)
- 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学・特任教授	佐藤 賢治
(2) 研究推進責任者	関原中学校・教諭	高橋亜希子
(3) 会場校責任者	大島中学校・教諭	本間陽子
(4) 県・郡市指導主事	長岡市教育委員会・指導主事	佐々木潤
(4) 研究推進委員(授業者)	大島中学校・教諭	大倉 豪
	大島中学校・教諭	石川 明
	川口中学校・教諭	小柳輝和
	堤岡中学校・教諭	吉野めぐみ

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6/18(金) 大島中学校	7	前前年度からの申し送り確認、研究の見直し確認
2	8/17(火) 大島中学校	8	研究過程確認、指導案検討①
3	9/29(水) 大島中学校	8	研究過程確認、指導案検討②
4	10/29(金) 大島中学校	9	研究実践発表会
5	10/30(火) 大島中学校		振り返り(運営面、研究面)

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (21) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (1) 名
(1) 郡市内中学校会員 (12) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (9) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年4組	自己をみつめる「キャリアパスポート」の作成を通して	教諭 大倉 豪

9 分科会(全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	学ぶことと社会や生き方をつなぐ手段として、SDGsの視点は有効であったか	上越教育大学 特任教授 佐藤 賢治様	長岡市立大島中学校 岩澤 正顕教諭	当校教諭 本間 陽子教諭

令和3年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書 (2年次)
新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 林 洋一
(学校名: 新潟市立鳥屋野中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 進路指導
2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立東石山中学校
4 研究主題

将来への夢や希望をもち生き方を考えるキャリア教育の推進
～キャリア・ノートを活用した基礎的・汎用的能力を高める工夫～

5 主題設定の理由

新潟市教育委員会では、中央教育審議会の答申を受け、校種をつなぐ「キャリア・パスポート」を作成している。各校においても校内の学びを蓄積していく教材「キャリア・ノート」の準備について通知があった。それらを踏まえて、キャリア・ノートの実践・活用をめざして、「キャリア・ノートを活用した基礎的・汎用的能力を高める工夫」に取り組むこととした。

6 研究の方法と内容

「キャリア・ノート」に蓄積した体験的な活動の振り返りをもとに、1年間でどのような力をどの場面で獲得することができたのか、具体的にまとめる。2・3年生による「異学年グループ」を編成し、オープクエスチョンで「成長した自分」について語り合う活動を行った。語り合う中で、自身の新たな成長への気づきを促した。3年生は継続して3年間取り組みを行うことで、自分の役割の変化や成長の過程を認識していくことができる。

7 研究の成果と課題

実践前と実践後に行ったアンケートの結果を比較すると、実践を行った2、3年生では、実践を行わなかった1年生よりも「東石山中学校で身につけさせたい力」に対する肯定的な回答の割合が項目数、上昇率が高かった。異学年の生徒同士が体育祭や合唱コンクールなど、共通の経験を土台として自らの成長を語り合い、価値付けを行うことで生徒が自身の成長を実感し、前向きに将来と向き合うことができた。ただ、話し合いの取り組みを評価する活動では、語り合った内容に着目して評価する生徒が少なかったことが課題として挙げられる。今後の改善に努めていく。

8 運営の成果と課題

参加した部員は当日、各学級に分かれて授業を参観した。その後の分科会では、参観した学級の授業者と一緒になって、ワークシートから生徒の変容をみとったり、キャリア・ノートの活用方法、異学年交流の意義について話し合い、キャリア教育への理解を深めた。また、9月に新潟市の全中学生を対象としたキャリア教育アンケートの結果を共有し、新潟市全体と自校を比較することでキャリア教育の現状と課題の把握に努めることができた。

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 長谷川 典子
(学校名: 新発田市立豊浦中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 進路指導部

2 郡市名 新発田市

3 会場校 新発田市立七葉中学校

4 研究主題

体験的な活動を通して、自分自身や地域のよさや特色を理解し、将来の生き方を見つめる生徒の育成

5 主題設定の理由

進路指導では、キャリア発達を促す「キャリア教育」の視点が重要である。キャリア教育は、学校の全教育活動の中で体系的に実践する必要がある。また、生徒に学校で学ぶことと社会との接続を意識させ、郷土愛や一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度（基礎的・汎用的な能力）を育てることを通して、将来の生き方を見つめさせることが重要である。

生徒に自分の将来を考えさせるためには、身近な「地域」を題材にして、仲間や、幅広い年齢・立場の人々と関わり合う体験的な活動から、生徒自らが感じた問いや疑問をもとに課題を設定し、課題解決に取り組む学習を設定することが有効だと考える。

また、自らの学びを振り返り、仲間と語り合い、認め合う活動を通して、自己の変容や成長を確認することが、新たな学習への意欲や、よりよい生き方を追究しようとする態度の醸成につながると考える。

そこで、本研究では、表記の研究主題を設定し、一人一人のキャリア形成と自己実現を目指して実践を進めていくこととした。

6 研究の方法と内容

目指す姿の実現のために、次の3つの有効な手立てを講じる。

(1) 育成すべき能力・態度を育むためのカリキュラムマネジメント

育てたい能力・態度（基礎的・汎用的能力）を明確にした上で、教育課程を編成し、生徒の学びの質が高まるように、習得・活用・探究の学習サイクルの確立を図る。

※育成すべき能力や態度（基礎的・汎用的能力）

- ・人間関係形成・社会関係形成能力（かかわる力）
- ・自己理解・自己管理能力（みつめる力）
- ・課題対応能力（やり抜く力）
- ・キャリアプランニング能力（夢おこす力）

(2) 探求的な体験学習の工夫

身近な「地域」を題材に、仲間や多様な人々と関わり合う体験的な活動を位置付けるとともに、生徒が主体的に問いをもち、課題を設定し、見通しをもって課題解決に取り組む学習活動を設定

する。

(3) 学習ポートフォリオの活用

学習ポートフォリオを活用し、蓄積した各活動後の自己評価、他己評価による振り返りと学び合いを通して、自らの考えや意見の変容に気付いたり自己の成長を実感したりする場面を設定し、一人一人のキャリア形成と自己実現をめざす。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 1年間の研究ではなく、1年、2年、3年時のいろいろな働きかけや取り組みが本時の授業につながっていて、生徒の成長が見られた。NPO 法人みらいず works から1年次のプレ授業で指導して頂いたことが、研究授業での生徒の活発な話し合いや仲間の話を聞く態度に生かされていた。
- ・ 身近な「地域」を題材に、仲間や多様な人々と関わり合う探究的な体験活動を工夫したことにより、生徒が主体的に問いをもち、学習活動に取り組むことができた。
- ・ 生徒は、学習ポートフォリオを見直して、自分の未来を考えていた。学習ポートフォリオを活用し、蓄積した各活動後の自己評価、他己評価による振り返りと学び合いを通して、将来の生き方についての視野を広げたり、新しい発見をしたりしながら、より具体的に未来の姿を考えることができた。
- ・ 当初、数値的に低かった「キャリアプランニング能力」の数値に向上が見られた。探究的な体験学習や学習ポートフォリオの活用を通して、見通しをもって生活できるようになった表れだと考えられる。

(2) 課題

- ・ 学校行事や学年行事の実施計画などにおいて、学習の「ねらい」が、育みたいどの基礎的汎用的能力と対応するのかを、明確にしていく必要がある。
- ・ 1年次（平成元年度）の計画では、市内の各校が同じキャリアアンケートを実施して、その結果を研究の自校化につなげる計画であったが、昨年度、研究が凍結したことや担当が大幅に入れ替わったことが影響して、各校の足並みを揃えることができなかった。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・ 参会と Zoom によるハイブリット開催の形をとることになったが、大きなトラブルもなく、予定通り運営することができた。また、Zoom の参会者も協議会に参加し意見を出し合うことができてよかった。
- ・ 3年間の学習活動の成果が会場の壁面に掲示されていたため、参会者が、生徒たちがどのような学びをしてきたか、何を考えてきたか等の学習活動の足跡を確認することができた。

(2) 課題

- ・ コロナウイルス感染症禍で各学校の体験活動が制限され、市の進路指導部員が集まって話し合うことがなかなかできなかった。また、研究推進委員が大幅に入れ替わり、引継が上手くできない面もあった。一方、会場校は3年間、計画的に研究を進め、研究が凍結されていた令和2年度も研究発表会を行う等、研究を継続することができた。
- ・ 市内進路指導部員は、進路指導主事で構成されていたため、キャリア教育担当者と一致していない学校があり、進路指導部でキャリア教育についての研究を行う場合の難しさを感じた。

資 料

- 1 部会名 進路指導
- 2 郡市名 新発田市 3 会場校 新発田市立七葉中学校
- 4 研究会開催期日 令和 3年 11月 5日 (金)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟大学・教授	松井 賢二
(2) 研究推進責任者	新発田市立豊浦中学校・教諭	長谷川 典子
(3) 会場校責任者	新発田市立七葉中学校・教頭	今野 由紀子
(4) 研究推進委員 (授業者)	新発田市立七葉中学校・教諭	丸田 幸恵
	新発田市立七葉中学校・教諭	堀田 和恵
	新発田市立第一中学校・教諭	伊藤 由美子
	新発田市立本丸中学校・教諭	山崎 功一
	新発田市立猿橋中学校・教諭	五十嵐 仁
	新発田市立東中学校・教諭	田中 順昭
	新発田市立川東中学校・教諭	齋藤 玲子
	新発田市立佐々木中学校・教諭	家合 賀信
	新発田市立紫雲寺中学校・教諭	内藤 満
	新発田市立加治川中学校・教諭	鬼島 一成

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	6/21 豊浦中学校	9	1年次の成果と課題確認 (研究主題・手立ての確認・研究会の持ち方について)
2	9/9 七葉中学校	9	単元構想・指導案の検討
3	10/15 七葉中学校	5	Zoom リハーサル・研究会当日の持ち方
4	10/20 七葉中学校	8	研究会当日の持ち方
5	11/2 七葉中学校	5	事前準備・プレゼンリハーサル・Zoom リハーサル
6	11/5 七葉中学校	10	研究会

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (39) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (29) 名	(4) 教育委員会・センター (0) 名
(2) 他郡市中学校会員 (8) 名	(5) その他 (地域・保護者の方) (2) 名

8 公開授業

学年	単元・主題	授業者
3 学年	学級活動 (進路指導) 「未来プラン」をつくろう	丸田幸恵 皆川加代子 清田麻衣

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
概要説明・研究協議会	「研究主題実現のために、本時の手立ては有効であったか」	新潟市立木戸中学校 校長 佐藤 文俊様	新発田市立猿橋中学校 教諭 五十嵐 仁	新発田市立豊浦中学校 教諭 長谷川 典子 新発田市立七葉中学校 教諭 堀田 和恵

令和3年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 大島 彩弥香
(学校名: 柏崎市立鏡が沖中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 国語
2 郡市名 柏崎市刈羽郡 3 会場校 柏崎市立第二中学校

4 研究主題

根拠と意見とのつながりを適切に判断し、
自分の考えを表現する活動を通して新たな価値に気付く姿

5 主題設定の理由

第1回目の研究推進委員会にて、教科・領域で目指す深い学びの姿はどのような姿か協議した。論理的な思考、自分の解釈、意見の表出、思考の広がり、意見の更新などといったキーワードが出された中で、「論理的な思考」を「根拠と意見のつながりを適切に判断する力」と捉え、「思考の広がり」や「意見の更新」を「新たな価値に気付く姿」と定義した。自他の考えを表現する活動を通して、判断や考えを客観的に確認したり、問い直したりすることができ、生徒が授業を通して変容すること「新たな価値に気付く」ことができると考えた。

6 研究の方法と内容

目指す深い学びの姿を達成するための手立てとして、次の3項目を設定した。

- ① 批評的な視点…言葉の意味を問い直したり、比較したりする読みの姿
→論理的な思考をするための重要な見方・考え方
- ② 課題の自由度やレベル…自主的・自発的な学習を促し、学習調整力を育てるためのしかけ
→生徒が自ら学習目標を設定し、それに対して主体的に学習するための工夫
- ③ 学びの視覚化…学びや気付きを積み重ねていくことによる考えの構築
→単元や毎時の振り返りを積み重ねていくことで学びの履歴を生徒が確認し、身に付いた力や考えを更新していくための手だて

7 1年次の成果と課題

二つの文章を読み比べたり、事象の便利不便を比べたりという「比較」という視点、筆者の書き方の特徴を探したり、事象を多角的に観察したりした結果どう思うかという「批評」という視点を柱に授業づくりをすることができた。この視点は来年度も継続したい。また、生徒が自ら学習課題を設定することで主体的に学ぶ姿勢を引き出すことができることがわかった。一方、根拠と意見を文章の中でとらえることはできても、作文やスピーチとなると判断が難しくなる。根拠と意見の本質を生徒に気付かせるための工夫が必要である。これがクリアにできれば、生徒の考えの独自性や個性がより際立ち、他者と学び合い、新たな価値に気付くという深い学びが達成できると考える。

8 運営の成果と課題

推進委員会内での研究は深まったが、委員以外の市内中学校の先生方からも授業参観をしてもらい、協議を深めたかった。来年度は今年度よりも積極的に呼びかけを行い、研究への参加を広く募りたい。

新潟県中学校教育研究会会長 様

15部会全県部長 西條 正人

報告者氏名 小嶋 祐子
(学校名: 長岡市立西中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 国語

2 郡市名 長岡市・三島郡

3 会場校 長岡市立川口中学校

4 研究主題

言葉に着目し、対話を深めながら読みを創り上げる生徒

5 主題設定の理由

県中教研の重点目標『見方・考え方』に着目し、『深い学びにいたる学び合う授業』によって生徒に確かな資質・能力を育む研究活動を進める」、長岡市国語教育研究会の研究主題「言葉の力を追究し、自分の読みを創る授業」を受け、『言葉による見方・考え方』を働かせる姿、「深い学びにいたる学び合う授業」の具現を目指し、研究主題を「言葉に着目し、対話を深めながら読みを創り上げる生徒」と設定した。

ともすると、イメージや一つの言葉から「読めた」つもりになり、そこで追究が止まってしまう傾向がある目の前の生徒たちである。そんな生徒たちが、文脈の中での言葉がもつ多様な意味、言葉と言葉との結びつきから生まれる広がりや深まりを感じ取り、言葉を根拠にした読みの問い直しや深まりが生まれる対話を通して自分の読みを創り上げていく姿を目指したい。

6 研究の方法と内容

研究1年次は、「言葉による見方・考え方」を具体化しながら、次の4点の在り方を探った。

- ・深い教材研究
- ・良質な学習課題
- ・深まる対話に向けての支援
- ・学習のまとめと振り返り

推進委員会で、指導者による、あるいは推進委員による模擬授業を取り入れて教材研究を深めるとともに、『言葉による見方・考え方』を働かせる」ということや「深い学び」ということを委員自身が実感しながら進めてきた。

その中で、見えてきたことをもとに、生徒と教師と一緒に読みを創り上げていく授業、読者論に立った授業を基本にしながら、プレ授業で講じた手立ては以下のとおりである。

- ① 【多様な読みが生まれる良質な課題の設定】 → 【言葉に着目しながら対話を深め、読みを創り上げる活動の組織】 → 【書くことによって読みの深まりを実感できる場の設定】を意識して単元を構成する。
- ② 良質な学習課題の要件を「多様な読みが生まれ、ずれが顕在化することで追究の意欲が高まる課題」とする。

- ③ イメージや一つの言葉に左右される浅い読みにとどまらず、複数の言葉（叙述）に着目し、それらをつなげながら対話を深め、読みを創り上げていける活動の具現のために、三角ロジックを活用する。〈私はこう考える！〉―〈私が着目する言葉（叙述）はこれらだ！〉―〈これらの言葉（叙述）をつなげて考えると…〉という形で示し、根拠となる着目する言葉（叙述）は複数挙げるという条件を付ける。
- ④ 小グループによる三角ロジックを使つての意見交流の場を設定する。その際、着目する言葉（叙述）を考えによって色分けして示し、可視化して共有できる本文シートを使用する。意見交流は「同じ考えとの交流→異なる考えとの交流」の二段階で学び合えるようにグループを編成する。
- ⑤ 単元を貫く課題、読みを深めるための追究課題ともに、対話の前後に二回記述する場を設け、生徒自身が自分の読みの変容や深まりを自覚できるようにする。マグネット等を使って考えの変化を可視化する。
- ⑥ 学習全体の振り返りを記述することで、言葉（叙述）に着目し、それらをつなぐことで、読みが深まることや、根拠を示しながらの他者との対話によって読みが深まることなどを実感できるようにする。

7 1年次の成果と課題

(1) 成果

- ・模擬授業や研究主題の設定、指導案検討を通しての目指す姿（「深い学び」のイメージ化）の共有
- ・プレ授業による、「ずれ」の顕在化から追究課題を設定すること、三角ロジックの活用、読みの根拠の可視化、考えの変容の可視化についての手応え

(2) 課題

- ・生徒が目的意識をもって取り組む学習課題の設定の在り方
- ・単元のゴールとしての成果物の設定の在り方
- ・対話的活動における教師のファシリテーションの在り方
- ・「言葉による見方・考え方」の一層の具体化と、それを生徒が働かせるための手立ての在り方
- ・生徒の記述から読みの深まりがみとれる振り返りの観点の在り方・示し方

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・指導者や推進委員の模擬授業による教材研究の深まり
- ・推進委員の校内授業研にメンバーが参加しての学び合い
- ・豊富な実践例を基にした指導者の具体的な御指導による学びの深まり
- ・市内の回覧システムを活用しての、委員同士のスムーズな連絡体制

(2) 課題

- ・さらに研究を深めるための、推進委員が日頃の授業実践を持ち寄って検討する機会の設定

1 部会名 国語

2 郡市名 長岡市・三島郡 3 会場校 長岡市立川口中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	長岡市立与板中学校・校長	小池 進輔
(2) 研究推進責任者	長岡市立西中学校・教諭	小嶋 祐子
(3) 会場校責任者	長岡市立川口中学校・教諭	小山 絹子
(4) 県・郡市指導主事	中越教育事務所・指導主事	渡邊 三津
(5) 研究推進委員（授業者）	長岡市立川口中学校・教諭	長谷川 総子
	長岡市立南中学校・教諭	元井 啓介
	長岡市立東北中学校・教諭	中村 麻美
	長岡市立宮内中学校・教諭	荒井 仁
	長岡市立越路中学校・教諭	水嶋 信太郎

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	8月2日/川口中学校	7	・前年度からの引継ぎ ・国語科で目指す「深い学びの姿」と手立ての検討 指導者による模擬授業から、「言葉による見方・考え方を働かせる」「深い学び」を実感することができた。
2	8月18日/西中学校	6	・研究主題の検討 ・プレ授業構想の検討 ・委員による模擬授業 プレ授業をする予定の教材を使って、委員が模擬授業を行った。「ずれ」の顕在化から追究意欲を高めていく課題について、検討することができた。
3	9月22日/西中学校	6	・研究主題の決定 ・指導者による模擬授業 指導者の小池先生から「話すこと」の授業と「ずれ」を生かして学びを深める授業の模擬授業をしていただいた。質の高い知識、活性化された知識について学び、共有することができた。
4	10月19日/川口中学校	6	・プレ授業指導案検討 ・プレ授業当日の計画 指導案を検討し、単元構成の在り方や、手立ての在り方などについて検討した。
5	11月24日/川口中学校	7	・プレ授業、協議会 (授業者：長谷川総子教諭「『故郷』の主題を創り上げよう」3年) 10名の参加者があった。活発な協議や御指導を通して、成果と課題を確認し合った。
6	11月29日/南中学校	5	・研究推進委員による授業公開 (授業者：元井啓介教諭「私たちの訳が一番名訳 ポストエディットに挑戦！」3年)を参観。
7	12月20日/西中学校	7	・今年度の成果と課題
8			
9			
10			

様式③ 指定研究 経過の概要報告書

令和3年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書 (1年次)

新潟県中学校教育研究会会長 様

15部会全県部長 西條 正人

報告者氏名 小澤 ひろみ
(学校名: 新潟市立新津第五中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 国語

2 郡市名 新潟

3 会場校 新潟市立五十嵐中学校

4 研究主題

生き生きとした活動を通して、言語能力を伸ばす指導
～情報・状況を整理・活用し、協働的な学びを通して表現力を高める指導の工夫～

5 主題設定の理由

新潟市中教研では、上記の研究主題のもと、授業改善における課題を焦点化してその解決を図る取組を実践してきた。この取組を継続する中で見えてきたのは、生徒が「知りたい」「追究したい」という思いを抱き、そこから得た考えや思いを伝え合うことで、思考力や想像力が育まれていくということである。

会場校である五十嵐中学校の生徒は、素直で、前向きに授業に取り組んでいる。仲間の考えを受け入れ、自身の学習に生かそうとする姿もある。しかし、生徒が書く文章は具体性に欠け、「いろいろ」「すごい」というような抽象的で読み手に分かりにくい表現がよく見られる。書くポイントを提示しても、それを自分の表現に生かしきれず、内容が深まらないままの文章の生徒もいる。

そこで、鑑賞文を書く授業では、2種類の論説文の筆者の表現方法を学んだ上で自分の表現に生かし、班で意見交流し合うことで自分の考えや表現方法を深められるのではないかと考えた。

小説の主題を読み取る授業では、初発の感想をもとに登場人物の心情の変化を日記で表現し、班内発表や意見交流をすることで、主題につながる深い読み取りができると考えた。

また、今年度から導入されたiPadを有効に活用し、表現力を高める活動に役立てたい。

6 研究の方法と内容

(1) 2年生「絵画の魅力を効果的に伝えよう(鑑賞文を書く)」

≪学習課題≫相手に絵画の魅力を伝えるには、どのように表現すればよいただろうか。

①自分が選んだ絵画についての魅力を班員に伝える。

・班員の立場に立ち、iPadの絵画シートのメモを見せながら分かりやすく伝える。

②班員との意見交流で新たに発見した点や共感した点を伝え合う。

③観点を決め、理由を明確にして絵画の魅力を伝える。

・教科書にある「美術作品を鑑賞するときの観点」「感じたことを表す言葉」を参考にして、自分が選んだ絵画についての魅力を再考する。

・絵画の魅力が書き加えられた絵画シートを参考にして鑑賞文を書く。

(2) 2年生「走れメロス」

≪学習課題≫「走れメロス」には、誰のどのような思いが込められているのだろうか。

- ①登場人物になりきって書いた4日分の日記を、時間軸をもとに並べ、登場人物の心の動きを整理する。
- ②グループごとに割り振られた、一人の登場人物の日記からわかることを意見交流する。
 - ・根拠をもとに主体的に読み取り、自分の考えを明らかにする。(主題をとらえる)
- ③グループごとに、登場人物の日記の傾向を発表する。

7 1年次の成果と課題

(1) 成果

- ・授業公開をする五十嵐中学校の実態を踏まえて、研究主題を設定することができた。

「鑑賞文を書く」授業

- ・自身が担当する絵画の分析をする際に、教材文にある絵画の分析の仕方を参考にする生徒もいた。
- ・授業での意見交流で、他の生徒の絵画の分析から新たな発見をし、生徒自身の見方や考え方が広がり、普段作文を苦手とする生徒が進んで表現する姿が見られた。
- ・教材文での筆者の表現方法(根拠を明らかにした分析や比喻表現)を生徒自身の鑑賞文にも取り入れるなどの工夫が見られた。

「走れメロス」の授業

- ・登場人物の「日記」を書くことで、文章をより緻密に読むことができた。
- ・日記という書式のため、生徒の登場人物への感情移入が容易となり、人物像をより明確にすることができた。

(2) 課題

「鑑賞文を書く」授業

- ・生徒の考えを表現しやすくするためにも、「構想シート」をiPadで作成する。
- ・クラス全員に発表する際には、選んだ絵画をテレビに映し、全体で確認できるようにする。
- ・絵画の背景、作者についても正しく調べ、鑑賞文に取り入れるようにする。あまりにかけ離れた分析や独りよがりの解釈にならないように注意する。

「走れメロス」の授業

- ・登場人物の「日記」を書くことで、作品の主題に迫るための有効な手立てを再考する。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・新潟市教育委員会学校支援課より佐藤恵美指導主事を指導者として招き、研究の内容や方向について指導を受ける機会をもつことができた。単元のゴールをはっきりと定め、目指すべき生徒の姿を明確にすることが大切だということを再確認できた。
- ・授業検討会からプレ授業の協議会まで、研究推進委員と活発な意見交流をすることができた。

(2) 課題

- ・指導者をもう一人お願いすることができず、新潟市の一斉研の授業でのご指導と、五十嵐中学校の2つのプレ授業でのご指導をすべて佐藤恵美指導主事にお願いする形となってしまう、大きな負担をかけてしまった。

資 料

1 部会名 国 語

2 郡市名 新 潟

3 会場校 新潟市立五十嵐中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市教育委員会・指導主事	佐藤 恵美
(2) 研究推進責任者	新潟市立新津第五中学校	小澤 ひろみ
(3) 会場校責任者	新潟市立五十嵐中学校	栗川 利恵子
(4) 研究推進委員(授業者)	新潟市立五十嵐中学校	木村 悠子
(授業者)	新潟市立五十嵐中学校	松本 康治
	新潟市立五十嵐中学校	岸田 知己
	新潟市立黒埼中学校	西方 和美
	新潟市立新潟柳都中学校	斉数 陽子
	新潟市立南浜中学校	村山 忍
	新潟市立石山中学校	柳 弘美
	新潟市立小合中学校	山形 亨
	新潟市立中之口中学校	小野 範子
	新潟市立横越中学校	宮野 貴子
	新潟市立赤塚中学校	本間 靖克

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	8月26日／五十嵐中	13	プレ授業に向けた2つの授業の単元構想検討を行った。2種類の論説文の読み取りを通して表現力を高めるにはどうしたらよいか、小説「走れメロス」で表現力を高めるためにはどのような活動をするのが有効かを検討した。
2	11月5日／五十嵐中	12	プレ授業に向けた授業検討を行った。「君は『最後の晩餐』を知っているか」、「『最後の晩餐』の新しさ」2種類の論説文からは、筆者の書きぶりを学んだ上で鑑賞文を書くこと、「走れメロス」では、登場人物の心情を日記で表現することで主題に迫ることを授業の柱とすることとした。
3	11月25日／五十嵐中	11	プレ授業と協議会を行った。来年度に向けた修正点や課題となる点を明らかにすることができた。
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			

新潟県中学校教育研究会会長 様

国語部会全県部長 西條 正人

報告者氏名 小林 優一
(学校名: 胎内市立築地中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 国語

2 郡市名 阿賀・胎内・北蒲

3 会場校 阿賀野市立京ヶ瀬中学校

4 研究主題

自分の考えを深め表現できる生徒の育成
～言葉による見方・考え方を働かせる学び合いの工夫～

5 主題設定の理由

国語科の学習においては、対象(自分自身・相手・様々な事物)と言葉、言葉と言葉の関係について、比較・関連付け等の思考方法を活用しながら言葉の意味、働き、使い方等を捉えることが、自分の思いや考えを深めることにつながると考える。また、その関係性を自分の経験・仲間の考え・学習材とかかわりながら捉え直して意味付けさせるためには、教師側が「主体的な学びの視点」と「対話的な学びの視点」をもつ必要がある。そこで、本研究では、「自分の考えを深め表現できる生徒の育成」のために必要な「言葉による見方・考え方を働かせる学び合いの工夫」について研究・協議し、その有効性を明らかにする。

6 研究の方法と内容

本研究では、目指す「深い学びの姿」を以下のように定義する。

- ①比較・関連付け等の思考方法を活用しながら言葉の意味、働き、使い方を捉えている。
- ②対象(自分自身・相手・様々な事物)と言葉の関係性について、自分の経験・仲間の考え・学習材とかかわりながら捉え直し、意味付けている。
- ③相手や目的に応じた手段や表現で、自分の考えを発信している。

上記の深い学びの姿に迫るための教師側の視点を「主体的な学びの視点」「対話的な学びの視点」と位置付けた。また、各視点における「言葉による見方・考え方を働かせる学び合い」の具体的な手立てについて、「学び合い 10(国語)」に関連付け、以下のように整理した。

主体的な学びの視点:「対象(自分・相手・様々な事物)と言葉をつなぐ、魅力ある課題の設定……③」
「関係性の整理と一般化……⑥⑦⑧」
「自己変容への気づき……①⑨」
対話的な学びの視点:「思考の可視化(ワークシート、思考ツール、Jamboard 等)……④」
「1人1人の思考の想定……①⑨」
「話し合うねらい(思考の深化、相互評価、合意形成、きまりの発見、方法の決定、共同作業)の明確化……②⑤」

2 年次に向けて、これらを「深い学びへのステップ」に当てはめて、研究、協議を進めている。

○深い学びへのステップ

- ステップ 1 言葉を通じて自己と向き合える課題の設定
- ステップ 2 「言葉による見方・考え方」を働かせた意見交流の場の設定 《個人 → 交流》
- ステップ 3 自己変容に気付かせる場の設定

○ステップ設定の理由

授業の導入で学習意欲と見通しをもたせることが主体的な学びの実現につながる。そのために、一人一人に自分の考えをもたせることのできる「自己と向き合える課題」を提示する。また、「言葉による見方・考え方」を働かせた意見交流の場を設定し、比較・分析して得た情報をもとに自分の考えを見直すように働きかけることで、深い学びの姿②につなげる。終末には、初発の考えと変わった点や、他者の考えとの共通点や相違点を整理させることで、自己変容への気づきを促し、課題解決の達成感や深い学びの実感につなげる。

7 1年次の成果と課題

◎成果

(1) 主体的な学びの視点の工夫について

(「課題設定の工夫」「関係性の整理と一般化」「自己変容への気づき」)

- ・似て非なる『聖書』と比較させたことで、『論語』の深部に迫るきっかけを与えられた。
- ・比較する章句があることで、様々な視点から今までの自分の生き方を想起しやすくなった。
- ・意見文を書くことにより、自分の考えを確認できた。

(2) 対話的な学びの視点の工夫について

(「思考の可視化」「一人一人の思考の想定」「話し合うねらいの明確化」)

- ・共通点・相違点という観点のもと、ワークシートに整理することで、自分の意見(思考)を可視化することができた。
- ・グループで話し合うことで、他者と考えを共有し、自分と異なる視点に気付くことができた。
その結果、ほとんどの生徒が、話し合いの内容を根拠に、「生き方」について、自分の考えを記述することができていた。

●課題

- ・初発の考えの可視化、ネームプレートを使った立場の明確化等を行うことで、「自己変容への気づき」に向かわせたい。
- ・「言葉による見方・考え方」を働かせる学び合いのために、話し合いの前に、比較や関連付けの観点や、明確なゴールの姿を示すことが肝要である。

8 運営の成果と課題

推進委員会や協議会を始める際に、時間、目的、手段、ゴールを明確にして行った。参加者全員が同じ方向を向いているので、スムーズに会議を行うことができた。

新型コロナウイルス感染症防止の観点から、「部員同士また部員と生徒との接触がないようにする」という方針の下、プレ授業の参観は、指導者、研究推進責任者、会場校職員のみとした。授業の様子は、動画撮影を行い、部員に送付した。各校で協議会をもち、後日の研究革新委員会で、意見の集約、まとめ、反省を行った。部員からは、「音声やカメラワーク等の面で映像資料の限界を感じた」という意見も届いた。2年次の研究推進委員会に、リモート配信や機器操作の研修も組み込みたい。

1 部会名 国語2 郡市名 阿賀・胎内・北蒲 3 会場校 阿賀野市立京ヶ瀬中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・校長	三膳 章
(2) 研究推進責任者	胎内市立築地中学校・教諭	小林 優一
(3) 会場校責任者	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・教諭	野口 鮎子
(4) 県・郡市指導主事	下越教育事務所 支援第2課・課長	中原 広司
(5) 研究推進委員（授業者）	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・教諭	齋京 正浩
	阿賀野市立水原中学校・教諭	松澤 学
	胎内市立中条中学校・教諭	小沼 和文
	聖籠町立聖籠中学校・教諭	本田 奈美子

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	7/29(木)/京ヶ瀬中	7	・研究主題の検討 ・教科、領域で目指す深い学びの姿はどのような姿か、深い学びを実現する上で、大切なポイントは何か、目指す深い学びの姿の実現にはどのような手立てが有効かを検討
2	8/17(火)/京ヶ瀬中	7	・指導案検討
3	9/22(水)/京ヶ瀬中	6	・指導案検討 ・第2回一斉部会の実施方法検討
4	10/27(水)/京ヶ瀬中	5	・1年次授業公開（録画内容を郡市各校に配信） →協議題にそって各校で検討
5	11/10(水)京ヶ瀬中	7	・意見の集約、まとめ
6			
7			
8			
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 三野 博治
(学校名: 妙高市立新井中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 数 学
- 2 郡市名 上 越 3 会場校 妙高市立妙高中学校

4 研究主題

生徒が主体的に学び合う課題設定と授業展開の工夫

～課題から数理としての本質を見いだす数学的な読解力を鍛えるために～

5 主題設定の理由

生徒が好奇心をもって取り組める課題を設定することで、主体的な学びにつながると考えた。授業展開を工夫し、生徒が自分の考えを伝え合う場面を設定することで、学びが深まり学び合うことで課題解決の見方や考え方が補完され、深い学びと同時に数学的な読解力が高まると考えた。そのような授業を重ねることで、数理に対する探究心を育みたい。そのためには、生徒が取り組んでみたい、考えてみたいという課題設定が重要であり、授業展開こそ生徒に深い学びを促すポイントであると考え、この研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

研究推進委員会を開催し、以下の流れで研究を進めた。

- (1) 前年度の課題と成果について前副部長を招いて確認した。同時に深い学びのイメージを県立教育センターの実践ハンドブックを用いて共通理解を深めた。
- (2) 妙高中学校の目指す生徒像についての確認と、公開授業での比例反比例の提案課題を持ち寄って検討した。
- (3) 深い学びにつながるように課題を練り上げた。
- (4) 深い学びにつながる授業展開について意見交換を行った。
- (5) 公開授業における深い学びにいたるための授業展開について意見交換を行った。
- (6) 公開授業の実施と協議会
- (7) 公開授業の反省と課題、次年度の方針について協議した。

7 1年次の成果と課題

7回の研究推進委員会を通して、基本的な知識の定着や身に付けた技能の有用感を高めるためには、深い学びを軸とした授業展開が大切であることが分かった。そのためには、数学を通して身に付けた力を明確にして数学の本質に迫る課題の大切さについて再確認できた。また、iPadやGeoGebraの無料ソフトを活用することで、友達のことを共有したり、グラフを操作して視覚的に把握することで、考えをより深められることが確認できた。

8 運営の成果と課題

公開授業に向けて、計画的に研究推進委員会の協議内容を進めることができたので、委員相互の勉強にもなった。特に、深い学びに対する共通理解が深まったことが良かった。今後は、来年度に向けてさらに深い学びを伴う課題開発と授業展開について研究を進めていきたい。

1 部会名 数 学

2 郡市名 上 越 3 会場校 妙高市立妙高中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学・教授	岩崎 浩
(2) 研究推進責任者	妙高市立新井中学校・教諭	三野 博治
(3) 会場校責任者	妙高市立妙高中学校・教頭	大塚 高央
(4) 県・郡市指導主事	妙高市教育委員会・指導主事	丸山 文雄
(5) 研究推進委員（授業者）	妙高市立妙高中学校・教諭	若山 泰文
	妙高市立妙高高原中学校・教諭	平丸美智子

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	6月23日（水） 妙高中学校	6	前副部長の佐藤行夫先生をお招きして、前年度の取り組みの課題と反省を確認し、今後の委員会の活動内容について、意見交換を行った。また、深い学びの姿のイメージの共有とその実現について、意見交換を行った。
2	7月30日（金） 妙高中学校	4	妙高中学校の目指す生徒像とそのための手立てについて、意見交換を行った。また、公開授業が予想される比例・反比例の単元において、深い学びにつながる課題を持ち寄り、授業へのイメージを深めた。
3	8月23日（月） 妙高中学校	5	比例・反比例の単元における深い学びにつながる課題について、意見交換を行い、課題を練り上げた。
4	9月22日（水） 妙高中学校	4	公開授業での課題提示や深い学びにつながる授業展開について意見交換を行い、岩崎教授からもアドバイスをいただき、発問内容やiPadの利用、数学のソフトの活用について意見交換を行った。
5	10月6日（水） 妙高中学校	5	指導案の最終検討を行い、生徒の学習形態や考えさせる場面、発表場面を検討し、深い学びにいたる授業展開について、意見交換と指導案の改善を行った。
6	10月27日（水） 妙高中学校	6	妙高中学校の若山泰文教諭による公開授業と協議会を行った。参加者からの問題点や今後の課題について多くの意見や提案をいただくと共に、岩崎教授からの指導から、より深い学びを促すための課題を明確にすることができた。
7	11月10日（水） 妙高中学校	4	今回の公開授業を振り返り、問題点や今後の課題について意見交換を行い、来年度に向けて、共通理解を深めた。

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 小林 成 夢
(学校名：南魚沼市立塩沢中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 数 学
2 郡市名 南魚沼市 3 会場校 南魚沼市立大和中学校

4 研究主題

主体的に学習に取り組む態度の育成

～考える力・話す力・聞く力・書く力の育成による深い学びの充実～

5 主題設定の理由

目指す生徒の姿は、自分の意見を分かりやすく述べ、自他の考えの共通点と相違点を比較して検討しようとするなど主体的に数学の学習に取り組む姿である。しかし、実際の授業では生徒は受け身であることが多く、話し合い活動でも一部の生徒の発言や教師主導で学習が進んでしまう傾向にある。

そのため、自分の意見を発言したり、他者の意見を聞いたりして、生徒自身が意欲をもって問題を解決していくような授業展開を目指そうとこの研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

『「教師の学び合い」自体が「学び合う授業」の具現化に有益なヒントをもたらす』という考えのもと、研究推進委員が中心となり各校で授業を公開する。生徒が主体的に学習に取り組み、問題解決的な学習を進める授業の工夫として、

- ① 教師は原問題を黙って提示し、生徒自身の困り感から本時の課題◎を設定する。(考える力)
- ② 生徒自身が話し合いを通して課題を解決し、生徒自身の説明で全体に共有する。(話す力・聞く力)
- ③ 学習前と学習後を比べ、本時どんなことが分かったか、どのように考えが変わったかを振り返りで記入する。(書く力)

7 1年次の成果と課題

研究推進委員を中心とした授業実践

- ① 10月20日(木) 小川 精也 教諭(南魚沼市立六日町中学校)

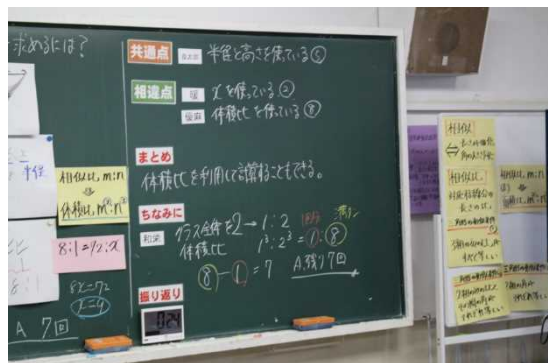
1年 比例と反比例 「比例と式」

- ・教師の話す時間はほとんど無く、生徒自身で学習を進めることができていた。
- ・1年生ではあるが、特に「聞く力」「話す力」が非常に育っており、発表者は体を全員に向け発表し、聞き手とやりとりをしながら説明していた。
- ・B4のコピー用紙を使用しての発表であったが、ペンの細い方を使用したため黒板に貼った際に字が見えにくかった。他者に伝える意識をさらに高める必要がある。

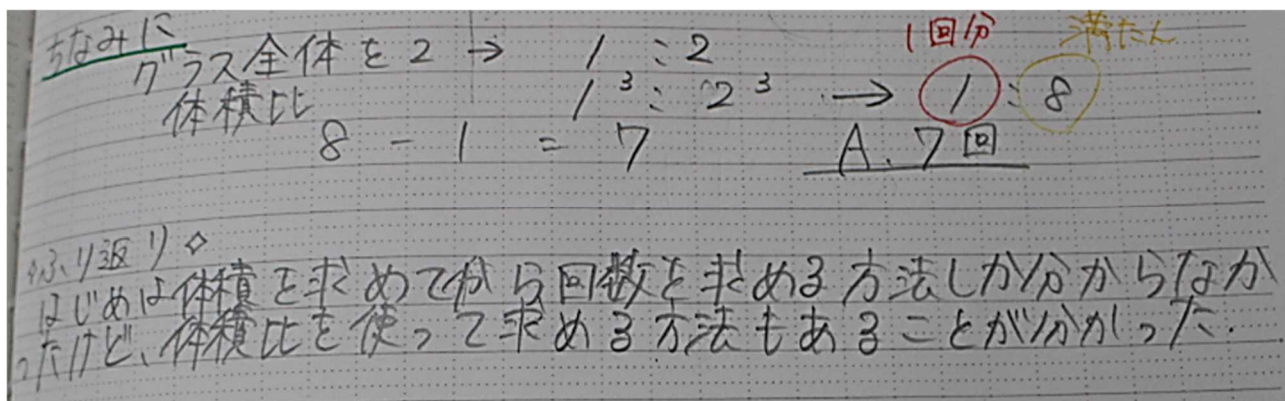
② 11月10日(木) 関 翔弥 教諭 (南魚沼市立大和中学校)

3年 相似な図形 「相似な立体の体積比」

- ・水があと何杯入るかという課題であったが、実際に計算で体積を求めた生徒、体積比を使って体積を求めた生徒、体積比だけで考えた生徒がおり、それぞれを対比させ考えを深めることができた。さらに対比しやすいように板書の工夫が必要であった。
- ・既習事項のプレートを黒板右に用意したが、導入段階で課題解決の見通しをもつヒントにもなるため黒板左に用意した方が有効ではないか。



- ・授業後の振り返りから「はじめは体積を実際に計算して求めるやり方しか思いつきませんでした。○○さんの発表で実際に体積を求めずとも体積比を利用すると計算できることに気づきました」といった学習の before・after がしっかりと記入されていた。



8 運営の成果と課題

研究推進委員が中心となり各校で「主体的に学習に取り組む態度の育成」に焦点を当てた授業公開を行うことができた。また、授業内容検討会や授業公開・協議においても、指導者からのご指導を受けることができた。今後は授業後の協議の方法についても検討し、さらなる研修をつんでいく。

1 部会名 数 学

2 郡市名 南魚沼市 3 会場校 大和中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	三条市立第二中学校・教頭	茶谷 明
(2) 研究推進責任者	南魚沼市立塩沢中学校・教諭	小林 成夢
(3) 会場校責任者	南魚沼市立大和中学校・教諭	古川 歩佳
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員（授業者）	南魚沼市立大和中学校・教諭	関 翔弥
	南魚沼市立湯沢中学校・教諭	山貝 健輔
	南魚沼市立八海中学校・教諭	駒形 公文
	南魚沼市立六日町中学校・教諭	高橋 耕平

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	8/20 大和中	6	前副部長より前年度からの引き継ぎ。研究の進め方を検討
2	10/1 大和中	7	研究主題 公開授業の内容検討
3	10/20 六日町中	6	六日町中 小川教諭による公開授業 1年 比例と反比例 比例と式
4	11/10 大和中	7	大和中 関教諭によるプレ授業 3年 相似な図形 相似な立体の体積比
5	1/7 大和中 (予定)	7	今年度のまとめと来年度に向けて
6			
7			
8			
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 土田 健太郎
(学校名: 新潟市立早通中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 数学
- 2 郡市名 新潟 3 会場校 新潟市立東新潟中学校

4 研究主題

数学的に考える資質・能力の育成に向けた授業改善の工夫
～全員共通実践を通して～

5 主題設定の理由

令和3年度全国学力・学習状況調査の全国結果を見ると、「数学的な見方考え方」に関する問題の正答率は低い。説明式の問題になると無回答率は2～3割、正答率は10%～30%であった。この傾向は、過去の調査からもいえることから、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、資質・能力を育成するためには、「数学的な見方考え方」を働かせることが必要である。そのためには、1時間の授業の中で「見通し」「対話」「振り返り」という視点を大切にしつつ、生徒が目的意識を明確にもちながら課題追求していく単元デザインが重要である。単元で身に付けさせたい資質・能力を明らかにし、どの場面でどのような力を育成するのか、そのためにどのような教材でどんな活動をするのかを本研究では明らかにしていきたい。

6 研究の方法と内容

(1)研究の目的

「汎用的な資質・能力」を育成する単元構成と、「見通し」「対話」「振り返り」という視点で数学的に考える資質・能力の育成に向けた授業づくりを目指す。

(2)研究の方法

研修コンセプトを『全員実践』とし、提案授業を参観し、全員が提案授業を実践することを通して、数学的に考える資質・能力の育成に向けた授業づくりについて研究を進めていく。また、指導案を事前に全会員に送付し、実践・検討していく。

具体的な2年間の計画は次の通りである。

○1年次

- ・生徒に身につけさせたい資質・能力の協議 (R3.6.30 実施)
- ・単元(授業)構想の検討 (R3.8.4 実施)
- ・プレ授業 (R3.9~研究推進委員各校で実施し、動画撮影)
- ・指導案(手立て)検討 (R4.1 予定)

○2年時

- ・指導案(修正)検討 (R4.6 予定)
- ・市内各校に指導案配布と実践 (R4.9 予定)
- ・公開授業と手立てについての協議会 (R4.11.10 予定)

(3)研究の内容

単元の指導計画を立てた上で「見通し」「対話」「振り返り」の工夫をすることで、生徒に数学的に考える資質・能力の育成を目指す。図形領域だけではなく、関数領域など他の領域でも生徒の身につけさせたい資質・能力を明確にし、授業改善をしていく。

1 学年：「変化と対応」 2 学年：「図形の調べ方」 3 学年：「関数 $y = ax^2$ 」

7 1 年次の成果と課題

プレ授業は研究推進委員が各校で実践し、それを録画した動画を参観しながら手立てについて検討していく形にした。各校での実践を踏まえた検討は1月に行う予定なので、会場校での実践の成果と課題を以下に述べる。

○成果

- ・授業者が単元を通して育成したい資質・能力を意識して1時間1時間の授業を構成し、指導することができた。
- ・見通しをもたせることによって自力解決に取り組みやすくなり、対話的活動が進みやすくなった。(2 学年・図1)
- ・振り返りを通して、本時の学習内容の意味付けや今後の学習における問題解決のツールの蓄積を図ることができた。(2 学年・図2)

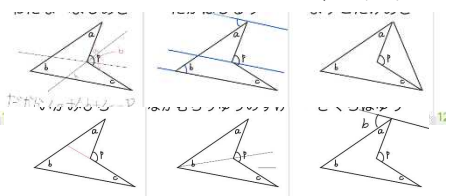


図1 iPadで補助線のアイデアを共有

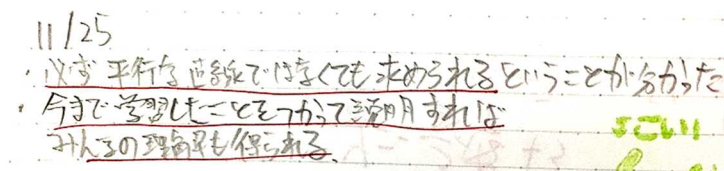


図2 生徒の振り返り

○課題

- ・資質・能力の育成という点で、単元のデザインをより良いものにしていく必要がある。(適切なパフォーマンス課題、指導の軽重、適切な評価など)
- ・手立ての有効性は感じられたが、客観的に有効性を検証する方法を考える必要がある。

8 運営の成果と課題

○成果

- ・6月の研究推進委員会では研究推進委員どうしで「生徒に身につけさせたい資質・能力」や、今後の計画を共有した。会場校任せではなく研究推進委員全員で取り組んでいくことを確認できたことにより、授業者の心理的な負担を減らすことができた。お互いに顔を合わせたことによって心理的な距離が縮まり、良いスタートを切ることができた。
- ・プレ授業の構想をグループ毎に話し合い、研究推進委員全員が各校で実践できた。1月に参集した際に実践発表をしあい、手立てについて検討していく。

○課題

- ・お互いの授業を参観し合う計画だったが、合唱コンクールなどの学校行事と時期が重なり、行き来するのが難しかった。全員で参集し、十分な検討時間を確保するのが課題である。
- ・来年度、新潟市中教研数学部全員に指導案を事前に送るが、参加者が同じ指導案で授業実践してから研究発表会に参加するのは、授業の進度的に難しい。発表会後に各校で実践するなど研修計画の見直しが必要か。

様式③ 指定研究 経過の概要報告書

令和3年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書 (1年次)

新潟県中学校教育研究会会長 様

1 5 部会全県部長 _____ 山本 俊介

報告者氏名 _____ 加藤 直樹
(学校名: _____ 新発田市立本丸中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 _____ 数学部

2 郡市名 _____ 新発田市 3 会場校 _____ 新発田市立本丸中学校

4 研究主題

数学的見方・考え方を働かせた、深い学びのある授業の実現

5 主題設定の理由

数学科の目標として「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する」とある。また、数学的な考え方は目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、論理的に考え、問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能を関連付けながら、統合的・発展的に考えることとしている。

さらに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善は、新学習指導要領における重要な視点である。中央教育審議会答申(2016)では、深い学びについて①知識を相互に関連付けてより深く理解、②情報を精査して考えを形成、③問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることとされている。また、深い学びの鍵として見方・考え方を働かせることが重要とされている。

これらのことから、数学的な見方・考え方を働かせた深い学びのある授業を実現することは、授業改善の重要な視点であると考えた。そして深い学びについて、『知識・技能が関連付けられ、いつでも汎用的に使いこなせる状態になること』(深い学び,田村学,2018)と捉え、研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容


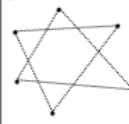
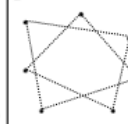

深い学びの実現のために、本研究では「つながり」のある授業に重点を置いた。すなわち、導入におけるこれまでの学習内容とのつながり、課題解決で活用する既習の知識・技能とのつながり、そして授業のまとめで、数学は既習の知識・技能をつなげることで、新たなことを導き出していくことを実感できるような授業である。その授業を実現するために、数学科2学年「図形の性質の調べ方」の単元において、次の3つのステップで授業を展開しようと考えた。

(1) 生徒に「問い」をもたせる

本単元は、1本の直線(180°)から学習が始まり、直線を2本(対頂角)、3本(同位角と錯角)と、既習の学習を関連付けながらその条件を変えて、新しい学習を導き出していく。またこのつながりは、三角形の内角の和から四、五、多角形の和、そして外角の和と連々とつながっていく。

本授業の題材である星形五角形の先端部分の角の和(以下角の総和という)についての考察でも、この学習のつながりを意識して生徒に問いをもたせる。つまり、四、五、六角形…と内角の和を求めたこととつなげて、線分を1つ飛びに結ぶとできる星型多角形の角の和について考察しようとすることで「何度だろう。」「星型でも角の総和は増えていくのかな。」と生徒に問いをもたせる。

星型六角形と星形八角形は三角形と四角形の内角の和という既習の知識を活用することで、角の総和を求めることができる。さらに星型六角形が $180^\circ \times 2$ 、星型八角形が $180^\circ \times 4$ と表せるから星型七角形は 180×3 、星型五角形は $180^\circ \times 1$ になると類推させることができる(下図)。

星形五角形	星形六角形	星形七角形	星形八角形
			
$180^\circ \times 1 ?$	$\cdot 360^\circ$ $\cdot 180^\circ \times 2$	$180^\circ \times 3 ?$	$\cdot 720^\circ$ $\cdot 180^\circ \times 4$

このことから、星形五角形の先端部分の角の和が本当に 180° になるのか生徒に「問い」をもたせ、実際に既習事項の図形の性質を用いて説明できないか考えさせていく。

(2) 既習の「知識・技能」をつなげる

星型五角形の総和が 180° になることを説明するためには、三角形の外角の性質等、これまでの「知識・技能」をつなげて解決していく。これは『知識・技能が関連付けられ、いつでも汎用的に使いこなせる状態になること』(深い学び,田村学,2018)に迫る姿である。

(3) 自分の言葉で「まとめる」

本時の学習を振り返って「どんな方法で説明したのか」と自己内対話をすることは、新しい学習内容と既習の学習内容をつなげるための重要な過程である。そして「これまで学んだ性質を使うと、新しい性質を説明できる」という実感が、今後の証明の指導へとつながっていくと考える。このように自分のことばでまとめたり振り返ったりして、自己内対話をさせていく場面を設定していく。

7 1年次の成果と課題

11月4日(木)、新発田市立猿橋中学校で研究授業を実施した。成果と課題は以下の通りである。

(1) 成果

- ・問いをもたせる、既習の「知識・技能」をつなげる、自分の言葉でまとめるの3ステップで授業を展開することができた。
- ・既習の「知識・技能」をつなげる場面で、ICTを活用して解法の手立てを共有することができた。

(2) 課題

- ・星形六、八角形から星形五角形が 180° であるという類推をスムーズに行う手立てのあり方。
- ・どの図形に着目するか、どう補助線を引いて解決するかという見通しを生徒にもたせるための手立てについて。また、そのためにICTをどう活用するか。
- ・今後の指導で生徒が自ら論証を書くことにつながるための「まとめ」のあり方。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・研究推進委員会を行うたびに、委員一人一人が自分ごととして指導案を捉え、より良い手立てについて意見を述べ合う姿が見られた。
- ・プレ発表当日は、グループ協議の司会、受付などの役割を、研究推進委員で分担して運営できた。

(2) 課題

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 丸山 徳子
(学校名：上越市立板倉中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 道 徳
2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立板倉中学校
4 研究主題

「自分の考えをもち、進んで考えを伝え合い、深い学びを得る生徒」の育成
～発問構成の工夫と対話の充実で、「深い学び」を促す～

5 主題設定の理由

会場校（板倉中学校）では、道徳の授業の中で、多様な考えが出せる発問や意見交流の工夫を行いながら、生徒に「自分の考えをもち、他と考えを伝え合うことの楽しさ」を感じさせる取組を進めてきた。その取組の中で、授業者が感じていた課題は、次の通りである。

①生徒の課題

- ・「かかわり合う」力の不足
(間違いや他と違うことを恐れる傾向があり、自己開示や自己表現を苦手とする生徒が多い。)
- ・「話し合い」が「伝え合い」の域を超えず、考えを練り上げていくことが難しい

②授業者の課題

- ・ねらいの明確化と、考える必然性をもった「主発問」や「深い学び」を促す「補助発問（切り返しの発問）」の練り上げ
- ・考えを深めていける「話し合い」「意見交流のさせ方」の工夫
- ・「自分の考えをもち」→「考えを交流する」→「自分で再度考える」の流れの中で、最後の自己内対話を充実させる工夫

以上の課題は、地区の他の学校の課題ともほぼ共通していた。そこで、これらの課題を踏まえ、今年度は、「深い学び」とは何かを考察していくとともに、「深い学び」を促すための「発問構成の工夫」と「対話（教材、他者、自分）の工夫」に焦点を当てて、研究を進めることとした。

6 研究の方法と内容

(1)研究の方法

- ・「発問構成」「対話」を課題とし、推進委員が自校で実践し、実践の結果や課題を持ち寄る。
- ・授業公開（板倉中学校・直江津中学校）を通して、実践の効果について検証し合う。

(2)研究の内容

①生徒が「深い学び」に至った姿を次のようにとらえる

- A：意見交換の場で、視点を広げたり変えたり、表層から深層に至る発言が交わされている
- B：振り返りの記述の中に、深まった内容が書かれている

②生徒が「深い学び」を得たかどうかの判断規準を次のように考える

- ・職員が、教材研究・授業づくりの中で、上記のA Bでどのような発言や記述が出てきたら「深い学びに至った」ととらえるかの規準をもつ
- ・上記にプラスして、生徒の発想（教師の想定を超える発言や記述）も取り入れる余地をもつ

③生徒自身が「深い学び」を得たと実感させるために、次のような仕掛けを行う

- ・「はじめの考え」をしっかりともち、授業の振り返りの際に「はじめの考え」がどのように変化したり強化されたりしたかを意識させる（板書やワークシートの工夫）
- ・自分の考えがどの過程を経て変化したり強化されたりしたかを、「学び合いステップUP」（板倉中学校作）を使って認知させる（振り返りシートの工夫）

④学年部ごとに次の3点を中心に教材研究を行い、実践を進める。

- ・ねらいを明確にし、「深い学び」の姿の規準を確認する
- ・ねらいに迫るための主発問と、主発問に対する補助発問（切り返しの発問）を想定する
- ・ねらいに対して多面的・多角的に考えられる主発問を設定し、学びを深めるために効果的な

意見交流を工夫する（対話の工夫）

⑤「深い学びに至ったか」は、次のように検証する

- ・互いの授業を参観し合い、①のA Bについて協議する
- ・上越教育大学大学院・早川研究室の協力を得て、生徒の振り返りシートの分析や「連想法」での分析を行い、発問や意見交流の効果を検証する

7 1年次の成果と課題

【成果】

令和元年度から道徳を中核に据えた研修計画を策定しており、今年度で3年目を迎えた。当初より「学び合いステップUP」と「振り返りシートの工夫」を行ってきており、今年度の3年生はその3年目に当たる。3学年では「学年道徳」に継続して取り組んできており、11月末に行った「学年道徳」での発問の構成と生徒の記述を、1年次の成果として示す。

【テーマ：「こうのとりのゆりかご」（独自教材） 内容項目：D-(19)命の尊さ】

提示・発問	生徒の感想
0 「命・きずなを考える講座」の生徒の感想提示	<ul style="list-style-type: none"> ・きちんと自分の体と向き合いたい。 ・赤ちゃんはすごい。 ・自分の命は自分だけじゃなく、たくさんの人の命がつながって、今、存在している。 ・お母さんに感謝。 ・男性にも責任があることを知った。
1 「こうのとりのゆりかご」の画像を示す。 発問：「これは何だろう？」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで育てられなくなって預ける所？事情があるにしろ、赤ちゃんがかわいそう。 ○赤ちゃんを捨てるための扉？自分で産んだのだから最後まで育ててほしい。
2 「預ける側」の状況説明 発問：「どう思う？感想・意見・質問をどうぞ。」	<ul style="list-style-type: none"> ・子どももお母さんもとても悲しい。 ・預ける人にもそれぞれの事情がある。 ・母親にとっても赤ちゃんにとっても辛いこと。でも赤ちゃんが命を落とさずに生き延びることができるのであれば、あってもいいのでは。 ○どんな理由があっても、赤ちゃんを手放すのはよくない。産んだのなら責任をもって育てるべき。 ○親から手放された子どもの気持ちを考えていない。
3 「こうのとりのゆりかご」の仕組みの説明 「作った側」の状況説明と預けた人のその後 発問：「どう思う？感想・意見・質問をどうぞ。」	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで大きなケガや病気をせず、幸せな環境で育ててきたけれど、それは当たり前じゃないと思った。 ・赤ちゃんを手放す母親の「最後の愛情」という言葉が心に残った。 ・こういう制度は、母親の人生を変えるものでもあるんだと思った。 ○赤ちゃんを預けることはお母さんの愛情だとわかった。けれど、やっぱり赤ちゃんは自分で育てるべきという思いもある。
4 まとめ 発問：「自分はどうするべきと思うか。」	<p>(女子)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の人と赤ちゃんが一番幸せになれることを考えないといけないと思った。産むと決めたら、最後までしっかりとやりとげたい。 ・私たちにあってこれからの問題だと思った。女性だけが悩むことじゃなく、誰かに相談することがとても大切だと思った。 ・赤ちゃんが大きくなった時、ショックを受けると思う。簡単には答えが出せる問題ではない。 <p>(男子)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親（女性）だけに責任を負わず、支えられるようになりたいと思った。 ・産むか産まないかは簡単に決断できることではないと感じた。産むからには、相当の覚悟が必要なんだと思った。

発問ごとに考えが広がり、内容も自分の感想から社会的なこと、将来のことにまで言及が見られ、深まっていることが見て取れる。

【今後の課題】

・「6 研究の方法と内容」①～⑤をより精緻に捉え、教材研究から授業後の生徒の行動の変容までを包括したスタイル（または、道筋）を構築する。また、それを職員間で共有し、道徳の授業改善と生徒の行動変容をもたらすよう、全校体制で取り組んでいく。

8 運営の成果と課題

(1)成果

会場校の職員研修（上越教育大学上廣道徳教育アカデミー講師による研修）に推進委員が参加する形で研究を進めることにより、課題を共有しながら一体感をもって研究を進めることができた。また、上越教育大学大学院早川研究室の協力を得ながら、客観的な立場での検証も進めることができた。

(2)課題

会場校での授業公開が中心となり、推進委員の実践を交流する場がほとんどもてなかった。来年度は、他校の推進委員の実践を参観する場も設定し、地区全体の研究となるよう進めていきたい。

資 料

1 部会名 道 徳

2 郡市名 上越市

3 会場校 上越市立板倉中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学大学院 教授	早川 裕隆
(2) 研究推進責任者	上越市立直江津中学校 教諭	遠藤 義紀
(3) 会場校責任者	上越市立板倉中学校 教諭	丸山 徳子
(4) 研究推進委員（授業者）	上越市立直江津東中学校 教諭	石野佑紀枝
	上越市立柿崎中学校 教諭	笠原乃里子
	上越市立三和中学校 教諭	武藤 美紀
	上越市立板倉中学校 教頭	黒田 匠
	上越市立板倉中学校 教諭	安藤 正人

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	7 / 12	7	目指す生徒の姿「自分の考えをもち、進んで考えを伝え合い、深い学びを得る生徒」を育てるために今後取り組むべきことについて、板倉中学校1学年2学級の授業公開（教科書教材『まだ進化できる～イチロー選手の生き方』）を基に、会場校の職員と協議した。ICTを使った生徒の考えの視覚化の効果や可能性、当該教材での「深い学び」を踏まえた発問の精選や伝え合う場の設定等について、成果や課題を確認することができた。
2	7 / 27	7	会場校の取組や課題、推進委員の勤務校での現状や課題を交流し、研究の方向性を協議した。「発問構成の工夫」「対話の充実（特に他者との対話の充実）」を課題として、実践を進めることを確認し合った。
3	10 / 12	4	「自分の考えをもち、進んで考えを伝え合い、深い学びを得る生徒」を育てるために「どのような『発問』や『補助発問』をしていけばよいか」について、直江津中学校 遠藤教諭の授業公開（教科書教材『わたしのせいじゃない』）を基に、協議した。生徒の考えを広げる発表や意見交流のさせ方、生徒の考えを深める補助発問（切り返しの発問）の仕方について、学び合うことができた。
4	10 / 18	8	「自分の考えをもち、進んで考えを伝え合い、深い学びを得る生徒」を育てるために「どのような『発問』や『補助発問』をしていけばよいか」について、板倉中学校2学年2学級の授業公開（教科書教材『わたしのせいじゃない』）を基に、会場校の職員と協議した。ねらいに対して、アプローチの仕方が異なる2つの指導案を用意し、「深い学び」を促す学習活動について考察した。自分との対話を促す発問構成や、生徒一人一人の考えの共有のさせ方や考えの広げ方について、成果や課題を確認することができた。
5	12 / 20	8	「生徒一人一人が『深い学び』に至るために、発問や意見交流をどのように組み立てていけばよいか」をテーマに、上廣道徳教育アカデミー客員講師・齋藤眞弓様より示範授業と講話を行っていただいた。この研修を基に、今年度の究の成果と課題を確認し合った。

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 渋谷 祐 樹
(学校名: 魚沼市立湯之谷中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 道徳
- 2 郡市名 魚沼市 3 会場校 魚沼市立広神中学校

4 研究主題

道徳授業における「質の高い多様な指導方法」の具現化を目指して
～役割演技、問い返し発問の実践～

5 主題設定の理由

「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(平成28年7月22日)では道徳教育の質的転換のためには質の高い多様な指導方法の確立が求められており、その中で、多様な指導方法として「①読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「②問題解決的な学習」「③道徳的行為に関する体験的な学習」が示されている。

本研究では「②問題解決的な学習」においては、問題場面で生徒自身の考えの根拠を問う発問や問い返しを実践し、「③道徳的行為に関する体験的な学習」においては役割演技を実践し、道徳的価値の理解を深め、資質・能力を養うことを目的として研究を進める。

6 研究の方法と内容

- ・公開授業の指導案をもとに魚沼市内の各校で役割演技、問い返しを実践し推進委員会にて意見交換、情報共有した。
- ・新潟青陵大学教授 中野 啓明 様より「道徳教育におけるICTの活用」と題しご講演をしていただいた。
- ・魚沼市学習指導センター事業の上越教育大学 上廣道徳アカデミー 特任教授 小宮 健 様の師範授業および講演会に参加。

7 1年次の成果と課題

- ・魚沼市内の各校で役割演技、問い返しの実践では、推進委員以外の職員方々からも授業をしていただき、市内全体で実践しているという意識を持つことができた。
- ・推進委員の役割分担を明確にし、2年次の発表に向け準備を進めていきたい。

8 運営の成果と課題

- ・Zoomでの会議を開催し移動の時間や校務への負担を軽減することができた。その一方で、具体的な研究方法や細かな運営面の打ち合わせを行うことが難しかった。

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 千原 健志
(学校名： 柏崎市立東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 上越地区英語教育研究部会

2 郡市名 柏崎・刈羽 3 会場校 柏崎市立瑞穂中学校

4 研究主題

自分の考えや思いを伝える生徒の育成
～4技能5領域のバランスが取れた言語活動の実践～

5 主題設定の理由

柏崎・刈羽地域の研究推進委員会において、「各校のCAN-DOリストには、『(生徒が)英語を活用して〇〇について、自分の考えや思いを他者に表現できる(ようにする)』と記載しているが、実際の授業では、生徒が、自分自身の本当の気持ちを表現したり、考えや思いを披露したりする活動が低調であること」が、共通の課題として挙げられた。

本委員会は、「生徒が教師の指示に従うだけの受身的な学習を行っていること」、「生徒が自分自身の考えや思いを表現するには、インプットの量が不足していること」などに起因すると考え、「生徒が課題に対して主体的に取り組めるようにすること」、「インプットの量を増やして自己表現しやすい素地を作ること」を目指し、以下の手立てを用いて、自分の考えや思いを伝える生徒の育成を目指すこととした。

6 研究の方法と内容

本研究では、主題に迫る手立てとして、3つのステップを設定し、授業を実践した。

(1) 学習・指導・評価の一体化

柏崎・刈羽地域では、CAN-DOリストや柏崎カリキュラムシートに基づいて、各期で達成すべき目標を明確にしている。各期の中では、いくつかの単元の学習を経て期の目標の姿へと向かうことになる。各単元においては、生徒が単元目標を達成できるよう、教師は単元の第1時において単元ガイダンスを行い、当該単元におけるゴールの姿を教師と生徒で共有する。こうすることで、生徒は、単元の終末に向けて自分が目指したい姿を思い描き、学習課題の解決に向けて、見通しをもって学ぶことができる。また、単元の途中段階で生徒が学習を自分事として捉え、自分自身で理解できていることや身に付いている力、今後必要な学習等を認識できるよう、振り返りシート（リフレクションシート）を活用する。

(2) 5領域のバランスの取れた言語活動

通常我々が言語を介して行う活動には、何らかの意味がある。英語の授業においても、生徒が言語活動を行う際に、コミュニケーションを行う目的や場面・状況を適切に設定することが大切である。本研究では、教科書で聞いたり読んだりした内容について、生徒が自分の意見をもてるようにし、それを他者に話したり書いたりして伝えるといった目的等を作り、4技能5領域を統合した言語活動をより多く取り入れた。単元や授業内で行う活動において、技能の偏りがないよう、CAN-DOリストに基づいて、4技能5領域の力をバランスよく伸ばすようにした。その際に、生徒にとって身近な話題を取り上げたり、ICT機器を活用したりして、生徒が自己表現を行う際に喜びや楽しみをもてるようにした。

(3) 教科書とパラレルな言語活動

本年度より全面実施となった学習指導要領では、単に英語を使う練習にとどまらず、言語活動を繰り返す

返し行うことを通して生徒にコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けさせることが大切であるとされている。授業においては、中心教材は教科書で扱われている教材であるが、本研究では、教科書で扱われている教材だけでなく、教科書教材と内容や構成、扱われている言語材料が類似した教材（パラレル教材）を用いた言語活動を仕組む。パラレル教材を活用することで、生徒へのインプット量を増やすことができ、生徒が自己の考えや思いを表現するための必要な足場掛けになり得ると考える。

7 研究の成果と課題

○研究の成果

- (1) 「リフレクションシート」による生徒と教師の目標の共有→教科書を活用したバランスの良い授業づくり→一人一台端末や一人学びの保証による個別最適な学びへの配慮→パラレル教材を使った4技能5領域の指導→リフレクションシートを使った課題の再共有、という地域が目指すべき新しい指導の流れを明らかにした。
- (2) 1年生について、系統的な教材開発ができた。また地域のWebサイトに、アップロードすることで柏崎刈羽すべての学校で共有できるようになった。
- (3) 研究推進委員会と研究発表会を通して、地域全体に成果を共有し、今後も研修の継続を図る下地作りができた。“オール柏刈”の実践ができつつある。

○研究の課題

- (1) リフレクションシートについては、今年度は各校で（研究推進委員ごとに）作成した。各校特有の事情、生徒の実態はそれぞれではあるが、ベースとなるものが共有されると、地域全体の英語教育力の質の向上につながる。今後の検討課題としてあげておきたい。
- (2) パラレル教材については1年生について完成することができた。今後は地域全体の英語教員にも協力を呼びかけ、新年度の指導を進めながら2,3年生のパラレル教材を作成していけるようなアクションを起こす必要がある。本研究推進組織の活動は終了するが、柏崎刈羽の学校教育研究会にその内容を引き継ぎ、さらなる発展を図りたい。
- (3) パラレル教材を素材として、4技能5領域を伸長する言語活動に「仕立て直す」必要がある。各校、各英語教員の気持ちを合わせ、それぞれの実践を進めることとそれらの共有にエネルギーを注ぎ、本研究をさらに骨太の研究に育てていく必要がある。

8 運営の成果と課題

○運営の成果

- (1) 新型コロナウイルス禍の下での研究であり、相互の参観が難しい状況であった。また足掛け3年にわたる研究だったため、委員の異動に伴う入れ替えもあったが、研究推進委員の意欲的な活動により、まとめの年の研究を無事終えることができた。また、参会者を限定してではあったが、授業公開と協議会を開催することができた。対面での開催は教員同士の学びを深めることに有効であることが再確認できた。
- (2) 研究推進委員会を通じた交流は柏崎刈羽のつながりを強めた。この絆は、今後の研究推進における強力な推進力となることが期待できる。

○運営の課題

- (1) 柏崎市刈羽郡学校教育研究会の一部会である「外国語活動・英語教育研究部会」と連携し、小学校との連携を強め、多くの英語科教員が参画できるような仕組みを作る。
- (2) 研究推進委員内の役割分担を行い、一部に仕事が偏らないように工夫していく。

1 部会名 上越地区英語教育研究部会

2 郡市名 柏崎刈羽 3 会場校 柏崎市立瑞穂中学校

4 研究会開催期日 令和3年11月24日(水)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	中越教育事務所・指導主事	川田 昌宏
(2) 研究推進責任者	柏崎市立東中学校・教諭	千原 健志
(3) 会場校責任者	柏崎市立瑞穂中学校・教諭	山崎 美奈子
(4) 県・郡市指導主事	柏崎市教育委員会・指導主事	平野 克之
(5) 研究推進委員(授業者)	柏崎市立瑞穂中学校・教諭	藤巻 洋生
	柏崎市立第一中学校・教諭	藤田 いず美
	柏崎市立第三中学校・教諭	上村 香
	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	栗岩 知美
	柏崎市立松浜中学校・教諭	近藤 直子
	柏崎市立西山中学校・教諭	頓所 嘉樹
	刈羽村立刈羽中学校・教諭	若井 夏唯

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日/会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	7月1日/東中学校	7名	課題の共有と研究推進の方向性の確認
2	8月5日/東中学校	9名	研究推進の進め方と仕事の分担、Class6の原稿検討
3	8月20日/東中学校	7名	教材開発の方法検討
4	9月22日/東中学校	7名	研究発表会要項の検討
5	10月22日/第一中学校	12名	プレ授業の実施と当日指導案の検討
6	11月10日/瑞穂中学校	11名	研究発表会の準備
7	11月24日/瑞穂中学校	12名	研究発表会
8	12月8日/東中学校	5名	研究の総括と今後の研究推進に向けて

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数	27名	(3) 小学校・高等学校教員	4名
(1) 郡市内中学校会員	16名	(4) 来賓・教育委員会・センター	7名
(2) 他郡市中学校会員	0名	(5) その他(地域・保護者の方)	0名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
1年2組	Program7 Research on Australia	藤巻洋生

9 全体協議会:

協議題「『自分の考えや思いを伝える生徒の育成』の実現に向けた柏崎刈羽の英語教育の在り方」

指導者: 中越教育事務所学校支援第2課 指導主事 川田 昌宏 様

妥当性があるかどうか。みんながおさえるべきポイントとして捉え、道徳の内容項目の指導の観点を授業のまとめでおさえる。

また、授業での捉えとしては、最適解→まとめ 納得解→振り返りという考え方で授業の構成を行う。

納得解

賛成、反対など様々な人の意見を聞き合う。自分が納得できる納得解を探して、自分に戻していくことと捉える。振り返りの中で納得解を導き出す。例えば、今後どうするか？あなただったらどうするか。などを記述させる。

7 1年次の成果と課題

〔成果〕

- ・新潟市中教研の道徳部幹事を中心に、研究主題の考え方を整理し、確認しながら研修を進めることができた。指導者の新潟青陵大学の中野教授にも3回、ご指導いただきながら研究の方向性、キーワードの捉え方、公開授業の指導案検討を重ねてきた。またできあがった指導案を使い、研究協力校の新潟柳都中、上山中でのプレ授業も行い再度指導案の検討、再考をしながら1年次公開授業に向けて研修をしてきた。
- ・公開授業当日は、ねらいを達成させるために「心情スケール」を活用することで、教材との対話、他者との対話、多面的な考えの共有、最適解を導き出すため手立てとして有効だったか。ということについて意見交換し、指導を受けた。
- ・心情スケールを活用することによって、自分と他者の立場や考え方が明瞭になり、把握が容易にできた。
- ・対話により、多面的に考え、納得解、最適解につなげることができた。

〔課題〕

- ・考えを可視化するための思考ツール（心情スケール）の活用が、曖昧な点があり、対話の深まりに結びつかない班があった。
- ・道徳的实践につなげるための「自分事」として捉えるための手立てが不足していた。
- ・「心情スケール」を活用するのであれば、大枠で、4分割などに分類してその自分が置いた位置や他の仲間の置いた位置での理由の違いを考えさせたり、話し合わせたりさせていきたい。また、「対話」の生徒の様相を明確にしながらかじり考え、思いを伝え、話し合いたいと生徒自身が思うような発問を検討していく。

8 運営の成果と課題

今年度は新型コロナウイルス感染対策のため、1年次研究は道徳部の顧問校長先生、幹事を中心に行った。次年度は、2年次の研究発表に向けて運営面での準備を早めに取りかかりたい。

1 部会名 道 徳

2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立白新中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟青陵大学 教授	中野 啓明
(2) 研究推進責任者	新潟柳都中学校 教諭	石山 友範
(3) 会場校責任者	白新中学校 教諭	田村 友教
(4) 研究推進委員（授業者）	白新中学校 教諭	田澤 育江
	藤見中学校 校長	田中 宏和
	濁川中学校 校長	武田 統理
	関屋中学校 教諭	佐藤 貴代
	鳥屋野中学校 教諭	増田 信枝
	上山中学校 教諭	小林 明美
	寄居中学校 教諭	小林 実
	白新中学校 教諭	丸山 郁美
	白新中学校 教諭	和田 卓之
	新潟柳都中学校 教諭	井上 明美
	新潟柳都中学校 教諭	渡邊 堯志

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	5月6日（木）藤見中	7	研究推進委員会 今年度の流れ、日程の確認等
2	5月26日（水）柳都中	4	研究推進委員会 指導者と研究の方向性を確認
3	6月17日（木）白新中	10	研究推進委員会 公開授業の題材の選定等
4	7月29日（木）白新中	9	研究推進委員会 公開授業の指導案検討
5	8月24日（火）白新中	6	研究推進委員会 公開授業の指導案検討
6	10月15日（金）柳都中	3	プレ授業 委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
7	11月2日（火）柳都中	4	プレ授業 委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
8	11月12日（金）上山中	5	プレ授業 委員どうしによる授業の見せ合い、再度指導案検討
9	11月18日（木）白新中	3	研究推進委員会 1年次研究発表に向けた準備会
10	11月24日（水）白新中	8	1年次研究発表会 公開授業、協議会、指導者による指導

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 後藤 陽子
(学校名: 五泉市立五泉中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 道徳
- 2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 五泉市立川東中学校

4 研究主題

互いに認め合い、他を尊重する心の育成 ～豊かな心を育む道徳教育を通して～

5 主題設定の理由

学習指導要領では、「豊かな心」の育成の重要性が以下のように述べられている。

道徳教育を通じて育成される道徳性、とりわけ、内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度、豊かな情操などは、「豊かな心」だけでなく、「豊かな学力」や「健やかな体」の基盤ともなり、「生きる力」を育むために極めて重要なものである。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編

道徳教育を通して育まれる道徳性は、「豊かな心」を育むとともに、「確かな学力」や「健やかな体」を支える基盤となることから、学校教育全般における道徳教育がより一層重要になってくると捉えた。よって、学校全体の教育活動と道徳教育を関連付けながら、教科横断的に一つ一つの教育活動の質を上げることで、生徒の道徳性を育み、「豊かな心」の育成につながると考え、川東中では学校全体で取り組むこととした。

この川東中の取組を受けて、郡市中教研道徳部も同歩調で研究を進めていくこととした。

6 研究の方法と内容

(1) 研究の方法

川東中では、「豊かな心」を「互いに認め合い、他を尊重する心」と捉え、教育活動を道徳教育と関連付けて、1つ1つの教育活動の質を上げることで、生徒の道徳性を育み、この「豊かな心」の育成に取り組んでいる。

①道徳の授業

- ア 内容項目の中で、特に「思いやり、感謝」「生命の尊さ」に重点をおいた指導を行う。
- イ 考え議論する授業を計画的に行い、道徳的価値について多様な見方、考え方を育てる。
- ウ 地域の資料や人材を生かし、切実感があり共感できる授業を計画する。
- エ 体験したことをもとに、自己の行動や生き方を考える授業を計画する。

授業においては、初めにテーマに対して「それはどういうこと？」と投げかけて、いくつかの発問を経て、最後に考えがどう変容したかを見ていく。

- ②地域（保護者）と連携し、行事やボランティアへの積極的な参加を促したり、ゲストティーチャーを招聘したりする。
- ③各教科で作成した別葉をもとに、道徳との関連を重視して授業を行う。

(2) 研究内容

- ①道徳的価値の理解を望ましい方向に変容させる議論（中心課題）の設定
- ②多面的・多角的に考える資料選定（提示方法）と発問の工夫
- ③主体的・能動的な授業参加と積極的な議論（発言）を成立させる場面設定
- ④道徳的価値の変容を見取る評価の内容とその生かし方
- ⑤道徳の授業を中心とした教育活動について、地域・保護者への発信と評価の生かし方

7 1年次の成果と課題

【中心発問】

中心発問を何にするかで、手立てが変わる。授業者が、教材で何を考えさせたいかということにより、「考えを深めさせる補助的発問」も変わってくるというご指導をいただいた。今回の授業では「思いやりには多様な見方・考え方があることに気付く」ことがねらいであるため、「隠れたという『私』の行動についてあなたはどのように思いますか」という中心発問にした。「どう思うか」と問われているのに対し、「賛成反対」ではなく理由を書いている生徒がいたので、何を書かせたいのか、投げかけ方や問い方の文言を教師側が十分に吟味しなければならない。

【補助発問】

生徒の考えを深める重層的な補助発問にするためには、場面発問とテーマ発問の間をねらう。補助発問はたくさん準備しておき、生徒の反応を見て投げかけるものを選択するという教師の技術も必要である。

【ICT等の活用】

班での意見交流はホワイトボードを使用した。個人の意見は黒字で書き、その意見に対しての質問の返答は赤字で書くというスムーズな流れができていた。良いつぶやきや返しが活発にあった。そのホワイトボードを撮影し、ロイロノートで全体共有をした。自分と違う考えに線を引くことで、「思いやり」について多様な見方に触れていた。ロイロノートを使うと一気に全体の意見が共有できる。目的に応じて道具を使い分けることで生徒を深い学びに誘うことができる。

【生徒の変容】

授業者が導入で「今考えた、思いやりについての考えが授業後に深まるといいですね。」と伝えて展開に入ったが、授業のまとめで「あなたが考える思いやり、優しさとはどのようなことか」を書く欄には、大勢の生徒が枠いっぱい記述していたのがとても印象的であった。授業者のねらいのとおり、生徒がいろいろな「思いやり」があることに気づき、考えた授業だった。

8 運営の成果と課題

- ・会場校責任者により来年の発表当日までの構想ができていたので、そのとおりに進めてきた。
- ・第1回の授業では協議会が行えず、各校が感想をメールで送り、川東中がまとめて返信してくれた。視点ごとに意見をまとめてあり、またたくさんの方の考え方も共有できた。
- ・第2回の授業は、事前に同じ指導案で、郡市内各校で授業を行った。導入を変えたり、ロイロノートの使い方を替えたりして、いろいろな手立ての有効性を試すことができた。
- ・道徳部員が集まって指導案を作成することができず、川東中の実践に乗る形になってしまった。しかし、同じ指導案での自分の授業と比較し、発問の文言の重要さや授業の流れ、などについて考えを深めることができた。
- ・Zoomでの授業等への準備が大きな課題である。

1 部会名 道 徳

2 郡市名 五泉市 3 会場校 五泉市立川東中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	五泉市立川東中学校 校長	治田 博樹
(2) 研究推進責任者	五泉市立五泉中学校 教諭	後藤 陽子
(3) 会場校責任者	五泉市立川東中学校 教諭	西方 貴子
(4) 県・郡市指導主事	下越教育事務所 指導主事	田中 一史
(5) 研究推進委員（授業者） （授業者） （授業者）	五泉市立川東中学校 教諭	田中 健昭
	五泉市立川東中学校 教諭	皆川 将太
	五泉市立川東中学校 教諭	石田すみれ
	五泉市立村松桜中学校 教諭	捧 桃子
	五泉市立五泉北中学校 教諭	遠山 朗
	五泉市立五泉中学校 教諭	佐藤真理子
	阿賀町立三川中学校 教諭	高橋 延之
	阿賀町立阿賀津川中学校 教諭	早川あゆみ

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	4月22日 村松桜中学校	24	郡市中教研総会道徳部会 川東中西方教諭より研究の概要を説明，共有。
2	6月23日 川東中学校	7	第3学年授業「二通の手紙」 授業者：田中健昭教諭 ・長い資料は状況整理に時間がかかる。時間配分 ・補助発問は，状況整理や本音の引き出しにつながるの，揺さぶりをかけてじっくり考えさせるために必要である。 ・普段の授業においても，考えの補充・深化・修正・転換となるように振り返りの時間をたっぷりとるようにしているため，生徒はじっくりと自分に向き合って振り返りを記述していた。
3	9月		指導案検討 社会情勢によりメールでのやりとりに変更した。「父の言葉」の指導案を各校で実践し，課題や反省等を川東中に返信し，指導案を完成させた。
4	11月24日 川東中学校	13	第1学年授業「父の言葉」 授業者：皆川将太教諭 指導者：下越教育事務所 田中一史指導主事 ・授業者の落ち着いた語り口がしっとりした雰囲気醸成していた。 ・補助発問を有効に使い，生徒を深い学びに誘うことが大事である。 ・ホワイトボードの使い方が定着していた。ボードを使うと学びが深まる。また、ロイロノートを使うと学びが一気に広がる。 ・生徒の振り返りの記述の量が多く、「思いやり」に対して考えを深めている様子が見てとれた。
5	2月2日 川東中学校	(7)	第2学年授業「未定」 授業者：石田すみれ教諭 今年度の研究のまとめ

令和3年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書 (1年次)

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 竹田 祉薫
(学校名: 長岡市立大島中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 中越地区美術部会
- 2 郡市名 長岡・三島 3 会場校 長岡市立東中学校
- 4 研究主題

ICTを活用した主体的な表現活動の工夫 ～自画像制作を通して～

5 主題設定の理由

様々な研修を重ねて授業を構想し実践してきたが、まだ学習課題に対して持っている力を引き出せず、間違いや失敗を恐れるといった自己肯定感の低い生徒が多い。県中教研美術部会の重点方針や学び合い10の視点に示されている主体的に授業に取り組み、意欲的に自己表現していく姿を目指し、ICT機器を取り入れることは、学習意欲や学習効果を引き出せると考えられる。そこで、生徒一人一人に配布されているタブレット(クロムブック)を利用することにした。クロムブックを活用することで、幅広い視野で作品について捉える生徒が増え、発想は大きく膨み、意見交換の場面では美術室から校外へ繋がることから、多様な見方や考え方が身に付くのではないかと期待は大きい。しかしながら、どの学校もクロムブックを活用した授業実践が少ない。

本研究の題材は自画像である。自己と向き合う題材は、思春期である中学生にとって苦手とする生徒が多いと考えられる。自信をもって表現することが難しい題材であるがゆえに、クロムブックの効果的な活用を探りながら研究を推進していくことにした。

6 研究の方法と内容

生徒の主体的な活動を引き出すための手立てとして、導入の鑑賞活動でクロムブックを活用する。多様なアプリケーションを目的に合わせて使い分け、普段は発言に消極的な生徒の意見を引き出すとともに、個の見方や感じ方を瞬時に一覧にしてまとめ、芸術的価値やよさを共有しやすくすることで、授業への主体的な取組意識を高め、学習内容の理解を深める。

具体的には、まず1時間目にジェームズ・アンソール作「仮面の中の自画像」についてグループ内で意見を交換し全体に発表。その際に、ジャムボードの付箋機能を使い、生徒全員の意見が一目で分かるようにし、自画像を鑑賞する際の見方や着目する視点を共有する。2時間目は、20枚の多様な表現の自画像作品から気になった作品について個人で読み解きし、ムーブノートを使って批評し合う。

これらの活動を通し、自画像はただ顔を似せて描くのではなく、自分の気持ちや考え、人生そのものなどを表現していることを理解するとともに、生徒自身の自画像制作でも多様で自由な表現をして良いという解放感や表現欲求の高まりを期待する。その際に、クロムブックを活用することにより、生徒の主体性に変容があるか検証したい。

7 1年次の成果と課題

授業者の「自分とは何かを表現させる授業にしたい」という思いから、題材は自画像とした。絵画の方向性や完成のイメージを共有し、ジャムボード、ムーブノート、オクリンクの活用場面を具体的に設定することにした。プレ授業では、自画像を表現する導入として鑑賞活動を行った。授業では、座ったままでクロムブックの操作が続くため、動きの少ない静かな授業になってしまった。今後はクロムブックを使用しないで動きが出るような活動を取り入れていきたい。また鑑賞では、好みの作品を選ぶことが中心にならないように、作者の生きざまや表現意図を読み解きながら、学習指導要領の〔共通事項〕に示されている形や色にも注目できるような工夫を話し合いたい。

8 運営の成果と課題

月1回程度の研究推進委員会を開催した。前副部長からのアドバイスもあり、役割分担を明確にしてスムーズに運営ができた。今後は長岡市内の美術科担当者に、クロムブックを活用した授業実践についてアンケートを実施し、研究に役立つ資料としてとりまとめる。また発表に向けて、会場をイメージしながら購入する品のリストを整理し備えていきたい。

資 料

- 1 部会名 中越地区美術部会
- 2 郡市名 長岡・三島 3 会場校 長岡市立東中学校
- 4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	阿賀町立阿賀津川中学校 校長	稲生 一徳
(2) 研究推進責任者	長岡市立大島中学校 副部長	竹田 祉薫
(3) 会場校責任者	長岡市立東中学校 校長	高橋 和久
(4) 県・郡市指導主事	新潟県義務教育課 指導主事	清水 康一
(5) 研究推進委員（授業者）	長岡市立東中学校 教諭（授業者）	岡地 大輔
	長岡市立南中学校 教諭	岡本 真梨
	長岡市立東北中学校 教諭	鈴木 史那子
	長岡市立江陽中学校 教諭	佐藤 隆幸
	長岡市立関原中学校 教諭	永井 愛
	新潟大学附属長岡中学校 教諭	池田 義広

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	6/23(水) 各校からの ZOOM に よるオンライン参加	7	自己紹介や ZOOM の使い方を確認後、目指す生徒の姿を共有し、解決の方向性を探った。生徒の実態として、持っている力を引き出せず失敗を恐れ表現の幅が狭い。主体的に自信をもって取り組む姿を目指し、ICT 機器を活用することは学習意欲を掻き立て、意見交換の範囲が校外へ広がり、繋がることのできるのではないかと、という考えを共有した。
2	7/29(木) 長岡市立東中学校	7	前副部長より研究のながれについて説明を受けた後、単元や題材について検討した。15 部会の重点方針と授業と授業スタンダード 10 より手立てを確認する。10 月から自画像の授業に合わせて、15 歳の自分とは何かを表現するためにクロムブックを活用し構想の手がかりにできないかを話し合った。
3	8/19 長岡市立東中学校	6	クロムブックを活用した構想や、完成作品のイメージや用紙サイズ、表現方法などを検討した。またプレ授業に向けて、イメージマップよりも、言語を可視化しよりイメージを明確化できる手段（アプリ）を話し合った。オクリンクの活用方法やクロムブック内の活用できそうなアプリの情報交換などをした。
4	9/30（木） 長岡市立東中学校	7	プレ授業に向けて、オクリンクでのスライド制作や評価、発表方法について検討した。また、クロムブックを活用したことで、効果的な変容がみられる場面はどこかを検討し、学び合い 10 の③の達成に繋がることを確認した。
5	10/29（金） 長岡市立東中学校	5	選んだ画像をスクラップにして発表の場面を考えていたが、オクリンクでは時間がかかるなど課題が明らかになった。全体の流れについて話し合い、ジャムボードやムーブノートを検討した。また、鑑賞場面の提示資料となる自画像について検討し合った。総合の時間の「生き方」について考える授業と関連させた自画像の授業を構想していくことを確認した。
6	11/16（火） 長岡市立東中学校	5	19 日に行うプレ授業の流れを確認した。鑑賞作品 24 点の使い方や授業者の思い、中心になる課題について話し合った。研究推進委員全員のクロムブックで、ジャムボードやムーブノートを実際に試行し、アプリではできないことや難しい部分を共有した。また指導主事から、教育センターでも取り上げられているピクトグラムを紹介され、授業のイメージを重ねながら確認した。
6	11/19(金) 長岡市立東中学校	8	プレ授業を行った。本時のねらいは「自分の気持ちや考え、人生そのものを絵で表現することが自画像である、ということを理解し、制作で構想が深まるような視点をつかむ。」とした。授業後の検討会では、内容の整理や問題点を共有し、アイデアを出し合った。
7	12/20(月) 長岡市立東中学校	7	今年度の概要報告書より、これからの課題を話し合った。また、長岡市内の美術を担当している先生方のクロムブックに関するアンケート結果から見えてきた問題点を確認した。

授業者以外の研究推進委員が研究主題に沿って取り組んだこと

- ・竹田 1年オノマトペ 構想やアイデアスケッチの場面で、ジャムボード、動画、ムーブノートを活用して、学習効果を探った。
- ・岡本 2年ピクトグラム 3年ポスター スライド3～4枚で色・形・技法について伝えあい、班で共有し発表した。
- ・永井 1年オノマトペ、ピクトグラム 写真で作品提出。鑑賞で活用した。
- ・佐藤 2年粘土造形 動画撮影し、体の関節の動きに注目しながらアイデアスケッチした。
- ・鈴木 3年自画像 ポーズを写真に撮って活用したり、印刷した画像を用いてコラージュしたりと表現の幅を広げた。
- ・池田 2年コマ撮りアニメ制作 クロムブックを使用し、データーとして作品を提出したりクラス内で鑑賞したりした。

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 野原 千絵
(学校名: 村上市立村上第一中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 美術部会
- 2 郡市名 村上・岩船 3 会場校 村上市立村上東中学校
- 4 研究主題

主体的に美術と関わり、美術作品の自分なりの見方や感じ方を深める指導の工夫

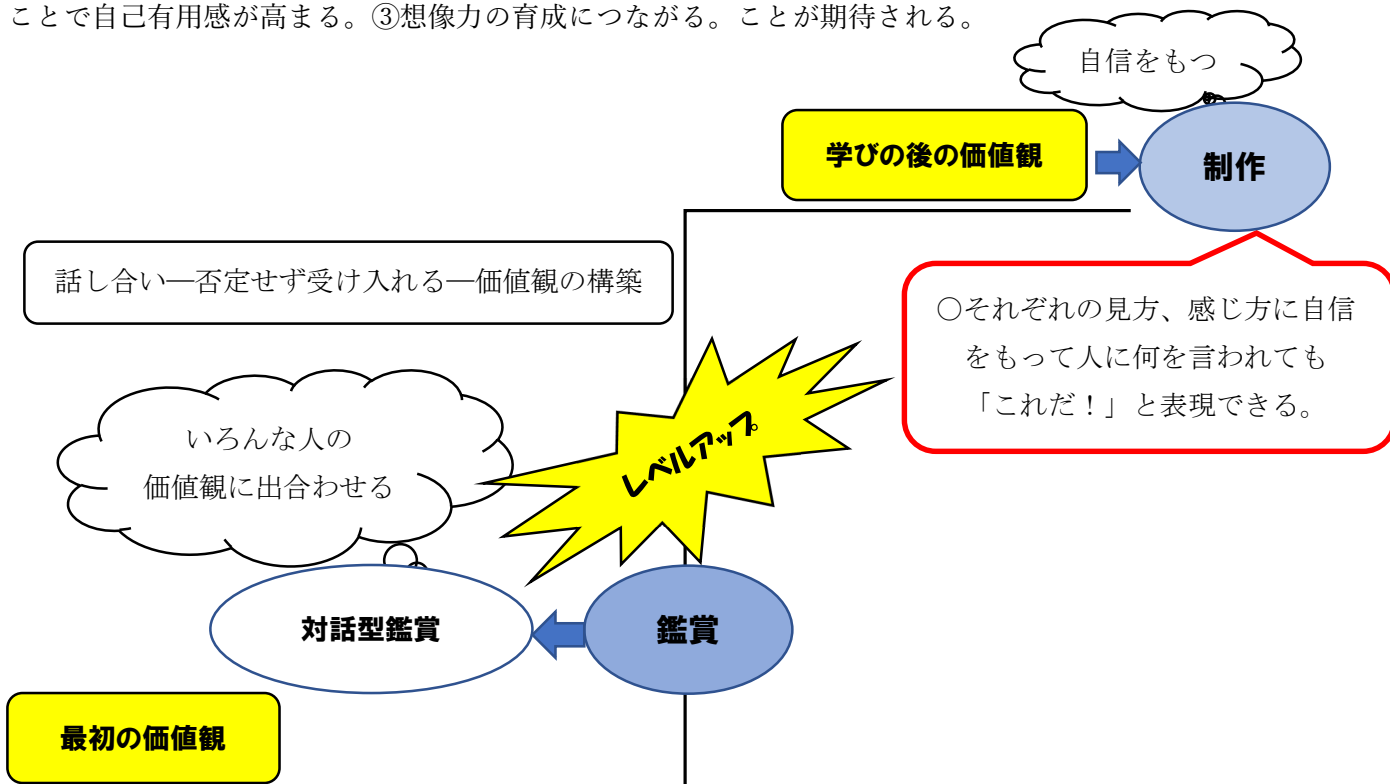
5 主題設定の理由

中学校美術科学習指導要領解説美術編に「造形的な良さや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。」が目標(2)として掲げられている。

当地区の美術科の課題として、教師の求めている「正解」を探したがったり、深く考えずに安易な表現で終わらせてしまったり、鑑賞においても限られた視点だけで見てしまったりする生徒が多いことが挙げられる。そこで、当郡市中教研では、それぞれの見方、感じ方に自信をもって人に何を言われても「これだ!」と表現できる生徒の育成を目指し、上記の研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

当郡市中教研では、3年前から美術館学芸員を講師に招き対話型鑑賞について研修を行い、見識を深めてきた。対話型鑑賞は、作品を見る人同士の対話を通して作品の理解を深め、鑑賞者が作品のよさや美しさ等の価値を実感しつくり出す鑑賞である。この鑑賞の活動を手立てとすることにより①自分とは違う見方や感じ方と出会うことで視野が広がる。②他者を受け入れるとともに自分を受け入れてもらうことで自己有用感が高まる。③想像力の育成につながる。ことが期待される。



鑑賞と作品制作は切り離せるものではなく、相互の関連を図りながら指導していくことが重要であることから、造形の要素に着目した〔共通事項〕を踏まえた循環した学びになると考える。鑑賞の方法、または制作の導入として対話型鑑賞を行うことで、美術作品の自分なりの見方や感じ方を深めるとともに、自分自身の作品制作においても自分の見方、感じ方に自信をもって主体的に表現する生徒の育成につなげる。

7 1年次の成果と課題

○成果

- ・美術館（学芸員）との繋がりをつくることができた。
- ・対話型鑑賞について学ぶことができた。またその活動を手立てとすることにより、芸術科の価値につながるものを見方を育むことができた。
- ・プレ授業での鑑賞を、その後の制作に生かすことができた。対話型鑑賞が鑑賞と表現の相互に有効な手立ての一つとなり得ることを検証できた。
- ・対話型鑑賞を通して、集団づくりや生徒の仲間理解に寄与することができた。
- ・ICT活用により、活動の選択肢が増えた。

●課題

- ・対話が弾み、深まるような作品選び。
- ・臨場感のある作品提示・・・絵を見て考えやすい大きさ、明るさ、方向はどのようなものか。本物に触れさせるのが一番良いが、不可能な場合、媒体はコピー用紙、電子黒板、タブレットのどれが相応しいか。また、ICTを使う場合の画素数の問題、著作権の問題にどう対応するか。
- ・効果的なICTの使い方・・・作品鑑賞の媒体として使う、意見の集約として使う、発表に使う、自己評価や振り返りに使う、など。
- ・対話型鑑賞の展開・・・発問、発問のタイミング、意見の引き出し方。
- ・振り返り、まとめの仕方・・・概念に捉われないもの見方こそが芸術の価値であることに気付かせるような収束の仕方。
- ・〔共通事項〕に基づいた発言や語り合い等の交流活動の経験。

8 運営の成果と課題

○成果

- ・県立近代美術館の研修に参加できた。
- ・プレ授業で県立近代美術館学芸員にゲストティーチャーとして参加してもらい、その後の協議会で助言をいただいた。
- ・対話型鑑賞について共通理解を図ることができた。

●課題

- ・プレ授業の授業者に負担をかけてしまった。授業案の検討会等を研究推進委員会に位置付け、計画的に実施していく。
- ・2年次研究に向けて、研究推進委員の役割分担を明確にした運営ができるように準備を進める。

1 部会名 下越・美術

2 郡市名 村上・岩船 3 会場校 村上市立村上東中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	胎内市立中条中学校 ・ 校長	丹後 直子
(2) 研究推進責任者	村上市立村上第一中学校 ・ 教諭	野原 千絵
(3) 会場校責任者(授業者)	村上市立村上東中学校 ・ 教諭	杉崎 浩子
(4) 郡市中教研顧問	村上市立神林中学校 ・ 校長	宮川佳代子
(5) 郡市指導主事	村上市教育委員会 ・ 指導主事	高橋 健
(6) 研究推進委員	関川村立関川中学校 ・ 教諭	大堀 千歌
	村上市立荒川中学校 ・ 教諭	相馬 貴子
	村上市立山北中学校 ・ 教諭	塚野 颯

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	6/24(木)／神林中学校	7	<ul style="list-style-type: none"> ・美術科の授業の現状、課題の共有。目指す深い学びの姿、解決策の確認。(全体での意見交換) ・深い学びを実現する上で大切なポイントの検討。(全体での意見交換)
2	7/26(月)／ 新潟県立近代美術館	4	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校×NIIGATA アートリンク 鑑賞と美術館—活用のための研修会」参加 ・美術館学芸員への授業参加の交渉
3	8/4(水)／神林中学校	7	<ul style="list-style-type: none"> ・目指す深い学びの姿の実現のための有効な手立ての検討。(FT 協議) ・研究主題についての検討。 ・プレ授業の単元構想シートの検討と改善
4	10/4(月)／関川中学校	8	<p>指定研究1年次プレ授業「対話型鑑賞」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレ授業者による授業概要説明と質疑応答 ・県立近代美術館学芸員による「対話型鑑賞」の概要説明 ・手立ての有効性の検証 ・研究授業後 FT による協議会 ・指導者 村上市教育委員会学校教育課指導主事 高橋 健 様 胎内市立中条中学校校長 丹後 直子 様
5	12/6(月)／神林中学校	7	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の成果と課題協議 (KPT による) ・指定研究2年目に向けて授業内容の見直しと方向性の確認

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 樋口 雅樹
(学校名: 柏崎市立第一中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 技術・家庭
- 2 郡市名 柏崎・刈羽 3 会場校 柏崎市立鏡が沖中学校

4 研究主題

持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する生徒の育成
～よりよい生活の実現に向かう力の育成～

5 主題設定の理由

2019年度研究では、研究主題「持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する生徒の育成」の基、『技術・家庭科の見方・考え方』を働かせながら、最適解を導き出すことができる生徒の育成に迫った。試行錯誤を繰り返すことで深い学びを促進したり、生徒に身近な題材を取り扱うことで既習事項をこれまでと異なる視点で捉えなおしたりする成果が得られた。一方で、使用者の立場や、使用者の購入後の行動を検討する機会が少なく、課題として残った。

そこで、本研究では前研究の成果と課題を受け、製品使用者の使用場面や用途の検討を進める。具体的には、「持続可能な社会」を「あらゆる年齢の人々が住み続けられる社会」に着目し、目指す生徒の実現に迫る。なお、「持続可能な社会」については、持続可能な開発目標 (SDGs) を基本概念として授業実践に取り組む。

6 研究の方法と内容

本研究では、生徒にとって身近な「住まい」を探求する。その際に、技術・家庭両分野から「住まい」をとらえ直し、「よりよい生活の実現に向かう力」、すなわち学びを深めることをねらう。

「よりよい生活の実現に向かう力」を、家庭分野では「超高齢社会を迎える我が国において、高齢者とともに生活を営む力」、技術分野では「人口減少社会を迎える我が国において、家族生活を支える計測・制御のプログラミングによって解決する力」と定義し、題材開発に着手する。研究1年次では、教材開発や地域の教育資源に主眼を置き、研究開発に取り組む。

技術・家庭科の学習を限られた時数の中で効率よく教科運営するためには、異なる両分野の学習内容を有機的に連携させなければならない。特に3年生は年間35時間という制限あり、両分野の連携がなされることが、学びを深めることに直結すると考える。

以下に研究の手だて (ステップ) を示す。

- ・ **ステップ1) 共通題材の設定**：両分野の学習内容が合理的に取り扱われるよう、共通題材を設定する。本研究では、「住居」を共通題材として取り上げ、「高齢者が安心して暮らせる住まい」を探求する。(学び合い10「②題材の目標・指導計画」)
- ・ **ステップ2) 異なる学習内容の設定**：共通題材の基、多面的多角的な視点での話し合いが行われるよう、両分野で異なる学習内容を取り扱う。技術分野では「計測制御」、家庭分野では「家族生活」を「住生活」と関連させた学習内容を取り上げ、研究主題に迫る。(学び合い10「⑤関わり合う場・協力する場」)
- ・ **ステップ3) 実生活を振り返る場の設定**：共通題材での学びが深まるよう、実生活を振り返る場面では、模型製作の場面や実証検証の場面を設定する。その際に ICT 機器を活用し、使用者

の視点や購入後の行動などをより具体的にイメージすることをねらう。(学び合い10「⑦実践的・体験的な活動」)

7 1年次の成果と課題

(1) 成果

- ・家庭分野では、高齢者住宅の間取りを題材とした。新潟工科大学や地域の福祉関連機関と連携し、実際の間取りを現場の方から聞いたり、生徒が設計した間取りを設計士の方から評価を頂いたりする場面を設けることができた。これらの地域の教育資源の有効活用は、生徒の学びを深めることに必要不可欠であり、今後も継続して取り組みたい。
- ・技術分野では、計測・制御学習の題材開発を行うために「micro-bit (マイクロビット)」を教材として、高齢者が住みやすいスマートホームの設計を行った。アルゴリズムや各種アクチュエータの働きを基礎的な学習内容とし、発展的な内容としてスマートホームの模型作成に取り組んだ。
- ・総合的な学習の時間と連携することで、教科の学びが深まった。総合的な学習の時間で、ブライندウォークや高齢者の視野を体験する活動などの福祉体験に取り組んだ。これらの活動により、高齢者の側に立った、ものづくりの学習を行うことができた。

(2) 課題

- ・本研究では、2021年度は教材開発と地域資源の有効活用を主眼に取り組んだ。今後は、実施学年を含んだ題材計画の再提案と、SDG'sの基礎概念を含んだ評価規準の練り直しが必要である。

8 運営の成果と課題

- ・市内の技術・家庭科教職員数は少なく、他教科の様な研究への取組は難しい。特に公開授業の運営に関しては、授業準備だけでなく、会場準備の職員数を考慮すると、従来の公開授業のやり方は実現困難である。今後は今年度同様に、ICT機器を利用したオンライン型の公開授業が現実的である。
- ・中教研の目的である、一市内の教職員の資質向上を目的とした「委員同士の授業の見せあい」は、市内4名の研究委員での実現は限界がある。公開授業だけで精一杯である。今年度は、公開校である鏡が沖中学校1校のみの公開となった。研究を通して得られる成果はあるものの、授業者への負担は大きく、技術分野・家庭分野の両分野を公開するならば、教科の教職員数を考慮した、市町村の範囲を再定義した事業の実施を切に望む。

※1 各地区中教研事務局と当該教科・領域の15部会全県部長へ提出する(メール: 〆切 1/11)

※2 資料の県・郡市指導主事の行は指導者が県・郡市指導主事の場合詰める。前副部長はこの表には載せない。

※3 研究活動の概要に掲載される。提出の際は、注意書きや※1～※3を削除して提出する。

資 料

1 部会名 技術・家庭科

2 郡市名 柏崎・刈羽 3 会場校 柏崎市立鏡が沖中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学 ・ 教授	東原 貴志
(2) 研究推進責任者	柏崎市立第一中学校 ・ 教諭	樋口 雅樹
(3) 会場校責任者	柏崎市立鏡が沖中学校 ・ 教諭	前澤 侑
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員（授業者）	柏崎市立鏡が沖中学校 ・ 教諭	長谷川 智美
研究推進委員（授業者）	柏崎市立鏡が沖中学校 ・ 教諭	前澤 侑
研究推進委員	柏崎市立第一中学校 ・ 教諭	布施 歩

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	5月27日／鏡が沖	4	研究協議
2	8月20日／鏡が沖	4	研究協議
3	10月3日／鏡が沖	4	全体論・指導案検討
4	10月20日／鏡が沖	4	指導案検討
5	11月5日／鏡が沖	4	会場打合せ
6	11月17日／鏡が沖	4	会場準備
7	11月18日／鏡が沖	5	公開当日
8	1月6日／鏡が沖	4	年度のまとめ
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③ 指定研究 経過の概要報告書

令和3年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書 (1年次)

新潟県中学校教育研究会会長 様

15部会全県部長 山田 聡

報告者氏名 寺田 敬史
(学校名: 新潟市立山潟中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 技術・家庭

2 郡市名 新潟市 3 会場校 技術：新潟市立新津第五中学校 家庭：新潟市立山の下中学校

4 研究主題

生活を工夫し、創造しようとする生徒の育成
～実践的・体験的な活動を通して学び合う授業～

5 主題設定の理由

“技術”や“家庭生活”は、社会や環境と相互に影響し合い、時代とともに進歩、変容していくものである。そのような時代の変化の中でも、より豊かに生活していくことができる子どもに育てていくことが私たちの教科に求められている。

将来にわたって変化し続ける社会に主体的に対応していくために、その時代の中で、生活を営む上で生じる課題に対して、自らの生活を工夫、創造しながら、自分なりに判断して課題を解決できる力が必要である。そこで本主題を設定し、研究を進めていくこととする。

6 研究の方法と内容

技術分野と家庭分野がそれぞれに研究主題に基づいて授業公開を行う。

(1)技術分野「計測・制御のシステムを栽培に生かそう」2年

- ・既習事項である植物の栽培と計測・制御を関連させ課題設定を行う
- ・粘り強く取り組む学習過程を計画する
- ・iPadを活用したグループ学習を取り入れ、課題解決に向かう

既習事項である植物の栽培とプログラミング学習用の教材「micro:bit」を融合させて学習を行った。生徒は、リーフレタスの栽培の経験から、照度や温度の管理の必要性とその手間を実感していた。その中でmicro:bitに付いている明るさセンサを活用できないか、活用するためにはどうしたらよいかをグループで協力しながら複数の計測値から関係性を導き、明るさセンサを植物の栽培に活用する可能性を判断することができた。

(2)家庭分野「住居の機能と安全な住まいを考えよう」3年

- ・防災・減災の意識が高まる情勢と関連させ課題設定を行う
- ・地域の安全マップの確認や地域に発信するレポートなどを盛り込んだ学習過程を工夫する
- ・iPadを活用したグループ学習を取り入れ、課題解決を行う

近年、地域の防災・減災意識が高くなっていることに着目し、実生活に生かしていくための題材構成として、「住居の機能と安全な住まい方」とした。そして、自分の住まいや地域の防災・減災対策を見直し、課題を見付け、解決していくための手立てを考えていく主体的な学習にすることができた。

7 1年次の成果と課題

(1) 技術分野

タブレットの導入に伴い、プログラミング学習の教材としてmicro:bitが導入された。新たな教材のため不慣れな部分はあったが、身近な生活と関連づけながらプログラミング学習を行い、操作を習熟させることができた。課題解決に向かう過程から生物育成と関連させて取り組む学習にすることができた。リーフレタスの栽培経験を生かし、照度計と明るさセンサの関連を見いだすためにグループで調査活動を行った。既習経験のある課題であることから、グループで協力して主体的に取り組む姿が見られた。また、他のアプリも活用し、調査結果を視覚化するなどiPadを活用し理解を深めさせることができた。

生物育成と情報の融合による研究を進めていることから、教材であるmicro:bitの活用方法について教師の習熟を進めながら、さらに生物育成と融合させた授業改善を進めていきたい。また、指導案内で課題とまとめにズレがあったことに対する改善や他者の意見と比較、検討しながら学ぶためのシンキングツールの可能性も探って行きたい。

(2) 家庭分野

自身の生活や地域の特色に特化した題材・課題設定であったため、生徒の関心は高く実生活に生かすべく意欲的に取り組んでいた。また、修学旅行や防災学習と学びの横断を図ることができた。対話の場の設定では、シンキングツールを活用したことで内容が明確化し、話し合いが活性化した。また、紙面で思考を視覚化したことで、他の考えと自分の考えを比較でき、自らの解決策を考える場において有効であった。

授業参観やプレ授業を受け、課題を解決するための工夫点をまとめる場所は、個でなく、他者の対話を付け加えることで自分自身の見直しができ、学びが深まった。そこで次年度は、さらに効果的なまとめ方を検討していく。また、(学習の成果の)地域への発信は行政との連携が必要不可欠である。よって、より一層地域コーディネーターや行政と連携を深め、最適な方法で地域へ発信していきたい。

8 運営の成果と課題

技術、家庭それぞれの分野で研究推進委員を設定し、分野ごとに目指す姿に向けて研究を進めることができた。

1年目は感染症予防を加味し、授業公開を動画視聴にするとともに、オンラインによる協議会を実施した。2年ぶりに授業を見たり、意見を交換することができ、研修の場を設けることができたことは良かった。しかし、オンラインによる会議の難しさから教師の学び合いとするには不十分な議論の場となってしまった。運営側のオンラインによる研修会進行技能の向上に努めながら、部員が参集するハイブリッド形式の研修会を模索していきたい。

資 料

1 部会名 技術・家庭

2 郡市名 新潟市 3 会場校 技術：新潟市立新津第五中学校 家庭：新潟市立山の下中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	技術：新潟市立関屋中学校 校長 家庭：新潟市立光晴中学校 校長	山田 聡 逸見 東子
(2) 研究推進責任者	新潟市山潟中学校 教諭	寺田 敬史
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第五中学校 教諭 新潟市立山の下中学校 教諭	土屋 稜太 赤塚 仁美
(4) 研究推進委員（授業者）	新潟市立葛塚中学校 教諭	鶴巻 政義
	新潟市立内野中学校 教諭	芳賀志津子
	新潟市立関屋中学校 教諭	金谷 佐保
	新潟市立亀田中学校 主幹教諭	上野 一志
	新潟市立鳥屋野中学校 教諭	渡邊希美恵
	新潟市立新津第五中学校 教諭	土屋 稜太
	新潟市立白根北中学校 教諭	須貝 綾子
	新潟市立松浜中学校 教諭	坪井 暁子
	新潟市立山の下中学校 教諭	赤塚 仁美
	新潟市立山の下中学校 教諭	村山喜代志
	新潟市立石山中学校 教諭	佐山 葵
	新潟市立松浜中学校 教諭	古澤 雅之
	新潟市立新津第二中学校 主幹教諭	板垣 淳二
	新潟市立味方中学校 教諭	神田 学
	新潟市立石山中学校 教諭	吉田 耐子
	新潟市立新津第二中学校 教諭	高柳 明理
新潟市立亀田中学校 教諭	齊藤 敦子	
新潟市立鳥屋野中学校 教諭	西埜 雅美	

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	5月6日 光晴中	16	研究主題の設定、今後の研究の進め方の確認
2	5月27日 山潟中	9	技術分野 授業検討
3	6月17日 松浜中	10	家庭分野 授業検討
4	7月1日 山潟中	7	技術分野 授業検討
5	7月8日 亀田中	11	家庭分野 授業検討
6	8月26日 山潟中	21	授業検討 一斉研運営検討
7	10月26日 山の下中	4	家庭分野 模擬授業（山の下中 赤塚仁美）
8	10月28日 山潟中	21	一斉研運営検討
9	11月4日 Z o o m	技43 家33	公開授業 検討会

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

様式③ 指定研究 経過の概要報告書

令和3年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書 (1年次)

新潟県中学校教育研究会会長 様

1 5 部会全県部長 _____ 佐藤 裕之

報告者氏名 _____ 山本 明子
(学校名: _____ 上越市立牧中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 _____ 特別活動

2 郡市名 _____ 上越市 3 会場校 _____ 上越市立牧中学校

4 研究主題

個々の生徒の自己実現に向けた主体的な実践活動

5 主題設定の理由

学習指導要領の特別活動の目標には、「集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。」(学びに向かう力、人間性)とある。また、3つの視点のうち「自己実現」について、そのために必要な資質・能力は、「自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれるものと考えられる。」とある。小規模校である本校の生徒は、素直で真面目な反面、受け身であったり、人間関係が固定化されていたりという課題がある。また、自分自身や将来についても、「よく分からない」「自信がない」といった生徒が多い。そこで、本研究ではキャリア教育を軸に、自分の生き方を考える実践的な活動を行いたいと考えた。育成を目指す資質・能力としては、例えば、中学校卒業後の進路や社会生活に関する幅広い情報を理解し、自分を見つめ、目指すべき自己の将来像を描くことができるようになることが考えられる。また、そうした過程を通して、生涯にわたって段階的な目標の達成と、自らの社会的・職業的自立に向けて努力しようとする態度を育てることなどが考えられる。生徒が、将来直面する様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会的・職業的に自立していくためには、生徒一人一人が、学ぶこと、働くこと、そして生きることについて考え、それらの結びつきを理解していくことで、多様な他者と協働しながら、自分なりの人生をつくっていく力を育むことが必要であると考え、本研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容

「どんな自分になりたいか」をテーマに様々な活動に取り組んでいきたいと考えている。最終的なゴールとしては、「タイムカプセルに10年後の自分へのメッセージを残そう!」というものを掲げたい。まず、生き方を学ぶため、地域を学ぶために、牧で熱い思いをもって活動し、活躍されている方々のミニ講演会を定期的に開催する。その活動は、リモートでつなげることで範囲が広がる可能性も含めて、地域外で働く様々な職業人の方から学ぶ機会へと発展させたい。卒業生や現役の高校生、大学生から話を聴くことも考えている。また、地域について探究する活動や、職場体験学習を行う総合的な学習の時間や道徳科の授業とも連携しつつ、職業観や将来像を醸成する。学校運営協議会(コ

コミュニティー・スクール)との連携も重要で、講師の紹介や、生徒の話合いへの参加など、協力を仰ぐ場面が多々ある。共に活動する中で、生徒の地域に対する愛着や、地域に貢献したいという気持ちも育まれることを期待している。

特別活動は、学級活動、生徒会活動及び学校行事の各内容から構成されている。生徒がタイムカプセルを意識したとき、各学校行事や生徒会活動において、自分たちで考え、意見を出し合いながらその活動をよりよくしようとする。そして、その過程をポートフォリオとして保存し、10年後にも共有したいと願う。つまり、よりよい活動を目指す上でのモチベーションにもなり得る。また、学級活動をベースとし、自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく力を育むためにも、話合い活動の充実とスキルアップを目指し、自発的、自治的な活動を展開できるようにする。

7 1年次の成果と課題

<成果>

- ・「ようこそ先輩ミニ講演会」を定例として実施することで、自分の生き方を考える機会をもち、個々の将来に対する考えを深められた。
- ・プレ公開授業を実施し、「タイムカプセルで残したいものを考えよう」という課題を設定した。10年後の自分について考える活動と、1年生が2年半後の卒業時にタイムカプセルを残すというゴールを提示されたとき、これからの学校生活をどのように送りたいかを具体的に考える活動を授業の中に設定した。卒業まで見通しをもって、これからの学級活動や学校行事等に取り組んでいく礎を築くことができた。また、自分たちで目標（ゴール）を設定するという意味でも、タイムカプセルに入れたいものやその意義を考えることができた。
- ・授業参観者の感想として、生徒は子どもらしく、素直で言いたいことを言い合える関係だが、自分を中心に考えている面が強い。その1年生が、これからの学びで視野を広げ、どれだけ成長が見られるかが楽しみだというものがあった。

<課題>

- ・話合う際に、ツールとしてタブレットを活用したが、全員で話合っている実感に欠ける点もあった。少人数で役割が固定化されているからこそ、話合いのスキルを身に付けられるような取組を大事にしたい。形態を工夫したり、ペアトークを活用したり、役割を輪番で全員に平等に割り振られるようにしたりする必要がある。
- ・職業観（何を大事に、何のために）と学校生活のリンクを意識する。
- ・「個」→「社会」の課題意識をもたせる。地域との関りや、他の人との関りを大事にする。

8 運営の成果と課題

- ・本年度の研究推進委員会は、感染対策もあり、少人数で行った。指導者として上越教育大学の阿部隆幸教授にご参加いただき、指導上の具体的な改善点、特に学級経営や話合いのスキルについて指摘していただいたことが、大きな学びにつながった。
- ・少人数ではあったが多くの意見をいただき、方向性や大事にしていくべきことを確認、修正することができた。
- ・課題としては、研究推進委員の皆様に参加していただく機会が少なかったことが挙げられ、研究の汎用性の検討が不十分だと感じられる点である。
- ・公開授業の動画を撮影して、教師の学び合いに生かせるようにするべきだった。

資 料

- 1 部会名 特別活動
- 2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立牧中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学教職大学院・教授	阿部 隆幸
(2) 研究推進責任者	上越市立春日中学校・教諭	木花 一則
(3) 会場校責任者	上越市立牧中学校・教頭	佐藤 敦史
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員（授業者）	上越市立牧中学校・教諭	山本 明子
	上越市立牧中学校・校長	米山 宏
	上越市立大潟町中学校・教諭	金井謙太郎
	上越市立清里中学校・教諭	白川 大輔
	上越市立春日中学校・教諭	久保 成毅

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	7月13日／牧中	6	今年度の研究の方向性や目指す生徒の姿の確認
2	7月27日／牧中	5	今年度の研究テーマの決定
3	9月28日／牧中	4	プレ授業までの計画立案
4	11月24日／牧中	6	プレ授業の実施と授業検討、来年度に向けた課題と成果の確認
5			
6			
7			
8			
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 松山 綾子
(学校名: 新潟市立濁川中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 特別活動
- 2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立宮浦中学校

4 研究主題

「よりよい人間関係を育む学年・学級経営の工夫」
～他との関わりを必要とする活動を中心として～

5 主題設定の理由

社会の急激な変化、発展の中で、現在の中学生に身につけてほしい能力は多岐にわたる。そこで、特に特別活動では、生徒の自浄力や自治能力を培う活動や他との関わりを必要とする活動を通して、自己を表現する力、人間関係形成能力、協働性など、社会生活に必要な能力を身につけながら、生徒自身が自分の身につけた力に自信を持てる生徒の育成を目指したい。また、「他との関わり」を持たせながら授業や活動を行っていく上で、生徒相互の理解を深めあい、よりよい人間関係を育てていくことが不可欠である。そのために、人間関係の醸成に努め、個人及び集団に適した援助・指導の手だてを取り入れた授業、活動を継続的、系統的に行っていくことが必要である。さらに研修を進めていくことで、教員自身の研鑽を積む機会としたい。

今年度の宮浦中学校の生徒および学級集団の実態を見ると、運動会などの行事を通して学級や学年の団結力も高まってきた一方、行事がひと段落したことでからかいが混じった関わり方が見られる。生徒たちにとって悪意のあるものではなく、「このくらいいいだろう」という気持ちで遊び半分でおこなっている行為（イジリ）であるが、根底に人権意識を教師側が伝えるのではなく、生徒側から発信することで、自分たちの課題を自分たちで解決しようとする意識が芽生えるのではないかと考えた。

6 研究の方法と内容

① 研究仮説

継続的な話し合い活動を年間を通して重ねていくことで、話し合い活動が活発になり、話し合いのスキルとコミュニケーション能力が育つ。また、生徒会による「イジリ見逃し0」に向けての問題提案を受け、イジリ＝“いじめ”であることを認識させ自分たちの問題として考えさせることで、全校体制であたたかで思いやりあふれる宮浦中学校を自分たちの手で創りあげようとする自主性や自治の力の向上につながる。

② 検証方法

- (ア) 授業構成（問題意識の醸成、意見の多面的多角的な吟味、合意形成）
(イ) 意見を比較・整理するためのICTの活用
(ウ) 資質・能力の評価の工夫と有効性（生徒の見取りとワークシートの工夫）

7 1年次の成果と課題

(成果)

- ・ 代議委員が司会進行を行い、授業がスムーズに行われていた。司会の生徒だけでなく、班長・班員全員が本時の授業内容をきちんと把握しており、話し合う内容からブレることなく、学級全体で学習課題に迫るための活動がなされていた。
- ・ 生徒会からの提案を受け、道徳の授業とも関わらせながら、教科横断的に人権意識や支持的風土の醸成を図り、集団の課題として“どうしたら乗り越えられるか”という課題が共有されていた。
- ・ 年間を通じて話し合い活動を継続的に実践してきたことで、話し合いのスキルの高さが際だっていた。代議委員・班長の進行では、同意を求めたり、提案された意見をつなげるための言葉がけがどの班からも聞こえてきて、活動から合意形成にいたるための過程が見られた。また、代議委員や班長に対しても、うなずきや拍手などのレスポンスがなされており、学級・学校の課題に自分たちで取り組むための話し合い活動としては、意識の高さが感じられた。
- ・ 新潟県中学校教育研究会の今年度の研究主題である「深い学びにいたる学び合う授業」の具現化を目指し構成された本時の授業において、教師の働きかけが生徒を深い学びに導く有効な手立てとなった。班活動の場面で、班長を中心に学習課題「1年5組でイジリ見逃し0を実現するためにどんなことをしていけばよいか。」に迫る話し合いがなされたが、最初の話し合い活動で出てきた各班からの意見は、「注意をするとよい。」「見ている人が注意をする。」といったものであった。この場面で、指導者である中村先生は、道徳の授業を振り返らせ、「注意することは大事だけど、どう？本当にできる？勇気がいるよね。」という働きかけをおこなった。その働きかけによって一気に生徒たちの問題意識が自分事となった。
- ・ ICTの活用では、生徒がよく使いこなしており、短時間で意見の比較・整理を行うことに有効であった。画面配信機能で、生徒一人一人の画面に各班の意見が集約されることは、仲間の意見を短時間で共有でき、考えを深め広げることができる有効なツールであった。

(課題)

- ・ ワークシートの工夫においては、ICTの活用が生徒の話し合い活動において、かなり有効であったため、生徒の活動量が多くなるだけであったように感じる。また、生徒一人一人の考えや考えの変容を見取るためのものにはなっていなかった。最後の振り返りだけでもよかった。
- ・ 最後の振り返りにおいては、振り返る視点を生徒に与えて振り返らせることで、評価につながる見取りができるようにする必要性があった。
- ・ 話し合い活動の終盤において、自分たちには何ができるのか具体的なアクションを考えたところから、「思いやり宣言を考える」という抽象的な活動に移行してしまい、授業の流れとしては、生徒の思考を日常生活の実践に方向付けることに課題が見えた。

(次年度に向けて)

- ・ 話し合いのスキルや話し合いを進めるスキルの仕組みを全県に示せるとよい。
- ・ さまざまな方法がある中で、決定までの過程をどのようにしていくかが見える授業づくり。

8 運営の成果と課題

- ・ ファシリテーションの手法で協議会を行った。建設的な意見が多く、来年度への研究の方向性を見出すことができた話し合いとなった。
- ・ 参観学級を1学級にしぼり、幹事・指導者のみの参観とした。来年度はより多くの参会者から参加していただける機会となるような発表会としたい。

1 部会名 特別活動

2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立宮浦中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立岩室中学校・校長	本多 豊
	新潟市立山潟中学校・校長	貝塚 敦
(2) 研究推進責任者	新潟市立濁川中学校・教諭	松山 綾子
(3) 会場校責任者	新潟市立宮浦中学校・教諭	中村 匡宏
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員（授業者）	新潟市立宮浦中学校・教諭	中村 匡宏
	新潟市立岩室中学校・校長	本多 豊
	新潟市立山潟中学校・校長	貝塚 敦
	新潟市立光晴中学校・教諭	大塚 茉希子
	新潟市立石山中学校・教諭	伊藤 智美
	新潟市立木崎中学校・教諭	三浦 桜子
	新潟市立木戸中学校・教諭	木下 恵一
	新潟市立新津第二中学校・教諭	捧 美智子
	新潟市立小合中学校・教諭	三ヶ月 好

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	7/15（木）濁川中	7	今年度の県指定研究の方向性について/研究主題の決定/プレ授業の方向性提案/二部研修会協議会の持ち方について
2	10/5（火）濁川中		指導者を交えての協議/指導案検討/方向性の確認、今後どのように検証していくかについて検討することを確認
3	11/18（木）宮浦中	10	プレ授業準備/指導案の最終確認
4	11/26（金）宮浦中	11	プレ授業

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 比護 一幸
(学校名: 三条市立下田中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 総合的な学習の時間
2 郡市名 三条市 3 会場校 三条市立本成寺中学校

4 研究主題

学習問題を「自分事」として捉えることのできる防災教育
～自己の生き方に生かすための学習過程の工夫～

5 主題設定の理由

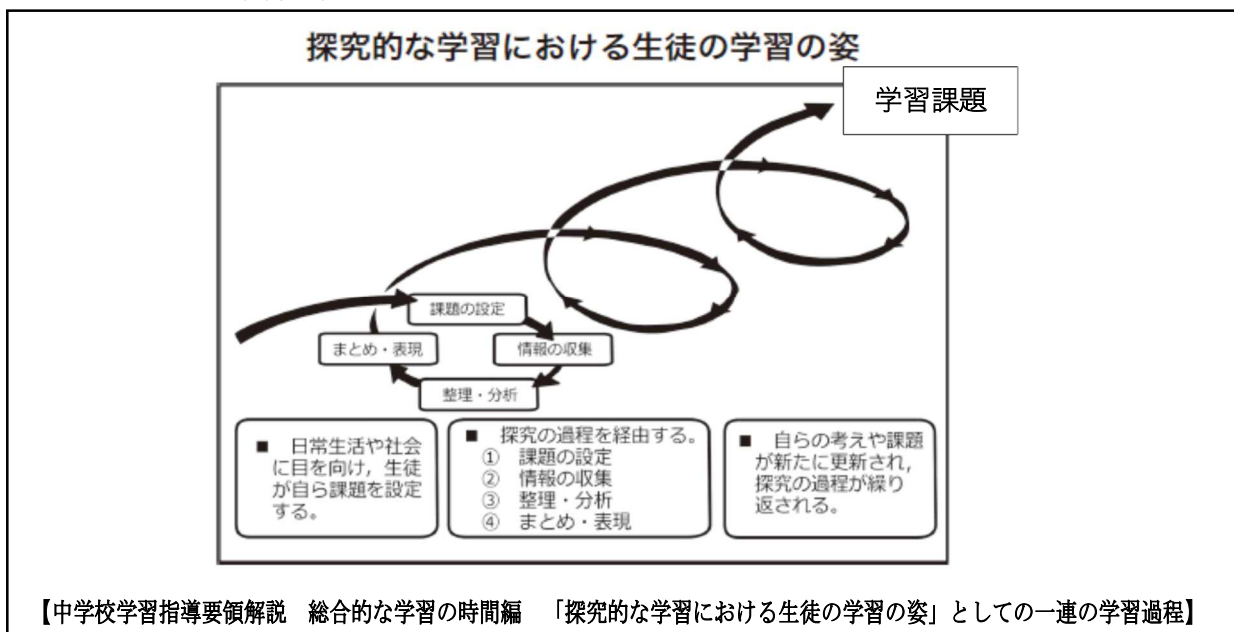
三条市は2004年、2011年と二度の水害を経験している。このことを受け、三条市では防災教育に取り組んでおり、平成26年からは毎年「中学校区」ごとに防災キャンプを行っている。しかし、2004年の水害から17年がたち、さらに現在の小中学生は水害を経験していない年代となり、当時の記憶や印象が風化しがちな印象は否めない。実際、地域の防災訓練へ参加する生徒は少なく、大人の参加率も低くなっているのが現状である。防災教育が、その場だけのものではなく、将来有事の際に正しく行動できることや、地域防災に貢献する態度を育てる、つまり「学習問題を自分事として捉える」「自己の生き方に生かす」ことが重要と考え上記の主題を設定した。

6 研究の方法と内容

研究主題に迫るために以下の4つの工夫を取り入れた学習過程の有効性について本研究を通して明らかにする。

① 教師がねらいをもって提示する学習課題の提示

中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編には「探究的な学習における生徒の学習の姿」としての一連の学習過程が以下のように示されている。



このような学習過程において重要なことは、目指す方向性、ベクトルを明らかにすることであると考える。そのためには、到達点となる単元の目的を明確にし、この目的に生徒が迫るための「学習課

題」を教師がねらいをもち、意図的に提示する必要がある。そうすることで、生徒の目的と教師のねらいを一致させ、見通しをもった学習につながると考える。

②生徒が課題を「自分事」として捉えるための体験的活動の設定

「自分事」とは、当事者意識をもつことであり、追及したい事象を思考力、想像力をはたらかせながらイメージできることである。そのためには、実際に本物に触れ実体験することが一番である。しかし、事象によってはそれが困難な場合もある。そのような場合、体験に近い「疑似体験」を行ったり、事象を実際に経験した人から話を聞いたりする、「体験的活動」を行うことが「自分事」として課題をとらえる上で有効と考える。

③自己選択・自己決定による追及課題（学習問題◎）の設定

探究的な学習における「学習問題◎」は、日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて自ら設定することが重要である。そうすることで、生徒自身が「学習問題◎」を追及することについて価値づけることができ、課題解決のため見通しをもった学習につながる。また、問いが内在化し、学習を進める中で自問自答が生まれ、深い学びへとつながるのではないかと考える。

④発表・交流場面の設定

発表場面を設定し、生徒が身に付けた知識や技能を使って相手に説明することで、学習内容を「つながりのある構造化された知識」へと変容させる。また交流場面の設定は、他者とのやりとりを通して、自分一人では思いつかないような多様な情報を得ることができ、新たな学びへとつながる。これらにより、自らの考えが新たに更新され、探究の過程が繰り返されることにつながる。ひいては、自己の生き方に生かす学びにつながると考える。

7 1年次の成果（○）と課題（●）

- 三条市が進めている小中一貫教育の視点から、中学校区9年間の防災教育に関する学習過程の確認をすることができた。
- 「課題を自分事にする」というキーワードに向けた研究主題を設定し、そのための学習過程を重視していくという点について確認することができた。
- 体験的な活動や地域との関わりを学習過程にどのように位置づけるか。
- 9年間の防災に関わる学習のゴールイメージを明確にする必要性。
- 中教研のための特別な授業ではなく、今後も継続的に進めることができる「課題を自分事」とする学習過程の作成。

8 運営の成果と課題

研究推進委員会でファシリテーションの手法を取り入れ、研究主題や授業構想の検討を行ったことで、意見交換が活発に行われ、研究の方向性が明確になった。今年度は推進委員による実践を行うことができなかった。公開授業の実践を受けて、次年度に向け推進委員が所属校で本研究主題に向けた学習過程を作成し次年度実践を行う。実践例を多く集め検証し、提案していけるよう見通しをもち計画的な運営を行う。

1 部会名 総合的な学習の時間

2 郡市名 三条市

3 会場校 三条市立本成寺中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	長岡震災アーカイブセンターきおくみらい	赤塚 雅之
(2) 研究推進責任者	三条市立下田中学校・教諭	比護 一幸
(3) 会場校責任者	三条市立本成寺中学校・教頭	風間 真寿美
(4) 県・郡市指導主事	三条市教育委員会・指導主事	荒川 高明
(5) 研究推進委員（授業者）	三条市立本成寺中学校・教諭（授業者）	米山 國男
	三条市立本成寺中学校・校長	網 信行
	三条市立本成寺中学校	信賀 悠次
	三条市立本成寺中学校	相馬 宏司
	三条市立栄中学校	峯島 美佐子
	三条市立第一中学校	松永 昌偉
	三条市立西鱈田小学校	佐藤 宜久
	三条市立月岡小学校	霜崎 大和

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容と成果
1	8 / 6 本成寺中学校	10	○「研究の進め方、方向性について検討」 ・ホワイトボードファシリテーションで、研究の方向性について検討した。
2	10 / 12 本成寺中学校	12	○「研究主題の決定、授業構想の検討」 ・前回出た「課題を自分事にする」というキーワードをもとに、研究主題を決定し、主題に向けた授業の構想についてホワイトボードファシリテーションで検討した。
3	10 / 28 本成寺中学校	11	○「1年次公開授業の検討」 ・プレ授業に向けた学習過程と公開授業の内容について検討、当日の分担等について確認した。
4	11 / 11 本成寺中学校	11	○「1年次公開授業」 授業者：米山國男 単元：防災教育「防災に関わる未来への提言」 ・公開授業を行い、学習過程・授業と主題の関わり、次年度に向けての課題について話し合いを行った。
5	1月中旬（予定） 本成寺中学校		○「1年目の成果と次年度への課題、運営計画について検討」

様式③ 指定研究 経過の概要報告書

令和3・4年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

15部会全県部長 保科 賢一郎

報告者氏名 樋口 剛
(学校名: 佐渡市立金井中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 総合的な学習の時間

2 郡市名 佐渡市 3 会場校 佐渡市立金井中学校

4 研究主題

探究的な見方・考え方を働かせ、地域の課題の解決を目指す総合的な学習

5 主題設定の理由

平成18年策定の「佐渡市学校教育基本構想」を受け、市内小中学校では「佐渡の未来を拓く人づくり」に取り組むこととし、「郷土を愛し、夢と誇りを持つ教育の充実」という目標を掲げて、総合的な学習の時間に『佐渡学』を組み込んだ。当校では、1年生の地域文化体験（佐渡おけさ・民話・能・日本舞踊・文弥人形）、2年生の職場体験、3年生での修学旅行や能体験を、「地域の人・もの・歴史文化との関わりを通して自らの生き方を考える学習の時間」と位置づけて継続してきた。

当校のこれまでの学習活動を新学習指導要領に照らしてみると、以下のような課題が浮かび上がってきた。まず、「活動が既存の（計画された）体験活動に偏っている」ことが挙げられる。そのため、体験するだけ、身につけたことを披露するだけの発展性のない学習に陥っている。そして、自分の意見や考えが課題設定に結びついていないため、課題に対する探究意欲が希薄になっている。

また、新学習指導要領に謳われている下記の三つの柱

ア「何を理解しているか、何ができるか」（生きて働く「知識・技能」の習得）
イ「理解していること・できることをどう使うか」
（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成）
ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」
（学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

のうち、地域の現状についての知識に偏重した内容になっており、そこから社会貢献や自己の生き方に思考をつなげ、主体的に学びに向かう姿勢に結びついていないことが挙げられる。

そのような実態に対処し、新学習指導要領のねらいに沿った「佐渡学」への改善を目指すこととした。

6 研究の方法と内容

前述の課題を踏まえ、地域の実情と新学習指導要領に対応した内容に結びつけるため、当校の「総合的な学習の時間」の目標を、新たに次のように定めた。

探究的な見方・考え方を働かせ、佐渡の人・もの・ことに関わる課題の解決を目指す総合的な学習を通して、自己の生き方を考えることができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。
(1) 佐渡の文化、暮らし、進路等に関わる課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、学習対象

の特徴やよさ、それに関わる人々の努力や工夫に気付く。【知識・技能】

(2) 学習対象の中から問いを見だし課題を設定する力、情報を収集し分析する力を身に付けるとともに、考えたことをまとめ・表現する力を身に付ける。【思考・判断・表現】

(3) 佐渡の文化、暮らし、進路等についての探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を養う。
【学びに向かう力、人間性等】

令和3年度の取組として、1・2年生では既存の活動の内容を上記「目標」に合ったものに改善し、3学年では9ヶ年の「佐渡学」の集大成として、新単元の開発を行うこととした。

3学年の新単元では、佐渡観光に直接的に貢献することを大目標に掲げた。そして探究的な見方・考え方を働かせ、そのための具体的な方策「佐渡金山周辺の名所をPRする動画を作成し、YouTubeに掲載する活動」を通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指した。また、活動の中で、地域の課題に対して様々な視点から見つめ直すために、地元の動画編集者、佐渡観光交流機構、佐渡市長等、様々な地域人材との交流を取り入れて実践した。

7 1年次の成果と課題

目に見える成果として、生徒の「学び」の成果としての動画がYouTubeにアップされた。その制作過程において、ICTに関する知識・技能が高い生徒の活躍場面が多く見られたこと、生徒の動画編集技術の向上や評価の視点の拡充が見られたことなどが挙げられる。

さらに、「5 主題設定の理由」と関連するものとして、生徒が地域への誇りや将来に向けての思いをもつことができたことが挙げられる。活動を終えての生徒の感想（一部抜粋）を見ても、「内心は無理だと思っていた。しかし、…今では少しでも観光客が増えてもらいたいと感じる。」「今後も、佐渡が少しでも発展してほしいと思うようになった。」「まずは自分たちが佐渡についてよく知ることが大切だと思った。」「カメラで撮るより実際に見た方がきれいだったので、他の県の人に見てほしいと感じた。」といった思いが綴られていた。

公開授業の協議会では、生徒同士での批評の場面について、ねらいに応じた視聴方法やグループ編成などについての改善点が出された。また、他のグループから指摘されたままに修正するのではなく、自分たちのテーマやねらいに修正案が合致しているかを確認し、取り入れるか否かを検討することの必要性なども指摘された。こうした改善点について、次年度の学習計画に取り入れていきたい。

8 運営の成果と課題

関わった職員についても、情報担当の職員を中心に、個人用タブレットの操作法・活用法、該当地区の見所など、指導を通して生徒と一緒に学ぶことのできる活動になった。また、活動を進めるにあたって必要なソフトやICT環境など、次年度に向けての整備も進んだ。

反面、現在導入しているタブレットのスペック上の課題や、校内のWi-Fi環境上の課題など、より充実した学習活動を行うにあたって不足している面も確認できた。これらについて、市教委と連携しながら改善していきたい。

今年度、同様の活動内容が、市内の複数の小中学校で行われており、新聞等で紹介されている。新たな「総合的な学習の時間」の流れとして広まりを見せているが、今のところ学校間でのノウハウの交換がなされていない。今後、活動の充実や更なる広まりを想定したとき、市中教研の総合部会としても学校間の連携を視野に入れた取組を取り入れていく必要が感じられた。

資 料

- 1 部会名 総合的な学習の時間
- 2 郡市名 佐渡市 3 会場校 佐渡市立金井中学校

4 研究推進委員会（指定研究チーム）

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	佐渡市教育委員会・教育センター長	加藤雄一郎
(2) 研究推進責任者	佐渡市立両津中学校・教諭	堀田 直也
(3) 会場校責任者	佐渡市立金井中学校・教頭	岩崎 浩史
(5) 研究推進委員（授業者）	佐渡市立金井中学校・校長	香遠 正浩
	佐渡市立金井中学校・教諭	大木戸雅人（授業者）
	佐渡市立新穂中学校・教諭	小黒 淳一
	佐渡市立畑野中学校・教諭	山本美保子
	佐渡市立赤泊中学校・教諭	渡部 厚
	佐渡市立高千中学校・教諭	宮田 優美
	佐渡市立金井中学校・教諭	中川 一貴
	佐渡市立金井中学校・教諭	樋口 剛

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	ファシリテーションの主な論点・方法と成果
1	7月7日／金井中学校	10	○総合的な学習の時間で目指す「深い学びの姿」とその実現に向けて ・研究の概要について方向性を共有した。
2	11月9日／金井中学校	8	○「深い学びにいたる学び合い」の実現に向けた課程 ・プレ授業の協議を通して、今年度の成果と課題、改善策について検討した。
3	11月16日／新穂中学校	6	○「深い学びにいたる学び合い」の実現に向けた課程 ・公開授業の協議を通して、今年度の取組と成果の活用について情報交換した。
4			
5			